



# ラストーン

～失われた都より～

3

segakiyui

## 1.ダノマの赤い華

「ほんっとにしつこい！」

金属がぶつかり合う猛々しい音が響き渡る。

ネークの外れ、草原が荒れ地に変わりつつある赤茶けた台地で、ユーノ達はカザド相手に剣を奮っていた。

国からどんどん離れていくというのに、カザド兵は相も変わらずユーノの命と紋章を狙いにやってきている。

「はあっ！」

気合いをかけて飛び、ユーノは一人を切り捨てて走り出す。アシャ達もそれぞれに敵と相對し、レスファートは、と見ると、小さな短剣を胸にひきつけ、必死な顔でアシャの背後に庇われている。

(ごめんね、レス)

心で謝って、追いつがってくるカザド兵に振り返った。相手がぎよっとして立ち止まる一瞬に地を蹴り、側を駆け抜けざまに剣を閃かせて胴を薙ぐ。

穏やかに晴れた空の下、昼食を準備していた燃え上がる炎と日の光を剣が弾いて、周囲に閃光を走らせる。

「ぐうおっ！」

「ぎゃっ！」

できるだけ派手に徹底的に抗戦する。

そうすればカザドはこちらに目を引き付けられ、セレドへの干渉はその分力を弱めるだろう。

ユーノは厳しい表情で息つく間もなく次の敵を正面に見据える。じりじりと摺り足で距離を詰める相手の瞳もぎらついている。

(ただじゃすまないだろうな)

掴まったら最後、カザディノのところへ連れていかれるまでにどんな目に合うかわからない。生きて連れていかれたとしても、今までの恨みを込めて好きなように捌られるのは想像がつく。

(だが)

「甘い！」

ユーノの動きの鋭さは見知っているはず、それでもにやりと不愉快な笑みに顔を歪ませたのは、ユーノを倒した後に手に入る報賞、そこにはユーノを蹂躪することもあるのかもしれない。その妄想に気持ちが浮いてしまったのだろう、大上段に構えて突っ込んでくる相手に一声叫んで軽々躲し、下から突き上げた剣先で相手の喉を掻き切ってすり抜ける。潰されたような悲鳴はすぐに濡れた呻きで途絶え、背後に倒れた男を振り返りもしないユーノはすばやくアシャ達を振り返って、ほとんど始末がついていることを確かめた。台地をごろごろと転がる死体を軽い足取りで避けながら、アシャがレスの側に近づくのにはっとして、剣を納める。

「レス?!」

「じっとしてろ」

アシャが手早く荷物を探る間、イルファが懐から取り出した布で、細い脚の一ヶ所を強く押さえつけるのが見てとれた。慌てて駆け寄ると、おそるおそる顔を上げたレスファートが、痛そうにしかめた眉を必死に緩めて何とか笑みをつくろうとする。

「どうした？」

「隙をつかれてな」

イルファが布の下の傷を確かめ、一瞬止まりかけた血が再び溢れるのに、深いな、と眉を寄せた。

「アシャも俺も守り切れなかった」

「違うよ！」

レスファートが大きく首を振る。

「ぼくが、飛び出したの、ユーノ、ぼくが」

ごめん。

白い顔で泣きそうになって俯いてしまう。

「どうして謝るの」

ユーノはレスファートの側にしゃがみ込み、アシャが手際良く手当てにかかるのを覗き込む。

「謝らなくていいんだ」

「だって...」

悔しそうに唇を噛んだレスファートが、塗られた薬にひくつと顔をひきつらせる。

レスファートを出た時には滑らかに傷一つなく伸びていたレスファートの脚は、あちこちに掠り傷が増え、中には消えないだろうと思えるような傷もある。旅から旅への汚れが目立つ体には、かつての白いブラウスもなく、粗末な薄緑色のチュニック一枚、端がそそけた剣帯に無理矢理つけたような木の鞘に押し込まれた短剣は、さすがに人こそ殺していないが、防御のために相手の血に濡れたこともある代物、初めてそれを見たレスファートの顔に浮かんだ茫然とした表情をユーノは今でも鮮明に思い出せる。

「どう？」

「しばらく歩けないかもな」

アシャは難しい顔で見上げてきた。

「筋は傷めてないと思うが、治りが遅くなると後々、な」

「後々...？」

傷が残る、ということ、と尋ねかけて相手の表情の複雑さに気付く。

(そうか)

もっと深いところに届いていると、動き自体に問題が出る、そう心配しているのだ。

「...痛いだろう？」

不安そうにユーノを見上げているレスファートに尋ねると、

「ううん！」

慌てて首を振ってしがみついでこようとし、巻かれた包帯に傷が擦れたのが、身を強ぼらせる。その自分の傷みに何かを気付いたように、落ち着かぬ目をユーノ、イルファ、アシャへと次々動かして、レスファートは掠れた声でつぶやいた。

「ごめん...なさい」

ひく、と引きかけた声を噛み殺すように、傷ついた脚を抱え込み、丸くなる。

「レス...」

「日にち.....おくれるんだよね.....？ ぼくの...せいで...」

「レス」

「ぼく...また.....しっばい...して」

「レス！」

ユーノは鋭く叫んで跪き、小さな両肩を掴んで顔を上げさせた。涙に濡れた煌めく瞳に胸を締めつけられる。

「ごめん...ゆーの...」

唇を震わせて謝るレスファートを掬い上げるように見上げて微笑み、ユーノは囁く。

「レスが好きだよ？」

「.....」

「ボクもイルファもアシャも」

背後で何を当たり前のことを言っると、とまぜ返すイルファをごちん、とアシャのこぶしが見舞った音が響いた。

「謝るのはボクのほう」

「.....ゆーの...」

「怪我させてごめんね？」

「...っ」

びくつと震えたレスファートが大きく首を振る。

「守り切れなくてごめん？」

「ちが...っ」

「もっと大事にしてあげられなくて、ごめんよ？」

「ちがう、ちがうっ、ユーノ！」

しゃくりあげながらレスファートが飛びついてしがみついでくる。

「ちがう、ちがう、ユーノ、ちがう、ぼくだって、ぼくだって」

旅、してるんだ、ぼくだってちゃんと、旅、してるんだ、ぼくのけがは、ぼくのせい、だからユーノはあやまらなくていいんだ。

泣きじゃくりながら訴えるレスファートの頭を撫でながら、ユーノは尋ねる。

「レスはボクが怪我をした時、早く先へ行きたかった？」

「っ、っ、っ」

レスファートが激しく首を振る。

「ユーノ、ユーノが、げ、げんきに、なって、なって、くれ、くれて」

また一緒に旅をして。

「は、はやくっ、じゃ、なく、って」

みんなで、いっしょに、こうやって、がんばって、わらって。

途切れ途切れに、それでも必死にことばを継ごうとして、レスファートは顔を真っ赤にして言い募る。

「ぼく、も、いっしょに、いたっ、いたっ、だけ...っ」

「そうだよな？」

ユーノはレスファートを抱き締め、髪に頬を擦り寄せる。

「ボクも同じ」

どうやらユーノにまかせておけばよさそうだ、そう判断したらしいアシャとイルファが、カザドの襲撃で乱れてしまった野営の場所を整え、ごろごろ転がってる死体を台地の向こうへひきずっていくのを見ながら、ユーノはつぶやく。

「ボクも、レスと一緒に居たいよ？」

「.....」

「みんなと一緒に旅したい」

危険があって、十分な食事もない、雨風に苦しむこともある、それでも一難過ぎ去ってお互いの顔を見遣って笑う、無事でよかったと相手を振り向く、この一瞬がどれほど得難いものなのか、ユーノはよく知っている。

「ずっと、一緒に」

ぎゅっとレスファートがしがみつくと手に力を込めた。うんうんと大きくうなずき、体を擦り寄せてくっついてくる。

そうだ、ずっと一緒に。

こうやって命の果てまで、みんなで旅を続けられたら。

今ユーノはそう思っている自分に気付いている。

それでもいつか、旅は終わる。

(サルト)

失ってしまった命を、今なお愛しく思い出す。

ユーノは眉を寄せて、潤みかけた視界を堪える。

『ラズーン』に着くのか、どこかの地で果てるのか、それは誰もまだわからないことだけれど。

それでもいつか、旅は終わりを迎えるのだ。

「だからさ、レス」

傷ついたら治しながら、怯んだら速度を落として、迷ったら一緒に彷徨い、次の一步を捜しまわって。

「怪我を治して一緒に行こう。怖いことがまだいっぱいあるかもしれないけれど」

それでもレスと一緒に行ってほしいんだ、これはボクのわがままだけ。

抱きかかえた温かな体をゆっくり宥めるように揺らすのは、遠い昔に寝かしつけられた時の記憶だろうか。

「ボクのわがままを、きいてくれる？」

「.....」

「レス.....？」

くう、と小さな吐息が聞こえてユーノは瞬きした。

そう言えば、急にずしりと重くなった気がしていた。

肩にしがみついていた手が滑り落ちてだらりと揺れ、くうくうと明らかな寝息が耳元で響く。

「.....おーい...」

寝ちゃったのかよ。

確かに昼飯前で大立ち回りの後に怪我をして、心身ともにくたくたになってしまったのだろう。

(レスのためにどこかでちょっと休めないかな)

溜め息をつきながら、ユーノはいっしょ、とレスファートを抱き上げる。

「落ち着いたか？」

気付いたアシャが立ち上がった。

「泣き寝入りしちゃった」

「ああ……なるほど」

レスを抱えたまま火の側に戻ってくると、イルファがいそいそ楽しげに肉を火に炙っている。

「久々に干し肉から解放されるぞ、いいのが手に入ったからな～」

今の今までカザド兵を倒し回っていたのをけろりと忘れた顔で、肉の焼け具合を確かめる。まだ漂っている血の臭いもイルファの食欲を減退させられるほどのものではないらしい。

苦笑しながら、今ボクはいらないよ、と断って、レスファートを抱えた状態で腰を落とす。

「アシャ」

「ん？」

「どこかの街に入れないかな」

「……レスか」

「うん。ちゃんとした寝床で休ませてやりたい」

「うむ」

アシャは頭の中の地図を探るように、揺れる炎を見ながら考え込んでいる。パキッと木が弾ける音が響いて、炎の中に金粉が舞い上がった。ゆらめく炎は乾いた空気を伝わるように、上へ高く伸び上がり、慌ててイルファが火の進路から肉片を庇う。

「少し遠回りになるが、この近くにダノマという大きな街がある。そこなら設備が整った宿も見つかるし、手当てに必要な薬草も一通り揃うだろう」

「じゃあ、そこに寄ろう」

ユーノはうなずいた。

「そこでレスの傷をしっかりと治して」

「旨いものも売ってるか？」

がぶりと肉に噛みつきつつ、イルファが尋ねる。渡された器から中身を掬い上げながら、アシャが呆れたように肩を竦めた。

「お前の興味は食べ物だけか」

「違うぞ」

イルファが心外だと言いたげに目を丸くした。

「まず第一にレスだろ。二つ目はアシャのこと、三つ目が食べ物だ」

「おい」

「主君に友人、己のことは最後なんだぞ、たいしたもんだろうが」

お前の心配に世界の行く末は入っていないのか、とアシャに突っ込まれて、

「そんなもの、俺が生まれる前からあるのだ、俺が心配できるようなものではない」

「真理だね」

ユーノは思わず笑ってしまった。

「しかし」

呆れ果てた顔をしたアシャが一瞬微かに苦笑して、ユーノは見とがめる。

「何？」

「お前の無茶は自分のことだけか」

「え？」

「怪我をしたのがお前だったら、ダノマに立ち寄ることを納得したか？」

「あ～……………して、ないかも」

「だろう？」

「でも、レスは子供だし！」

「お前だって、俺からすれば子供だぞ？」

「う」

(アシャから見れば、私は子供、か)

恋愛対象どころか、今ユーノの腕に抱えられているレスファートみたいなものなのかもしれない。

「ちえ」

「にしても、よく寝ている」

「っ」

ふいとアシャが体を近付けてきてどきりとする。

この前の夜の膝枕以来、どうも一定の距離より内側に入ってくられると、無意識に皮膚がちりちりするような気がする。

敵に対しての警戒とか、危険に対する防御とは違う、あえて言えばアシャの持つ周囲の空気に、自

分の体が勝手に迎え入れてしまうような感覚。

(迎え入れっ...)

自分の考えたことばに一気に顔が熱くなった。

(馬鹿、何を意識して)

何を、と考え、またそこに集中したとたん、熱くて柔らかな匂いを感じ取って瞬きする。いつの間にかレスを間に包み込むようにアシャが近付いていて、ユーノの髪に相手の吐息が触れるほどになっている。

「あ」

しゃ、そう呼び掛けて見上げたユーノを見下ろした紫の瞳が、一瞬妙に鋭い光を放って細められた。まるで獲物を狙う獣のようだ、そのまま視線で裂かれそうだ、そう感じ取った瞬間、

「おい」

ぶすりとイルファが唸った。

「何やってる」

「何っ、て」

「何って」

ユーノのことばを遮って、アシャがすうっと体を離れた。

「レスの状態を見てるんだろうが」

「レス？」

俺にはユーノに異常接近してるとしか思えなかったぞ？

イルファがふて腐れた顔で続けるのに、アシャがしらっとした顔で応じる。

「お前でも床に臥せったらちゃんと見てやる」

「え、そうなのか？」

じゃあ俺でも怪我とか病気とかで寝込んだら、お前が手取り足取りすべていろいろ面倒みてくれるんだな。

嬉しそうに笑顔になるイルファに、誰がそんなことまで約束した、とアシャが眉をしかめて器に新たな肉を放り込む。

(そう、なんだ？)

それを見ながらユーノはどきどき弾んでいた心臓が一層速度を上げたのに気付いた。

(もし、また怪我したり、病気になったり、たとえば死にかけたりしたら)

アシャはさっきみたいな距離ですっと付き添ってくれるのだろうか。

(なら、多少の無茶もしいがある.....って！)

私は何を考えてるんだ。

ユーノは熱くなった顔を慌てて俯いて、レスファートの調子をみているふりをした。

レスファートの傷を庇いつつ移動して翌々日、ダノマの街は見事な緑青色の石造りの門と、側に立つきらびやかな衛兵で4人を迎えた。

「旅人か？」

門の少し手前で馬から降りたユーノ達に、緑のマントを翻して衛兵の一人が近付いてくる。銀の鱗状の金属片を綴りあわせた鎧に、明るい日射しがはねている。

「ラズーンのもとに」

アシャが慣れた挨拶をするのに、相手はまばゆそうな目をして笑った。

「これは.....なんと見事な客人だな」

快活な声をかけてきながら、腰についている剣を押さえて詫びるように肩を竦めてみせ、

「すまないな、常ならここまでの警戒はしていないのだが、今日は特別な日なのでな」

「特別な日？」

「ああ.....ダノマの赤い華と呼ばれる美人が、ここに居城を構える、国の第三王子に嫁ぐんだ」

男の顔が寂しそうに翳った。浅黒い男らしい顔だちに滲むのは、優しく切なげな表情、アシャが何ごとか察したように頷く。

「なるほど特別な日だ」

「そうとも」

ふっきるように応じた男は、アシャからイルファ、ユーノ、レスファートへと視線を動かした。

「ところでどういう関係なのだ、兄弟、にしては顔が似ていないな」

「ああ、それぞれに母親が違う」

しらっと返したアシャに男はなるほどなあ、父親はよほど稼ぎがよかったのだな、と素直に応じた。

「実は父親も違うのだぞ」

「なるほど……と、待て、それは兄弟とは言わないだろう」

イルファが口を挟んでようやくはたと我に返る。

「けれど互いに支えあって旅をしている」

「う、む」

なら家族と言えるかもしれない、とこれまたまっすぐな回答だ。

「一番末の者が怪我をしたので、しばらくここで養生しようと思っている」

「そうか……長くなりそうなのか？」

男はゆっくりとレスファートに歩み寄った。物おじせずに自分を見上げる澄んだ瞳に嬉しそうに笑み返す。

レスファートはぺこりと頭を下げて、丁寧に挨拶した。

「ラズーンのもとに。あなたにとってよき日でありますように」

「おお、偉いぞ、坊や」

男が破顔してぐるぐるとレスファートの頭を撫でながら包帯の巻かれた足を覗き込む。

「名前は？　そこか、怪我をしたのは」

「レスファート。でもみんなレスって呼ぶよ」

親しげに振る舞われて、レスファートも笑み綻んだ。

「かなり大きな傷だな……歩けないのか？」

「すこし、ひきずってなら」

「……どうしてこんな子供がこれほどの傷を？」

「ボクが無茶をしたんだ」

ユーノは溜め息まじりに口を出した。ここへ来るまでに何度か答えた内容を繰り返す。

「剣の稽古をつけてやる一って、考えもなく、さ」

「おまえが？」

男が呆れた顔になる。

「『幼子の道案内で真昼に迷う』だぞ。たいした腕もないのにそんなことをするからだ」

説教口調で眉を寄せた。

「今度おじさんにも稽古をつけてあげようか？」

格言を口にした相手に、ユーノは肩を竦めてみせる。

「ははあ、なるほど……えらく跳ねっ返りだな、あんたの弟は」

男が苦笑しながらアシャを振り向く。

「そうなんだ、こいつの母親というのがまた強気な女で」

アシャが頷いて笑う。

「『草猫の激怒』のような女性だった」

「『草猫の激怒、砦を焼く』か。いるよな、普段は大人しいのに、かっとなると暴走する種類の女は」

「無茶ばかりして困ってる、何ならもうちょっと説教してやってくれ」

誰を思い出しているのか吹き出した男は楽しそうに続けた。

「なるほど、じゃあ弟の気性は母親譲りなんだな」

「『母親の血は父親に優る』ってやつだ」

俺達はこんなに穏やかな気性なのにな、と付け加えたイルファに男が瞬きする。

「『母親の血』？　そんな格言あったか？」

「今俺が作った」

「覚えてろよ」

ぼそりとユーノがつぶやくのに男がまた笑い出す。

「まあ、ここでは多少大人しくしていてくれよ、とにかくダノマへようこそ、と言いたいところだが……さて宿があるかな？」

「え？」

「今言った通り、今日は特別な日だ。近隣から多くの人間が集まっている。街の宿はほぼいっぱいだぞ」

「うーむ」

さすがに予想外だったのだろう、アシャが唸って眉を寄せた。

頭の中で素早く他の街をあたって顔でしばらく考え込んでいたが、ほ、と小さく吐息をついて諦めたように首を振った。

「せめてちゃんと眠れる場所さえあればいいんだが」

「野宿、というのも数日は無理だぞ」

男は心配そうにレスファートを見た。



「王族の婚儀だ、俺達も巡回警備を申し渡されているし、怪しげな者を見過ごすわけにもいかん」

「街を出るか？」

イルファが鬱陶しそうに頭を掻いた。

「必要なものを調達して？」

「しかし」

「.....もし、よければ」

男は静かに口を挟んだ。

「あまりきれいな所ではないが、俺の家に来ないか。この子の怪我也気になるし、街の外をうろつかれて不愉快な連中と揉め事を起こされても困る」

そう言いつつ、男の視線はユーノの方を眺めている。

「十日ぐらいなら文句を言う者もない。両親は死んでいるし、妹と二人暮しだ。この数日の警備の間、ひよっとすると碌に家に戻れないかも知れないから、一人にしておくよりは賑やかでいい」

「そりゃ、ありがてえ！」

こちらが与太者だったらどうするのだと思わず突っ込みそうになったユーノを遮って、イルファが満面笑顔になった。

「食べ物さえもらえるなら、家の仕事も手伝うぞ、何でも言ってくれ」

「イルファ！」

「ははは、それは頼もしい」

男は明るく笑って門の中を振り返り、正面の道を二区画行って右に曲がったところ、大きなジェブの樹があるから、すぐにわかる、と自分の家を教えた。

「それでは、遠慮なく甘えさせてもらう」

「問題がなければ、今夜は交代して一度家に戻る。それまで適当にやっていてくれ。俺の名はアオク、ジェブのアオクと呼ばれている」

「俺はアシャ、こっちがイルファで、そっちがユーノだ」

「わかった、跳ねっ返りがユーノだな、覚えておく」

アオクは悪戯っぽく応じて、後でな、と手を振って、次の旅人に向かっていく。

「いい人でよかったね」

嬉しそうに言ったレスファートをもう一度馬に乗せ、手綱をゆっくり引きながらユーノは頷いた。

「足は？」

「だいじょうぶ.....前より強くなったでしょ、ユーノ」

「うん」

誇らしげに胸を張るレスファートに笑い返し、側で妙にむっつりしているアシャに気付く。

「どうしたの？」

「あいつ、ユーノの名前だけ再確認したな」

「うん、それが？」

どういふつもりだ、と何だか陰鬱につぶやく相手に首を傾げた。

「どういふつもりって...」

「そりゃ決まってるだろ」

イルファが不思議そうに応じる。

「放っておくと何をしでかすかわからない跳ねっ返りだからだろ。『草猫の激怒、砦をぶっ壊す』ような」

「違うって」

「しかし、まあ賑やかなところだな」

ユーノがぶすりと言い返したのを気にした様子もなく、イルファはきよろきよる周囲を見回した。

「まあな、ここはいつも賑やかなところだよ」

アシャが気持ちを切り替えようとするように頷く。

「いつもって.....前にも来たことがある？」

「俺の仕事を忘れたのか、ユーノ？」

にやりと笑って見返してくる瞳はきらきら鮮やかに輝いている。

「ラズーンのもと、旅に身を委ねるアシャと申します、様々な国、様々な人々の間を巡り、生涯をかけてたった一人の相手を探しているのです」

後半は即興の台詞だろうが澄ました口調は滑らかそのもの、なるほどその手で女を口説き落としていたのか、とイルファが納得したように頷いた。

「しかしなあ」

「何だ、まだ何かあるのか」

「ここはダノマだぞ？ お前の旅装は知ってるし、馬も何もなかっただろう？ その袋一つで旅をしていたと言ってたが、その袋に入っていたのも医術具に下着程度……よくこんな所まで動き回れたなあ。旅人の話を俺も聞いたことがあるが、よほどの歳でも国にして六、七つ、お前ぐらいの若さじゃ徒歩なら四つ……五つが限度じゃないか」

「徒歩ならな」

アシャは奇妙な笑みを浮かべた。

さりげなく表情を隠すように目を伏せると、金の瞳に日射しが跳ねて幻のように目元を霞ませる。

「だから徒歩ばかりではなかったということさ」

「馬か？ 竜か？ いやそれをどうやって調達……ああ！」

イルファが大きく頷く。

「女か！」

「おい」

「なるほどなあ、女はどこにでもいるからな！ 女経由で何でも手に入るってやつだな！」

「待て」

「いや、お前の場合男でもいいか！」

「……イルファ」

それ以上続けると往来で晒しものにしてやるぞ、と低い声で唸ったアシャにユーノは吹き出す。

「ユーノ……」

「ごめん、いや、確かにありそうだと思うって」

「……おい」

ユーノの応対にアシャが一層どんよりとした顔になった。そこへ、

「ほら、ユーノ、見て、あれ！」

レスファートが嬉しそうに声を上げて、少し先を指差した。

荒い布目の黄土色の天幕（カサン）地を地面に立てた四本の棒に張り、異国から来たらしい高価な布を並べている女が居た。色とりどりの布地に、不思議な郷愁を呼び起こす紋様、花卉一枚一枚を細かく描いた図柄などが鮮やかに散りばめられている。金糸銀糸の縫い取りがある白い布を肩に掛けて見せながら、女が気を取り直したように声を張り上げた。

「さあさあ、これをごらん！ 何と遠くソクーラの街、ネデブの里からの織物だよ。ソクーラの娘の気立てのように柔らかくて、ネデブの男より強いんだよ。この色は天上都市ラズーンの神々の肌に優るよ！」

誇らしげに輝く笑顔は商品に絶対の自信があるのだろう。豊かな胸元を覗き込もうとする男を軽くあしらいながら、ふわりと布を翻してみせる。

「こいつはどうだい！ この艶！ この形！」

その隣で、黒い肌にはしばみ色の瞳を光らせた男が喚いている。

「マルランからの陶磁器だ。この青はラズーンの空よりも美しいと言われてる！ 贈り物に最適なのは言うまでもない、恋人にお上げ、そこの人！」

呼び掛けられた娘がひよいと肩を竦めてみせる。

「誰かがいりゃあね」

「そりゃいるさ」

「いれば、こんなところでサークを織ってないわ」

周りに居た人々が娘の軽妙な返しにどっと湧く。『サークを織る』とは暇つぶしをする、の意だからだ。

「トカルの民芸品だよ！ 買ってみればよくわかるよ！ この木馬の彫りはトカルの手先一番の職人が彫ったよ。子供の健康をラズーンに祈って作ったよ。色を彫り込める技はトカルだけだよ！」

同じような別の天幕（カサン）地の陰の下で、あぐらを組んだ少年が両手に小さな木彫りの馬を握って振り回しながら、声を励まし叫んでいる。木馬のたてがみに植えつけられた白い毛が鮮やかな緑や赤や青の模様に乱れる。

その横では、

「ディスティンの絹織りはいかがかな。この青と紫のレースはどうじゃ。上品で優しい婦人には、これに優るものはなし」

白い鬚をしごきながら白髪の上に茶色の布を巻きつけ、薄茶色の布で体を包んだ老人が、よく通る声で呼び掛けている。

「この首飾りを御覧よ！ 金と銀の透かし彫り、キャサランからはるばる野を越え山を越え、幾百日もかかって運ばれてきたものだ！」

「アグナイの粉だよ！ 白くてさらさら。まじりっけなし！ 料理によし、お菓子によし、味は絶品、皇宮の料理長が使ってる！」

「シラカの宝石は私しか売ってないんだよ！ 海の碧、空の青、夕焼けの朱とバラ色、山の紫に泉の白垂を封じ込め、天の祈りと地の恵みの中でゆるゆると育てた宝石だ！ この深みをごらん！ この輝きをごらん！」

道の両側一杯に店を広げた物売りの声の中を、四人はきよろきよろしながら進んでいく。行き交う人々が慌ただしく道を横切り、少し広い通りを馬に乗った旅人がすれ違っていく。様々な服装、様々な顔が明るく活気に満ちた街に溢れ返っている。

「う……ふう…」

教えられた通り、二区画行ってから右の小路へ入ったユーノは、興奮で高ぶっていた気持ちを吐き出すように吐息をついた。

「すごい人だったねえ」

はしゃいだ声を上げるレスファートの頬も紅潮している。

「ぼく、あんなの見たの、はじめて」

王子様育ちのレスファートにとっても、何もかも珍しい物ばかりだったらしい。

トカルの民芸品は噂にも聞かし、レアナにキャサランの金細工やシラカの宝石を買い取った王族はいるけれど、それがこんなに無造作に溢れるように売られているとは、ユーノも想像しなかった。

周囲の熱気に煽られてやや猛りがちなヒストを引きながら、レスファートを見上げて苦笑する。

「すごかったな。夜もあれなら眠れないかもしれない」

「食べ物の店が意外に少なかったな」

イルファが残念そうにつぶやく。

「婚儀だからな、街路が汚れないように手配されているんだろう」

アシャが苦笑する。

「なんで街路が汚れる」

イルファが納得できないように首を傾げる。

「食い残しとか捨てるやつが」

「食い残すやつの気がしれん」

「お前のようなやつばかりなら、食べ物屋も気が楽だろうよ」

アシャが肩を竦め、ユーノはくすくす笑う。

「こっちへ入ると一気に人通りが少なくなるね」

「あ…あれだよ、ジェブ」

レスファートが指を指す。

通りの右側に、確かに道の中央近くまで枝を伸ばしているジェブの樹がある。その奥に立派な石造りの建物があつた。

「なかなかいい家だ」

イルファが感心して頷く。

この街で一番よくある緑青色の石をふんだんに使った平屋、通りに面した部分は日射しに満たされた明るい庭になっている。建物の壁は植物の浮き彫りをほどこした上品ながら凝ったもの、玄関の右、通りの近くに、ジェブが黒く見えるほど深い緑の葉を繁らせている。

玄関の左には馬繫ぎになっているらしい緑色の石柱と手摺がある。それに手綱を結びつけながら、ユーノは建物に人の気配がないのに眉を寄せた。

「留守かな」

「別に留守でいいんだろ、入ろうぜ。アオクがいいと言ったんだし、俺は腹が減った」

「おい」

アシャが止める間もなく、イルファがずかずかと家の中へ入っていく。建物の立派さのわりには戸締まりもたいしてしてなかったらしく、あっさり扉を開いて踏み込むイルファに、アシャが慌てて後

を追うのを見送って、ユーノはジェブの樹を振り仰いだ。

「大きいね」

脚を引きずりながら、レスファートをがそちらに近寄っていく。

高く伸び上がる滑らかな枝、日射しを浴びて温かそうに輝く幹に触れながら、ユーノを振り返った。

「ぼく、ならったことあるよ、二年に一度、赤い花をつけるんだ」

深い緑の、僅かに丸みを帯びた肉厚の葉の隙間から、木漏れ日がレスファートの髪を淡いクリーム色に光らせる。

「ボクは違うことを知ってるよ」

笑ってユーノは手を伸ばし、葉を一枚ちぎり取った。軽く表面を服に擦って唇に当てる。薄く開いた唇から息を吹き出すと、微かなまろい音が零れるように響いた。

「わ」

レスファートが顔を輝かせた。

目を伏せて、ユーノは幼い頃に聞き覚えた素朴な曲を吹いた。単純な音律が繰り返し、微妙な揺れをまといながら空気を震わせて広がっていく。繰り返し、そしてまたもう一度。

「すごいや。どうして？ ね、どうして鳴るの？ どうして鳴らすの？」

レスファートがわくわくとユーノの手元を覗き込んできた。

「うん、ほらこうして、ね」

びちりと音をたてて、ユーノはもう一枚、レスファートに合う大きさのものを選んで、ジェブの葉をちぎった。

アシャの与えた痛み止めが効いているのだろうが、脚の痛みを忘れたように目を輝かせてユーノを見上げるレスファートの口に、葉の表面を擦ってから当ててやる。

「ここを押さえて」

「ん？」

「そうそう、そのまま息を吹き込んで」

ぶひゃあっつ。

「ふえ！」

「ふふっ、もう少し鋭く吹き込まないと」

ぶふーっ……びいーっ……ピューっ……

「うん、その調子」

『ユーノさま、お上手ですぞ』

ふいに声が耳の底に蘇る。

(ゼラン)

嬉しそうに笑った鬚面、見上げるとさすがはユーノさま、何でも覚えが早くておられる、と目を細めて見下ろした。

『ゼランも誇っております、よい方に仕えられた、と』

葉笛を教えられながら、ゼランの望むことを為せたのが嬉しくて、ユーノも誇らしく笑み返した。施政に忙しく、また安定を深く願う父親は、ユーノの成長をどこか離れた距離でしか見ていない。その代わりのように、ユーノに戦い方を教え、人の従え方を教え、統率することを教えてくれたゼランはまた、心を慰めるものも教えてくれた男だった。

「……」

胸に広がる冷え冷えとした傷み、あの笑顔も優しいことばも、全ては幻だったのだろうか。ユーノにこの葉笛を教えた時さえも、ゼランは何かを秘めてユーノの命を狙っていたのだろうか。

(でも、もういない)

なぜかゼランを恨む気にはなれなかった。

静かに葉笛の旋律を繰り返す。

今はただ哀しい。

何が悪かったのかわからないまま、隔てられて失ってしまったものが、懐かしく愛しい思い出にも繋がっているとわかって。

「きれいだね……ユーノ…」

溜め息まじりにレスファートがつぶやいて我に返る。

「ん？」

自分を見上げる素直な目の色に瞬きする。

「何が？」

ジェブの葉は確かにつやつやと美しい、そう見上げた耳に、

「なにもかも……音も……曲も……ユーノもとってもきれい……」

「っ」

思わず振り向くと、レスファートはうっとりとした表情で繰り返す。

「ユーノがとってもきれい…」

「あ、ありがとう」

かっとうのあたりまで熱くなった気がして、まいったなもう、とつぶやきながら、ユーノは幹にもたれていた体を起こした。

「お礼に何か楽しいのを吹こう」

急いで頭の中から拾い出したのは明るい舞曲、簡単な動きを繰り返す夜会によく使われるものだ。

(そういえば私)

この踊りの男役しか知らないんだっけ。

まだ夜はだめだと制されてむくれるセアラの相手を勤めて、広間から離れた庭で踊った。

『姉さま、もっと』

セアラがねだる。

『もっといっぱい踊らせて』

広間の不細工な男より誰よりも姉さまがいい、だってこれほど見事に踊らせてくれる。

セアラの紅潮した笑顔がレスファートに重なる。

(無事でいて)

どんな危険も引き受ける、だからどうか。

(笑っていて)

大事な大事な愛しい人々。

どさどさどさっ！

「！」

レスファートがびくっとして、物音に振り向いた。

葉笛を止めてそちらを見ると、手にしていたらしい包みを見事に全部、玄関に続く石畳に落としてしまったらしい娘が突っ立っている。よく見ると、さっき商人と『サークを織って』いた娘だ。

「あ」

「ご、ごめんなさい！ もう、私ったら！」

娘はユーノの視線に真っ赤になって、慌てて散らばった包みを拾い上げ始めた。

「あんまり綺麗な音だったから」

つい、見惚れてて、そう言いながら、もっと多くのことを言いたそうにユーノを見つめる。

「あの」

君はひょっとしてここの、そう言いかけたユーノのこぼれを遮るように手を振って、娘はくると薄紫のドレスの裾を翻した。急ぎ足に玄関に向かいかけ、はっとしたように肩越しに笑みを零す。

「あの、ジェブの葉、お好きなだけどうぞ！」

それだけ言うと、ますます赤くなって家の中へ駆け込むように入っていく。

「ユーノ、あれ」

「うん、アオクの妹って……あ」

今家の中には、アシャとイルファが。

「まずいよね、ちょっと、あの」

「きゃああああっ！」

何よあんた達、ここを近衛隊長アオク・デシュランの家と知ってるのっ！

悲鳴に続いてあがった罵倒とがしゃんっ、と何かが投げつけられたような音に、ユーノは思わず首

を疎めた。

「はははは...」

「もう...笑いごとじゃないわよ、兄さん！」

アオクの妹ラセナは、膨れっ面で夕食の席を片付けながらぼやいた。

「とんだことだったな」

上品に微笑むアシャに親しげに笑いかける。

多くの人々の例に漏れず、アオクも見る間にアシャを古くからの知己のように扱いつつあった。

「びっくりしたよ。美しい御婦人が入って来たかと思ったら、たちまち悲鳴だ」

ラセナになっこり笑みを向けた。

「だって.....誰もいないと思ってたんですもの」

そりゃ、兄さんが守ってるこの街は安全だと信じてるからだけど、と唇を尖らせ、まだ食卓についているイルファが皿から肉の最後の一切れを摘み上げるのを待つ。

「ふうー、食った食った。うまかったですよ、ラセナさん」

「ありがとうございます」

イルファの開けっ放しの贅辞に嬉しそうに笑い返し、これだけお皿が綺麗になったのは初めてかも、とくすくす笑った。

「ところで、ずいぶん長い旅をしているようだな」

アオクが食後の酒をのんびり含みながら尋ねてくる。

「うむ、実はラズーンまで行く」

どこから、ということばを巧みに逸らせてアシャは頷いた。セレドからここまで、もう既にかかなりの距離がある。かかった日にちを考えれば、驚くほど早く移動しているのは、ユーノ達の旅慣れもあるが、アシャの選ぶ道筋が並外れた正確さでラズーンへの道を辿っているからに他ならない。

それだけの道をなぜそれほど無駄なく選んで進んで来れたのか。

そう質問されるのを避けたのだ。

だが、返ってきたことばはアシャの警戒を軽く越えていた。

「おまえ達もか！」

「？」

「この国からもハイラカという少年がラズーンへ向かって旅立った。話によれば、ラズーンからの使者が来たとのことだ」

「そいつも王族なのか？」

イルファが興味を引かれたように尋ねる。

「いや、違う。だが、あちらこちらの国からラズーンへ向かっているようだな。ダヤン、オグトラからもラズーンへ発った者がいると聞く」

「.....」

(やはり、そうか)

『銀の王族』は地位の高いものとは限らない。安全で幸福で安定した暮らしを保証できるとあれば、民の間にまぎれさせることもある。だが、民の間においては、完全に保護できないのも確かで、言い換えれば、それはハイラカの重要度がそれほど大きなものではなかったと言える。

(なのに、そんなところまで『銀の王族』を集めるとは.....かなり酷い状態なんだな)

自分の表情が険しくなるのを感じて、アシャは意識的に目を細め笑みを作って、アオク同様渡された杯を唇に当てた。数々の女性や男性をも魅了した表情で相手を一瞬見遣り、いかにも無邪気に頷く。

「なるほど...」

「おまえ達もラズーンの使者に呼ばれたのか？」

「いや、気紛れな旅だ」

さらりと流す。

「世界の中心、ラズーンを見てみたいと、あの跳ねっ返りがごねてな」

「ついでに可愛い娘や旨い食べ物にありつけばいいと」

イルファが付け加えて豪快に笑う。つられたようにアオクも、それは男の夢だよな、と笑いながら、「そういえば、あの気の強い弟はどこへ行った」

「はい、どうぞ」

イルファの前にも酒の杯を置いたラセナが一瞬動きを止めたのに気付く。うっすらと赤くなった頬、同じく染まった耳が、アオクのことば一つ一つを聞き取ろうとするように緊張している。

「ああ、レスの手当てだ」

「大丈夫なのか、あんな子供にまかせて」

「大丈夫だ、あいつはそういうことにも長けているし」

頷きながら答えてラセナの耳がどんどん赤みを増していくのを眺めた。

「子供扱いしてるとやられるぞ」

「あんな子が？」

アオクは心底不思議そうに首を傾げる。

「線が細すぎて神経質すぎるように思えたぞ。あの馬だって、気の荒らそうなのをよく乗りこなしていると思ったぐらいだ」

「ところがだ！」

ぐいとイルファが身を起こし、膨れ上がった腹に、う、と妙な顔で唸る。

「お前は知らないだろうが、俺達の国の近くにカザドという性の悪い国があつてな。兵士とは名ばかりのごろつきどもだが、そいつらをたった一人で二十数人倒したことがあるのだ」

「ほう...？」

アオクが面白そうに瞬きした。

「あの細腕で？ 腰も抱え込めるほどに細いようだったが」

「...」

なんでそこで『腰を抱え込める』表現がでてくる、とアシャはねじ曲げかけた口で急いで酒を含む。唇に滲んだ温もりに、自分がなぜ苛立っているのか理解してうんざりした。

「とにかくあいつは強いんだ。今に俺のような立派な剣士になる！」

「へ、え」

イルファが誇らしげに胸を張り、弟バカは可愛いなど言いたげなアオクにアシャは苦笑した。

「すまない」

「いや...あんたが長兄なのだろうな？」

アオクはちらりと視線をよこす。

「苦労してそうだ」

「わかるか」

「わかる」

跳ねっ返りの身内は困ったものだ、と続けたアオクが、皿を運んでいくラセナの後ろ姿を見遣り、何となくほっとした。

(そうか、妹と重ねたのか)

「身内もそうだが、気の強い女は困る.....が」

だが、すぐにアオクが柔らかな口調で続けた。

「時にひどく愛おしい」

「.....」

それはどういう意味なのだ。

ユーノを弟と紹介しているのを一瞬忘れかけて尋ねそうになったアシャを、いきなり激しく戸を叩く音が遮る。

「失礼」

アオクが険しく眉を寄せ、椅子から立ち上がって戸口へ向かった。

「誰だ」

低く重い誰何に若い声が叫ぶ。

「エナムです！ エキオラ様のことで！」

「エキオラ?!」

はっとしたように叫び返したアオクが急いで戸を開け放つ。

髪をくしゃくしゃにした、まだ幼さの抜けきらぬ少年兵がのめるように家の中に転がり込んだ。マントはどこかで落としてきたのか、はあはあと肩を揺らせる上半身に鎧しかつけていない。

「エキオラがどうかしたのか！」

「は、はい」

エナムは息を喘がせながら、必死にことばを継いだ。

「先程、第三王子、クノース殿下が突然昏倒され、意識不明のまま未だお目覚めになりません。明日の式典は王子の意識が戻られるまで急遽延期となりました！」

「原因は」



「わかりません。医術師も手の施しようがなく、ただ占者が一言『影が見える』と申したきり、その者もまもなく意識を失い死に至った模様です」

(影)

アシャは目を細めて静かに杯を傾ける。

(『運命(リメイン)』か?)

しかし、なぜクノーラスなどに手を出すのか、相手の意図がわからない。ましてや、この時において婚儀一つを遮ったところで、何の意味があるのか。

(それとも何か別の意味があるのか?)

「エキオラ様にはいたく御不安の様子、隊長においでを願ってほしいとのこと、伝言承りました」

「畜生！」

だんっ、と激しい音を立てて戸を殴りつけたアオクは、激情を押さえかねたように俯いたが、やがてなお低い声でエナムに命じた。

「すぐに行く。エキオラに伝えてくれ、案ずることはない、と」

「はっ！」

エナムが一礼して、すぐに身を翻して夜闇に飛び出していく。

しばらく戸口で動かなかったアオクがのろのろとアシャ達を振り向いた。苦い笑みを広げて溜め息をつき、部屋の隅にかけてあったマントと鎧を身につけて装備を固める。

「すまないが急用ができたようだ。用はラセナに言い付けてくれ。ラセナ、客人を頼むぞ」

「ええ、兄さん」

「では」

軽く頷いて、アオクもまた緊張した顔で夜気の中に溶け込んでいく。

それを見送ってゆっくりと扉を閉めたラセナが、背中中で扉を押しながら、そっとつぶやいた。

「馬鹿な兄さん」

「？」

「早く申し込んでおけば、エキオラを取られないですんだのに」

「アオクが？」

アシャの問いに小さく何度か頷く。

「ずっと小さい頃から好きだったんだけど.....自分ではとても釣り合わないって。まごまごしているうちにクノーラス様に見初められて.....もっとも見初められたのはエキオラが受け継ぐ財産だと言う話もあるけど」

第三王子ともなると、いろいろ事情もあるものな、とイルファがわかったように唸った。

「.....それでもエキオラを諦めきれないんだから.....馬鹿よねえ」

片付けに戻るラセナに、特別な日と言ったアオクの顔が浮かんだ。

自分の愛してやまない相手が、他の男のものになる。

他の男の腕で憩い眠り、甘い睦言を囁く。

それでもいいと諦めて、見守ってその幸福を祈った矢先、自分の恋に微かな未来をもたらすかもしれない出来事が起こる。だがしかし、それは愛しい相手を哀しませるような代物で。

アオクの心中の複雑さは思ってもあまりある。

「お風呂の御用意をしますね」

ラセナが気を取り直したように顔を上げて部屋を出て行くのを待っていたように

「.....アシャ？」

イルファが声をかけてきた。

「.....ああ」

「そうじゃないかと思ったぜ」

どさりとイルファが巨体を椅子にふんぞり返らせる。瞳が鋭く光っている。伊達や酔狂でアシャと『三人衆』など組めたわけではない。占者のことばを聞き逃すはずもなかった。

「影、というのはおそらく『運命(リメイン)』...」

アシャのつぶやきにイルファが肩を竦める。

「あの薄気味悪いやつらだな」

イルファも気付いている。カザドだけではなく、執拗に自分達を狙ってくる一派がいること、その比率がラズーンへ近付

くに従って、じわじわと『運命（リマイン）』側に増えていること。

「俺達がラズーンに向かうのがお気に召さないらしいな、なぜだ？」

「.....」

「.....知ってるのかよ」

「.....多少はな」

「なんでだ？」

「.....やつらの意図を阻むからだろう」

「答えになってねえが、わかってるよな？」

「そうかな」

「そうだぞ」

「俺にはなぜクノーラスを狙ったのかわからん」

イルファの誘導をするりと躲して眉を寄せる。

（ひょっとしたら、俺達をここで足留めする罠か？ 俺達、というより、ユーノ、か？）

しかしなぜ数ある『銀の王族』の中で、これほどユーノに対して繰り返し攻撃をしかけてくるのかわからない。

それともアシャが知らないだけで、今回の二百年祭はそれほど特別なものなのだろうか。

「.....」

思わずぞくりと体を震わせた。

それは世界の動乱だけではなく、ラズーンの破滅を示す。アシャの運命を闇に呑み込み狂わせ、恐れている最悪の結果、アシャ自らがこの世界の闇を統べる存在になるしかないことを教える。

（まさか）

もしそうならば、『太皇（スーグ）』が警告なしにおくはずがない。この前の連絡でもそのような知らせは入っていない。

それとも。

（俺の崩壊と離脱も、『星』の計画のうち、なのか？）

「どうする」

「...待ってみるしかない」

「.....なるほど」

アシャのむっつりした声音に今度はイルファも突っ込まない。異変の存在を感じ取っているのだろう。

「アシャさん、イルファさん！」

ラセナがにこやかに戻ってくる。

「御用意できましたよ！」

「ああ、それは俺が運ぼう」

寝床を整えてくれるらしいラセナが、両手一杯に抱えたシーツをイルファが急いで立ち上がって引き取った。

「旨い飯を食わせてもらった、ちょっとは働いておかぬとな」

「ありがとうございます」

「ユーノやアシャだけではない、俺だっていい男なんだぞ」

「はい」

「本当に本当にいい男はここぞという時に役に立つのだ」

「はいはい」

軽口を叩きながら二人が出ていくのに、アシャは苦笑して席を立つ。

（それなら俺はいい男ではないな）

肝心な時にラズーンに居ない。

世界が崩壊する序曲が奏でられているかもしれない、この時に、ラズーンのアシャは行方不明だ。

（だがそれも）

計画の一つであったとしたら。

ふいに別室で休むユーノのことが頭を掠めた。

闘いの中で生きてきた『銀の王族』。

その意味は、この奇妙な二百年祭の動きを構築する貴重な破片ということではないのか。

(もし、そうならば)

アシャがここに居る意味は。

アシャがユーノに出会った意味は。

アシャがユーノを愛しく思ってしまう意味は。

「.....そうだとしたら」

俺は世界を呪ってやる。

小さな暗いつぶやきは、アシャの胸の中で尖った針になって体中に飛び散った。

「っっ！」

「痛い？」

「い...いたくないもん、これ...っぐらい...っ」

答えながらレスファートの目は涙で一杯だ。今にも零れ落ちそうなのを必死に我慢している。

「無理しなくていいから」

「むり...じゃな...いつ」

整えられた客用のベッドに腰をかけ、ユーノのかなり手荒い手当てに一所懸命泣くまいとしているが、駆け上がってくる痛みはどんどん強くなっていくようで、体が勝手に震えてくる。

「もう少しで終わるから」

心配そうに言い聞かせてくれるユーノに、大丈夫だよと笑い返したいのだけど、じんじん突き上げてくる痛みに加えて、ユーノの指が時々触れて走る閃光のような激痛は、痛み止めが切れている今、レスファートの体を強ばらせる一方だ。

(こんなの、痛くない)

ユーノの負った傷に比べれば。

真っ青になって今にも死にそうになっていたユーノを思い出しながら、レスファートは歯を食いしばる。

(ユーノの方がもっと痛かった)

胸の中でそう繰り返すものの、陽炎のように歪んでくる視界がもう限界だ。

(痛い...いたい...よ)

とうとう堪え切れなくて、心の中で弱々しく声を上げた。

その次の瞬間、弛んだ心を狙ったように鋭い痛みが脳天まで駆け上がって、レスファートは思わず飛び上がった。

「ひ」

「大丈夫？」

ユーノが手を止め、跪いた姿勢からレスファートを見上げてくる。

「...っ...」

無言で頷いて、レスファートは大きく首を振った。今にも涙が落ちそうだ。

(いたくないいたくないいたくない)

呪文のように繰り返しながら、ユーノの指が再び動き始めるのを見守る。

薬を塗った布が押し当てられてじりっと焼かれたような痛みを感じる。びくっと脚を震わせたレスファートに、ユーノが手早く包帯を巻いていく。冷たい薬の感触がほてった脚にようやく気持ちよくなってきた。心がゆっくり弛んでいく。

(早くしてよ.....早く.....ぼく...)

ユーノが包帯の端を裂いて結んだ。そっとレスファートに笑いかける。

「よし。よく我慢したね」

その一言でレスファートの堰が切れた。

「ユーノお！」

わっと首にしがみついて泣き出すのを優しく抱きとめて、ユーノが囁いてくれる。

「ほら、せっかく頑張ったのに」

「いた.....いたか...っ.....かったん.....だも...」

泣きじゃくってレスファートは訴えた。

ユーノの胸は温かい。父の温かさではなく、イルファの温かさでもなく、何もかもを投げ出して自分の弱味も全部曝けて甘えていいような温かさだ。

この温かさに受け止めてもらえるなら、何度怪我をしてもいい。こうしていつでもユーノが抱き締めてくれるなら、どこへ行っても何があっても、レスファートは還ってこれる。

心を近く、ユーノの心に擦り寄せる。魂の色さえ写し取るほど近く、なお近く、より近く。

「男の子だろ？ 泣き止むの。ほら、そんなに泣いてると女の子になるぞ」

(女の子は泣くものなの？)

ユーノのことばにレスファートは考える。

(なら、どうしてユーノは泣かないの？)

心の疑問を素直に口に出した。

「ど...して.....ユーノは.....泣か.....泣かないの.....？」

「んー？」

体を起こしてユーノの顔を覗き込むと、びしょ濡れになった頬を指先で拭ってくれながら、ユーノは淡い笑みを浮かべた。

「さあ.....どうしてだろうね」

終わってしまったお伽話の続きをせがまれたように、一瞬ためらって、やがてぽおんと柔らかくことばを放り投げる。

「きっと、女の子じゃないんだよ、ボクは」

「.....？」

よくわからない答えだった。レスファートにしてみれば、ユーノほど綺麗な女性を見たことがないし、ユーノほど大切な女の子はいなかった。きよとんとしてしていると、頬にそっとキスしてもらった。

「さて、泣き虫さん」

甘い声で誘われる。

「一緒にお風呂に入ろう。傷に触らないようにきれいにしてあげるから」

「うん...」

(どうして？)

心をひどく近くに寄せていたから、レスファートはユーノが放り投げたことばの裏に波立ったものを感じ取ってしまった。

切ない寂しい、ずっと一人で誰とも一緒に居られない、それを諦め受け入れて、けれど唇を噛みながら俯いている心の底に、誰か、を求める激しい想い。

(どうしてそんなふうに、いうの？)

抱えられて手を引かれ、ユーノが笑ってくれるから笑い返してはみたものの、レスファートにはどうしても納得できなかった。

(どうして.....泣かないの、か)

それとわからぬほどの溜め息をついて、ユーノは脱いだ服を一纏めにした。

ラセナの心配りだろう、三人分の着替えとレスファート用の小さな服が置いてある。この家に子供がいるような気配はなかったから、どこからか調達してくれたと見える。

「迷惑、かけちゃったな」

「え、なに？」

「いや」

「ユーノ...」

傷に触れないようにそっと服を脱いでいたレスファートは、目の前のユーノを見上げて息を呑んだ。

「その.....けが...」

「ああ、昔のだ」

こともなげに答えて、ユーノはレスファートを見下ろした。

「気味が悪い？」

レスファートは激しく首を振り、半泣きになりながらも唇を噛んでユーノの手にしがみつく。少年が何を思ったのか、薄々はわかる。ユーノは穏やかにその肩を撫でて、浴場へ続く隅々まで磨かれた木製の扉を押し開け、

「っ」

固まった。

(まずい)

正面に湯舟にのんびりつかっているイルファの背中があった。

(イルファが入ってたのか)

扉の開いた気配に気付いたのか、

「? .....よう、ユーノ、お前もきたのか」

半身振り向き、のんびりとイルファは笑った。

「早く戸を閉めろ、湯が冷める」

「あ、うん」

浴場を震ませる湯気のせいで、ユーノの姿がはっきりとは見えないのだろう、ざぶりと再び背中を向けながら唸られて、ユーノは慌てて戸を閉めた。

(ここで逃げちゃ、かえってややこしくなりそうだな)

「ユーノ...」

レスファートがどうしようかと言いたげに見上げてくるのにならずいて、側の壁から突き出した棚の布を取り、さりげなく両肩からかけて湯舟の端の洗い場に向かう。

「いい湯だぞ.....入らんのか?」

湯舟に背中を向けてしゃがみこんだとたんにイルファが話し掛けてきてぎくりとしたが、

「うん、レスを洗ってから」

「そうか」

人の気も知らずにふわふわあ、と間抜けたあくびを続けたイルファをレスファートが緊張した顔で見ている。近くの凝った細工をほどこした木の椅子を引き寄せ、レスファートを促して座らせた。

「.....だいじょうぶ...?」

「何とかなる」

心配そうなレスファートの体を、湯で示した布で手早く擦りにかかる。

「腕、かして」

「はい」

突き出すレスファートの腕は日に焼けて、旅立ったことからするとうんと太くしなやかになった。ぎゅ、ぎゅと擦ってやると嬉しそうに笑う。

「こっちはぼくやる」

「怪我人はじっとしてな」

「やれるよお」

布の端を使ってレスファートがもう片腕を擦り出し、残った端でユーノは少年の背中を擦った。

「痛くない?」

「うん、きもちいい」

「.....まるで母親と子供の会話だな」

ざぶりとイルファが振り向いた気配に、さり気なく腰を落として床につける。跳ね上がった心臓の鼓動を必死に引き戻し、ことさらそっけなくユーノは言い返す。

「こんなところでやりあうつもり? ボクが細いって前からかってるなら、イルファの腹のあたりを削いで同じぐらいにしてやるけど?」

「冗談ぬかせ」

イルファが呆れたようにぼやく。

「これはたるんでるんじゃない、筋肉そのものだぞ」

「ああ、そっか、頭の中まで筋肉だもんな」

「そうとも俺は全身筋肉.....ん?」

イルファが不審そうにことばをとぎらせて考え込んでる間に、さっさとレスファートを擦りあげる。

「おい、筋肉は考えるのか?」

「普通は考えないと思う」

「じゃあ、俺が馬鹿だって言ってないか?」

「イルファのきんにくはとくべつせいなんだよね」

「ああ、なるほど」

レスファートのことばにそういう考え方もあるなあ、と続けたイルファが、ふと口調を変える。

「しかし、凄い傷だな」

「.....」

ユーノは少し手を止めた。

背中に当たる視線を感じる。無遠慮に眺めている視線ではあるが、嘲るような気配はない。

「お前幾つだった？」

「17」

「17の時に、俺はそんなに怪我をしてなかったぞ」

前もそうなのか、と尋ねられてああ、と曖昧に答える。振り向いて見せてみる、そう言われたらそれこそどう言い逃れる

かと緊張していると、

「それだけ実戦ばかりってことか」

ざぶざぶと湯の音が響いて、レスファートがこそりと、向こうむいた、と教えてくれた。

「嫌でも強くなるわな.....それだけ怪我しても、まだ無鉄砲なんだから救いようがねえ」

「ほっとけ」

「無茶ばかりするなよ、命は一つだからな」

「わかってる」

ぶっきらぼうに応じながら、ユーノの傷を見てすぐに実戦で傷ついたのだろう、そうわかってくれたこと、しかも逃げ回っていたのではなく闘っての傷なのだと察してくれたことに、胸の奥が温かくなった。イルファなりにユーノのことを評価してくれているのだ。

髪に湯を浴びてごしごし擦ったレスファートが、濡れた動物のように頭を振って雫を撒く。布を固く絞って、壁の緑青色の光をようやく跳ねるほど輝きを取り戻したプラチナブロンドから水気を拭いてやりながら、小さく囁く。

「アシャに伝えてきて。このままじゃ出られなくなる」

「わかった」

「何だ？」

ざぶ、とまたイルファが振り向く。

「何でもない」

「いいからさっさと入れ。細いのが震えてるのはむしった鳥みたいで見栄えがよくねえ」

さっさと入って、男同士、戦いを語ろうぜ。

「ほらこい」

「ちょっと体洗ってから」

「女みたいに細けえな」

「洗わずに飛び込んだの？」

「あ、いや、そのまあ」

「.....ラセナに怒られるよ」

「う...」

男がそういうことに神経を使えるもんじゃないってことぐらい、わかるだろ、それは。

ぶつぶつ言いながらイルファがまた向きを変える。

じゃあぼくは出てくるね。

立ち上がったレスファートが片足を引きずりながら扉から出て、ユーノに目配せして急いで扉を閉める。うなずき返し肩越しにそっと振り向いて、イルファが向こうをむいているのを確かめてから、ユーノは間近な場所からすばやく湯に滑り込んだ。

何か香料か薬草でも解かしてあるのか、独特な柔らかな香りが漂う湯は薄緑色に濁っていて、肩までつかると体がほとんど見えなくなる。

(助かった)

ほっとユーノが息をついたとたん、間一髪でイルファがゆらりとこちらを向いて話し掛けてきた。

「なあ、いつから剣を持ってた？」

「いつからって」

近付いてくるイルファにまた深く湯に沈みながら、

「7歳ぐらい、かな？」

「そんなに早く剣を始めるのか、お前の国じゃ」

「まさか」

ユーノは苦笑した。

「ボクの場合は特別。勉強を教えてくれていた教師が剣士でもあったんだ」

「ふうん……」

じゃあ、そのせいかな。

「え？」

「お前、妙な癖があるだろ」

「癖？」

興味をそそられて湯気の向こうの顔を透かし見ると、珍しく生真面目な表情になったイルファがまっすぐこちらを向いている。首まで湯に浸っているから体は見えないだろうが、これでは出るに出不らない。

「ああ、癖だ。気付いてるかどうか知らんが、やりあってる時にほんの一瞬、だが一度は必ず、無防備なままで敵の前に飛び出すぞ」

「え」

ユーノは呆気にとられた。

「まさか」

「幸い今までは本能的に避けられたのかも知れんが、その傷も、結構その隙をつかれてのもの、じゃねえかな」

お前ほどの剣の才があり、しかもそんな幼い時から剣に親しんで、なおそこまで怪我をしっぱなしというのは、たぶんそうだろう。

茫然とするユーノにイルファが考え込んだ口調でつぶやく。

「気付かな、かったよ…」

「だろうな」

そんな事をしていたなんて。

しかもそれに気付かなかったなんて。

ゼランが、そう教えた、のか？

いつの間にか、見えないところで、そう訓練していたのか、ユーノが自分で傷つくように？

自分から危険なところに我が身を晒すように？

ぞくりとした。

それだけなんだろうか、ゼランが植え付けた癖は。

まだ他にもあって、それがたまたま見つかってないだけなんじゃ。

(剣を習い直さなくちゃならない)

閃光のように覚った。

(でないと、何をするかわからない)

「なるほどな」

「っ！」

「遅いぞ！」

嬉しそうにイルファが顔を上げて、ユーノは背後を振り返った。

湯気の向こうにアシャの顔がぼんやりと浮かんでいる。滑らかな肩と細いながらも整った筋肉に覆われた首筋、意外にかっちりとした腕が視界に飛び込んで、思わず見とれた。女性的な顔だちに乱れた金褐色の髪をうっとうしそうにかきあげる姿に、相手が全裸だとふいに気付いて顔が熱くなる。

(ば、かっ)

なんて格好で入ってくるんだ。

(って、私は何を考えてるっ)

罵倒しながら、もちろんそれが理不尽だとはわかっているけれど、軽く湯を浴びて側へ滑り込んでくるアシャの方を向けない。逃げ出しそうになるのを堪えて、扉の方向を向いているのが精一杯だ。

ざぶりと湯が揺れて、その湯の下で一瞬アシャの指が腕に触れてぞくりとした。

「実はちょっと気になったことがある」

ユーノと背中を合わせるように、さりげなくイルファの視界を遮りながら、腕に触れたアシャの指が戸口へ動くように合図してくる。

(あ)

今のうちに、上がれ。

(そうか)

アシャがイルファの相手をしているうちに、そっと背中を向けて湯舟から出れば、身体つきをそれほど注目されない。

「あつ……ボク、もう上がるね」

うんざりした声でうなって、ざぶざぶと湯を掻き分けて離れていった。

「え、もうか？」

「なんだ、イルファ、俺と話すよりユーノと話するのが楽しいのか」

アシャが覗き込みかけたイルファを制するようにはからかってくれ、そんなことはない、俺はお前と風呂に入るのは楽しいぞ、と慌てたように弁解を始めるイルファに、急いで湯舟から出て戸口をすり抜ける。

「ふ、う」

どうなるかと思った。

隣室で水滴を拭い、急いで用意の服を着ながら溜め息をつく。

もしアシャが来てくれなかったら。

そう思った瞬間、すぐ側を通り抜けていったしなやかな身体を思い出した。

「……」

意外に筋肉質、だったなあ。着痩せする性質なんだ。裸になった方が骨格も立派だし、身体つきも男らしいし、なのに動きは柔らかくて、肌も滑らかそうだったし、きっと抱き締められたら気持ちいいだろうなあ…。

「っ、」

ぼんやり考えていた先がとんでもない方向に落ち込んでぎよっとし、みるみる熱を上げていく頭を必死に擦り倒す。

「ばかなこと、考えて」

そんなことはありえない。

裸のアシャに抱き締められることなんてありえない。

そんなことがあるとしたら。

「……」

そんなことを望めるのは。

「……………」

姉さまだけ。

「……………ふ」

布で顔を覆う。

きっと真っ赤になっているだろう自分が情けなくてみっともない。自分のものではない人に抱かれる夢を考えてしまったのが愚かでうっとうしい。

「やばいよなあ……」

アシャのあんな姿を見てしまったから、きっと婚儀の時だって、その夜のことを考えてしまうだろう。

あのアシャの腕に抱かれるレアナのことを、その安心を、その快さを想像してしまう。どんな風に誘うかとか、どんな風に受け止めてくれるかとか、どんな風に愛してくれるのかとか。

「う、わ」

愛してくれるか、だって？

頭がぐらぐらする。

話に聞いただけの夜の営みは、ユーノを女と見ていない輩のいきりたった自慢話も含め、乙女達が想像するような優しくて温かいものであるより、熱を伝えて現実的だ。自分にはきっと関係ない、そう思いつつも耳をそばだてたのは、男が女のどの部分に魅かれるかの一節で、何よりあの柔らかな肌、そう笑った声を聞いた瞬間に突き落とされたような気がした。

(柔らかな、肌、なんて、ないよなあ)

苦笑しながらそっと自分の体を摩る。

傷だらけで、柔らかくも滑らかでもないその皮膚を愛しんでくれる相手など居るのだろうか。

(そういうことは経験が豊富そうだし)

ましてや、あの、アシャが？



「婚儀前に国を出る、かな…」

それでもきつと、眠れない夜に想うだろう、あの腕の中で眠る幸福を。

「導師」

どうしたらいいんだろう。

こうして日々降り積もっていく、アシャへの想いを抱えて、どこまでユーノは壊れずにいられるんだろう。

「頑張らなくちゃ」

少しでもアシャの側に長く居たいなら。

「隠し通さなきゃ」

覺られないように、気付かれないように。

「でも……」

夢、なら、いい、かな。

ちょっとだけ、自分が、とか、夢、見ても。

ずきずきする胸につぶやいたとたん、

「…ちっ」

舌打ちして自分をののしる。

ばかやろう。

そんなの、姉さまへの裏切りと同じだ。

顔を強く擦り、イルファが気を変えて出てこないうちにと、ユーノはさっさと寢室に向かった。

夜はいつのまにかとっぴり暮れて、月が頭上に昇っていた。

煌々と照らすその光を浴びて、渡り廊下をアシャは進む。ユーノに何の話があるんだと散々イルファに絡まれたから、濡れた髪はもう既に乾き始めている。かなり伸びてきたそれをさくりと搔き上げて、感触にユーノの首筋に絡みついていた髪の毛を思い出した。

『気付かな、かったよ...』

茫然とした口調が、濡れてくしゃくしゃになった髪の毛が絡みつく細い首の向こうから響く。

ただでさえ、ゼランに裏切られていたという事実はユーノを傷つけている。しかもその相手が手取り足取り教えてくれた剣には自分の命を危険に晒すような罠が仕掛けられていたと知って、微かに震えた肩が痛々しかった。

「俺が先に気付いていれば、な」

軽く唇を噛んでアシャは眉を寄せた。

そうすれば、あんな無造作に知らされるようなことはなかっただろう。それとなく剣を教えて、それとなく隙に気付かせて。

「この上に剣を教えるだと？」

自分の思いつきを嘲笑った。

17歳の少女として、ユーノは十分に強い。天賦の才能とはこういうものなのかと何度も思わせる。

それは遠く、おそらく『太皇（スーグ）』がアシャに対して感じたものを想像させた。稀に見る才能、豊かな力量、王たるにふさわしい器、だがしかし。

アシャは目を伏せ、髪を搔き上げたまま立ち止まる。頭に当る掌の感触、それもまた、遠い日に自分を愛おしんだ掌を思わせる。

だがしかし。

その存在は、これまでの世界の理を破壊する。

それを『王』として選んでよいのか。ただ優れた資質があるからと世界の命運を自分の手で変えてしまっているのか。

『太皇（スーグ）』の胸にあっただろう逡巡はゼランの惑いでもある。

自らを、世界を滅ぼす敵を造り上げてしまうかもしれない.....。

「.....」

あなたは どうして俺を選べたんだ。

彼方の地の穏やかな眼に問いかける。

いくらでも選択肢はあったはずだ。ギヌアだって居た、彼の資質も十分に豊かだった。彼を選べば、何も問題はなかったのではないか、アシャはその位を望んでいなかったのだから。

なぜ、俺を。

ひょっとして『太皇（スーグ）』の中にも蠢いたものがあるのだろうか、世界の命運も自らの保守も捨て去って、その力の花開くさまを見たいという魔性の囁きが。

今アシャの中に沸き起こる微かな興奮と同じように。

（もう、十分じゃないか）

湯舟の中に浸っていた身体がそっと振り返った時、細い首が吸い込まれるように湯に消えていて、まるでそのままどこかに漂っていってしまいそうで、つい指を伸ばした。指先に触れたのは波打つように引き攣れた皮膚、ぴくりと揺れて逃げそうな気配に思わず掴みかけ、かろうじて自制した。

イルファとの間に滑り込む、背中に湯を通して柔らかな熱が伝わってくる、けれどその熱は震えて、まるで褥の中でこれから互いに求め合う寸前の危うさで。

ごくりと唾を呑んだ気配に気付かれただろうか。

「.....狡いな、男は」

目を閉じて揺れる気持ちにしぼらく酔う。

開かせたい、まだ誰も見たことがないあの花を。自分の手で、最後の最後まで。

一番危うい衝動をずらせば、それはユーノの剣の罠を消すために自分の剣を教え込みたいという意志に変わる。

変えたい、ユーノを、この掌の中で。

その激しくて理不尽な衝動を、ゼランもまた味わっていたのだろうと思った。

単に敵となるから剣に罠を仕込んだのではなく、いつか自分の敵となり、誰かの他の男のものとなる、その屈折がどこかに潜んでいたからこそ、その身を安全に守る盾を与える代わりに、自ら屠られるしかないような剣を植え込んだのではないか。

「なら、俺は...？」

どうする。

迷いつつ、再びゆっくり歩き始めて、まもなくユーノ達の寝室に辿り着く。

「……ユーノ？ 寝たか？」

低く声をかけたが、答えがないのにそっと扉を開いた。

部屋に入ると、そこにも窓から注いだ銀色の光が満ちていた。

ユーノが上がってくるのを待ちくたびれて眠ってしまったらしいレスファートが、ベッドの上で丸くなっている。乱れた髪がまばゆいような銀に輝いて、閉じられたまつげのあたりも銀色にけぶっている。小さく開けた唇から微かな寝息、軽く身動きしてレスファートはつぶやいた。

「ん……ユーノ……イルファの……ばか」

その側に、微笑みながら、レスファートの体にそっと上げかけをかけるユーノの姿があった。

湯上がりの薄い衣一枚、それでも手足をしっかり覆う服を身に着けている相手に胸が傷む。

ユーノの剣に隙があるのは確かだ。それが危険なことも。

けれどそれを消すために剣を教えるならば、一層それはユーノを危険に追い込むことにはならないか。

そうするぐらいなら。

(俺が守ればいい)

片時も側を離れず、敵には盾となり、疲労には床となり、哀しみには憩いとなり、空腹には心身を満たす食物となり。

「、ごほっ」

「アシャ？」

一体何を食わせるつもりなんだ俺は、と思わずむせたアシャにはっとしたように振り返ったユーノが怪訝な顔になった。

「どうしたの？」

「あ、いや、レスの傷はどうかと思ってな」

「大丈夫みたい……よく寝てる」

微笑むユーノはまた愛おしそうにレスファートを見下ろす。

一瞬、そこに自分が横たわっているのではないことに軽く嫉妬して、アシャはゆっくりと近付いた。

開け放った窓から風が静かに入ってくる。

「いい風だな」

「うん……静かで気持ちいい夜だよ……ねえ、アシャ」

ユーノの柔らかな声に、窓際まで行って振り返った。

「なんだ」

「……私に剣を教えて」

「え…」

「私の剣には罫がある、それはもう聞いてたよね？」

「ああ」

「カザド相手ではしのげても『運命（リマイン）』相手じゃ難しい、アシャもそう思うでしょ？」

「……ああ」

「だから、剣を教えて」

ひたりと見つめ返してくるユーノの顔に迷いはない。月光を浴びていつもより白く見える顔、嘸み締めていたのか唇がほんのりと色づいて開いている。

「『ラズーン』へ行かなくちゃならない、絶対。『ラズーン』へ行ったら、どんな御用があるかは知らないけど、でもカザドの非道も訴えて」

続けたことばに、そんなことも考えていたのか、と頷いた。

「忠誠を誓って、姉さま達が安心して暮らせるようにセレドもちゃんと見守って下さいとお願いして」  
必死な目の色は黒く澄んで僅かに潤んでいる。

「もし、万が一、私が」

戻れなくても。

「.....」

つぶやいた声に胸を突かれた。

(死ぬ、つもりで)

「セレドが安泰に続くように」

「守ってもらおうと考えるのか」

ことばが零れ出てしまった。

「え？」

「お前は誰かに守ってもらおうと考えるのか」

「わ、たし...？」

私は。

思いもかけないことばを聞いたという顔で目を見開いたユーノは、やがてゆっくり目を伏せて苦笑した。

「誰、に？」

からかうような、掠れた声が響いた。

「誰が...」

守れる。

「どうして...」

守ろうなんて、考える。

「私は」

無意識のような仕草でそっと片腕を触って自分を抱える。

「.....無理、だ」

「そんなことはない！」

思わず強く言い放って、アシャは窓から離れた。両手を差し伸べ、今にも崩れそうに見える相手に近寄る。

「お前だって、独りじゃきつと」

「きつと...？」

のろのろと顔を上げたユーノが潤んだ瞳を細めて笑う。

「.....それ、でも」

無理なものは、

「俺が」

その先を言わせたくなくて、肩に手をかけ引き寄せる。

「俺が、」

「あ...しゃ...？」

ふわり、と体が揺れて腕の中に倒れ込んでくるように見えた。そのまま抱き締め、顔を上げさせ、今にも泣き出しそうなその唇を一気に塞いでしまおう、そう顔を寄せた、次の一瞬。

ジャッ！

「っ！」

チャリッ！ ギャギャッ！

「アシャっ！」

突然響いた剣戟の音に、ユーノは一瞬にして体勢を立て直した。窓から庭へ、視線を走らせたときに身を翻してベッドの上の剣を掴み、止める間もなく窓から外へ飛び下りる。

「誰か襲われてるっ！」

「ちいいいっつ！」

どこのくそ餓鬼だ、こんな夜中に馬鹿馬鹿しいまねをしゃがって！

舌打ちしながらアシャもすぐさま後を追う。短剣一本しかしのばせていないが、怒りが十分容赦ない攻撃にしてくれることは確信できる。

「アオクーッ！」

先に行くユーノの猛々しい声が響き渡った。

ジェブの樹へ数人の男に追い詰められたアオクが、傍らに抱えたほの白い塊を庇うように剣を振

るいながら、ユーノの姿を認めたのだろう、叫び返してくる。

「来るなーっ！」

「冗談！」

一言のもとに切り捨てたユーノは生き生きと手近の敵に躍りかかった。抜いたか抜かぬ間に一人が倒れ、次の一人も驚いた顔で仰け反っていく。だが、ユーノの剣は再び鞘におさまっていて、抜かれた気配がない。

「どこで覚えたっ！」

飛びかかってきた相手を叩きのめして尋ねたアシャに、ユーノがにと不敵な笑みを返した。

「昼間、道端でやってた！」

同時に目の前に立ち塞がった敵に瞬時身を沈めて静止、相手がぎよつとした顔で止まったとたんに幻を残してユーノの手が閃いて剣を抜き放ち、一閃した後すぐに鞘におさめられる。

「おいっ」

アオクが茫然とした顔になった。

「それは近衛でも遣い手が限られる剣だぞっ」

「そんなこと言ってる場合？」

「っく！」

慌てて防戦に入るアオクに、けれどこれは奇襲の方が効果的だよね、すぐ距離取られるから、と息も切らせずに剣の扱いを変えるユーノに、アシャも啞然とした。

(見よう見まねで、よくもそこまで)

この分では本当にアシャの剣、『視察官(オベ)』の剣まで身につけてしまうかもしれない。

(『銀の王族』の『視察官(オベ)』だと?)

前代未聞、まずありえない設定だろう、そう思ってまたはたとそのことばの意味に気付く。

(ありえない、展開)

たとえばアシャの存在。

たとえばユーノの特性。

かつてないほどの太古生物の繁殖跳梁と、『運命(リマイン)』の侵食。

既にこの二百年祭がありえないことの連続ではないのか。

ひよっとして。

ひよっしたら、『太皇(スーグ)』はこれを見越して、アシャを選んでいたのであろうか。平穏な二百年を治めるものとしてではなく、動乱と混沌の世界に新しい基準を得るために。

「.....たい...した腕...だな」

ようやく一通り敵を倒してアオクの元にユーノともども駆け寄ると、はあはあと荒い息を吐きながら汗に塗れた相手が唸った。

「見損なっていた...申し訳ない」

「いいよ、人は見かけによらないって覚えてくれれば」

ユーノがしらっとやり返すのに溜め息をついて、アシャはアオクの背後に庇われていた人物に気付いた。

「そちらは」

ユーノより少し年上といったところか、額に紅玉を細い金鎖で垂らしている。濃い茶色の髪が白と金のまばゆいばかりの衣装の肩に波打っている。澄んだ薄茶色の目が不安そうにユーノを、続いてアシャを見た。

「どなたなの、アオク」

細い声で尋ねるのに、アオクは安心させるように笑って振り返ってみせ、

「客人だ。問題ない。ユーノ、それにアシャだ」

「驚かせて申し訳ありません」

アシャの声に相手はほっと軽く吐息をついて微笑み返す。

「ボクらは、アオクの家泊めてもらっているんです」

「そう、ですか」

ユーノのことばにおどおどと頷いた。

「紹介しよう」

アオクがその華奢な肩をそっと抱き、向き直る。

「エキオラ.....第三王子クノーラス様に嫁ぐ、俺の幼馴染みだ」

## 2.クノースの異変

「.....とすると？」

「俺にはさっぱりどうなったのか、わからん」

アシャの問いにアオクは困惑した表情で応えた。

机を囲んだユーノ、イルファ、アシャとアオク、それに少し離れたソファのエキオラとラセナは、お互いに難しい顔を見合わせた。

「とにかく、俺が行った時にはクノース様はお目覚めだった。だが、明日の式のことを伺っても『知らぬ』とおっしゃる。エキオラの事を聞いても『知らぬ』の一点張りだ。俺がなおも問いかけると、いきなり乱心なさって剣を抜かれた。そればかりか、エキオラの首をこの場で刎ねるとおっしゃって.....」

「それで、とっさに連れて逃げたわけか」

イルファが頷く。

「攫う気はなかった。だが、エキオラを殺させるわけにもいかなかった」

アオクの苦い口調に、わっとエキオラが泣き伏した。

「わ、私がいけないのです！ 私が、何か、王子の御機嫌を損ねるようなことをしてしまったのです！」

「おまえのせいではない！」

厳しい声でアオクは咎めた。

「あの時の王子はいつもの王子ではなかった。何かこう、禍々しい影がまとわりつく、物の怪のようだった」

はっとしたように、ユーノがアシャとイルファを見た。微かに頷くと、唇を噛んで俯く。

自分が来たから襲われたと考えているに違いなかった。

「さっき追ってきたのは、王子の側近か？」

「いや、見たことのない男達だ。どいつもこいつも妙な冷たさがあって、腕が竦みそうだった」

アオクは首を振った。

「それで、どうする？」

「明日もう一度、王子の所へ行ってみる。原因を確かめて.....」

「アオク！ そんな、危ないわ！ 見たでしょ、何かわけのわからないものが、うようよしていたのを!!」

エキオラが強ばった顔で叫んだ。よほど怖い思いをしたのだろう、唇を震わせて蒼白な顔になっている。

「だからと言って、幼なじみの夫になる人を放っておくわけにはいかん」

「アオク.....」

エキオラが涙に濡れた顔を微かに歪ませた。

「おまえには幸せになってほしい、他の誰よりも、な」

アオクはついとエキオラから目を逸らせて付け加えた。

「俺の自慢の友人だからな」

すうっとエキオラの頬に血が昇る。

「ア...アオクの馬鹿！」

「エキオラ！」

立ち上がって部屋を走り出していくエキオラのあとを追いかけながら、ラセナがじろりと兄を睨みつけた。

「勝手にサークでも織ってなさいよ、馬鹿兄さん！」

「サークを織る？」

イルファの声に、アオクは微かに笑い返して応えた。

「暇潰しをするってことさ」

「鈍感、という意味もある」

ぼつりと言ったアシャに相手はかっと赤くなった。

「...仕方ないだろう！」

吐き捨てるように言って窓に近づき、既に朝を迎えて澄み渡っていく空を見上げた。

「あいつはダノマの赤い華と言われるほどの器量よし、おまけに街一番の金持ちの娘だ。どう考えて

も俺ごときに……合う、わけはない」

「合う合わんの問題じゃないだろう、好きか嫌いかな」

イルファが無然とした顔で口を挟む。

「単純でいいな、イルファは」

「他に何かがある」

ユーノのからかいにイルファは訝しそうに瞬きした。

「惚れ合ってこそ縁を結ぶものだ」

「…惚れ合っているさ、クノーラス様とエキオラも」

低い声でアオクがつぶやき、おおそれがサークを織るってやつか、と突っ込みかけたイルファをユーノが殴った。

「それより、何かわけのわからないもの、と言っていたが」

何をする、される方がまずいんだろ、と軽くやりあいかけたユーノ達を制し、アシャは気になるところへ話を戻した。

「あ、ああ」

あれは…。

アオクが戸惑った顔でことばを継ぐ。

「……俺が知っている、どんな生き物とも似ていないものが」

太古生物。

また素早くユーノがアシャを見返す。今度はイルファもじろりと見やっけてきて口をつぐんだ。

「…どんな生き物だ」

「ああ、俺がエキオラを連れて、城を出ようとした時のことだ」

アシャに促されて、アオクは話し始めた。

「こっちだ、エキオラ！」

二人が王子クノーラスの前から逃げだして、もうどのくらいたったのだろう。

ダノマの街の中心にあるクノーラスの住まう居城は、本城に比べて小規模でそれほど広くないはずだったし、アオクはダノマの街の近衛隊長として何度もここを訪れ、勝手は十分知っているはずだった。

だが、今夜に限って、アオクとエキオラは出口になかなか辿り着けない。

「駄目よ、アオク！ また壁だわ！」

「畜生っ！」

二人は向きを変えて再び走り出した。

これで何度壁に遮られたことだろう。何もなく通り抜けられると見える通路には実は見えない障壁があって、それが近づくにつれていきなり色を帯びて壁となって出現し、行く先々を遮ってくる。必死に逃げ惑いながら、二人はクノーラスの居城の中で果てのない堂々巡りを続けている。

出口のない迷路をさまよう不安だけではなかった。

少しでも気を抜けば、二人の足下に妙にブヨブヨした塊がまとわりついてくる。半透明で五、六歳の子供ほどもある球体、青黒い液をたたえた内部が透けて見える気味の悪いものだ。びしゃびしゃと床を濡らしながら這い寄ってくるそれに、一度はエキオラが片足を捕らえられ、泣き叫ぶエキオラをアオクは必死にかばった。

「くそおっ！」

剣を閃かせて、球を断ち切る。

ぐしゃっと中の液体を吐いて潰れるかと思いきや、その球は一度割れた体を、細く粘り着く糸で引き寄せるように、ずるずるくっついてすぐに再生し、前と変わらぬ速度で迫ってくる。

「化け物が！」

「アオク！」

抱きつくエキオラを掬い上げ、肩に担いで、アオクは歯ぎしりしながら通路を逃げた。

「ドヌーだ」

「え？」

アシャの声にアオクが話し止む。しまったと思ったがもう遅かった。

「ドヌー？ あの太古生物のドヌーか？」

確認してくる顔はみるみる色を失っていく。

「...たぶん、間違いないだろう」

「俺も聞いたことがある」

仕方なしに同意したアシャに、イルファが身を乗り出した。

「球の中へ生き物を引き込んで食っちゃう奴だろ」

「おまけに、その中にある『目』を殺らないと死なない.....」

アオクが昔語りを思い出すようにつぶやいた。

「しかし、どうしてドヌーが.....」

「一体どうなってるんだ？ レガに、クフィラに、今度はドヌー？」

世界はおかしくなっちゃってるんじゃないか。

イルファががしがしと頭を掻きながら唸る。

「レガ？ クフィラ？」

アオクがぎょっとした顔でイルファを見た。

「そんなものまで？」

「そうだぞ、俺達はなあ」

「先を話してくれ、アオク」

得意気に話そうとするイルファをアシャは遮った。

城の中を走り回るアオク達に、ドヌーは次々と襲いかかってきた。ぶよつく体を信じられない素早さで移動させ、床から壁へ、壁からアオクへと跳ね返ってくるのだ。

アオクはエキオラを抱えたまま、右に左にそれらをかわし、時間稼ぎに数体切り捨てて走り続けた。その前に再び無情に壁が迫る。すぐ後にはドヌーが数を増して迫ってくる。

「エキオラ...」

「アオク...」

さすがのアオクもこれが最後と諦めた。

エキオラを降ろして背後に庇い、ドヌーが迫ってくるのに剣を構えながらじりじりと後へ下がる。しがみついてくるエキオラの体を最後まで守ろうと強く壁へ押しつけた、その時、エキオラが妙な声を上げた。

「アオ...っ」

「エキオラ！」

てっきりドヌーに襲われたと思って、振り返ったアオクの目に映ったのは、壁に半身吞まれつつあるエキオラの姿、ぞっとして身を乗り出すアオクの背にドヌーが突き当たり、彼はエキオラの方へのめった。近づく壁、激痛を予期してアオクは思わず目を閉じ...

「?!」

次の瞬間、信じられないことが起こった。

アオクはエキオラもろとも城の外へ転がり出していたのだ。

呆然とする間もなく、アオクは走り出してくる追手に気づいた。

エキオラを急ぎ立てて走り出し、もつれる脚と混乱する頭をただひたすら逃げることに集中させ...  
.....ようよう、自分の家の近くまで逃げた時、アシャとユーノの助っ人によって九死に一生を得ることになったのだ。

「目に見えない.....じゃねえや、目に見えてるけど触れねえ壁とドヌーだらけの城、か」

イルファはうなって腕を組んだ。

「王子もどうされたのか...ご無事であればいいが。だが、何よりあいつらがこの街に溢れて来たら」

ごくり、とアオクは唾を呑み、途中倒れた兵にのしかかり球体の中へ引きずり込むのを見たのだ、と付け加えた。

「.....それこそ大惨事になる」

「さしものダノマも一夜にして廃墟、だな」

イルファがあっさりと言い放ち、ユーノが微かに体を震わせた。



アシャは横目でちらりとユーノを見たが、彼女は考え込んだ顔で何も言わない。

「兄さん……」

エキオラに付き添って出ていったラセナが戻ってきた。

「ん？」

「エキオラが兄さんと呼んでるわ」

怖くて一人では居られない、って。

そう告げられて、一瞬切ない表情になったアオクは、小さくため息をついて席を立った。

「わかった……側に居よう」

そのアオクをじっと見ていたユーノがずっと視線を外へ向ける。

「夜が明けた、ね」

「それほど時間はないな」

ドヌーは夜行性だったよな、とイルファが眉を寄せる。

「一度お休みになって下さいな……みなさんも」

ラセナが言った。重い腰を上げるユーノ達にいたずらっぽい笑みを投げて、

「今日は出られませんわ、兄さん。エキオラが引き止めますから」

「たぶんね」

ユーノが少し目を細めて微笑む。と、ラセナが薄く頬を染めた。

「お疲れでしょう？」

「いや、それほどでも…」

「お強いんですね」

ラセナはユーノの黒い目にじっと見入った。

(おい)

待てよ、その対応は。

アシャがあっけにとられていると、ラセナはユーノにきよとんと見つめ返され、いきなり我に返ったように、身を翻して、ばたばたと足音をたてて部屋を出ていってしまう。

「ほー、あの子、ユーノに気があるのかな」

イルファがまた呑気なことを言った。

「そんなの……困るよ」

「お、いっちょまえに赤くなりやがって」

がはは、と笑って、イルファは伸びをしながら部屋を出ていった。

「冗談じゃないよ…」

さすがに困惑した顔で外していた剣帯を掴んで、ユーノが不安そうにそれをいじくる。戸惑った横顔が久しぶりに年齢相応に見えて、苦笑しながらアシャは近寄った。気づいたユーノが、ふと目を上げる。

「まいったね」

「……また首を突っ込む気なのか？」

問いかけると、一瞬ためらって気まずそうな顔でユーノはそっとうなずいた。

「うん、だって」

みんな一所懸命なのに、このままじゃ。

軽く唇を囁む顔に強い決意が見える。

(止めても無駄だな)

アシャは溜め息をついた。

「おまえの剣の罫はどうする？」

答えは予期しているが、尋ねてみる。

ぎく、とユーノは体を強張らせた。しばらく考え込む様子だったが、やがて真正面からアシャを見つめて、

「だからと言って、放っとけないだろ。……狙いは私なんじゃない？」

「え？」

「『銀の王族』としての私、じゃないの？」

なぜそれを。

いつそれを。

「ユーノ……」

どこまで、知っている。

立て続けに問い正しそうになった質問をアシャは静かに飲み込む。ふ、とユーノが目を細めて笑った。

「やっぱり……」

「それをどこで聞いた？」

「どうして？」

一番無難で大事な質問をそっと舌に載せる。

『銀の王族』のことばを知っている者は『ラズーン』に近い。そして、それを『ユーノ』に知らせた者は違う意味で『ラズーン』にかなり近い。

敵ならばその口を封じておく必要がある。味方ならば。

そこで思わず目を伏せた。

味方でも、時と場合によっては。

その先に続くことばを、その酷薄さを、それを行える自分の冷たさを、アシャはよく知っている。

それをユーノに見せたくなかった。

「…草猫からね」

黙ったアシャにユーノがぼつりと応じた。

「もっとも、意味、はよくわからないけど……アシャ、知ってるの？」

「……」

「いいよ。あなたに嘘はついてもらいたくないから」

苦笑しながらユーノがこちらを見上げていた視線を逸らす。

その瞬間、お互いの間にあるどうしようもない溝を、どれほど望んでも重ねられるはずもない運命を感じて、アシャは苦しくなった。

(俺は、お前を、得ることができない)

アシャが、アシャ、である限り。

「それより、アシャ」

「…ん？」

何かを振り切ったようにユーノが声色を変えて、もう一度自分を見上げてくる。

「できる限り早く、剣を教えてよ」

「剣を？」

「あなたが類稀な武人でもあることはわかってる。あなたの剣は綺麗で凄まじい」

真っ黒な瞳が強い意志をたたえてアシャを貫く。

「この先もっと危険が増えるなら、少しでも隙をなくしとかなきゃ、足手まといになる……私はもう、私が未熟だから誰かが傷つくなんてことは嫌なんだ」

「もう？」

「あ…」

はっとしたようにユーノは薄く赤くなった。揺らいだ瞳が一瞬閉じられ、すぐに見開かれたその中に深く激しい想いが感じ取れてアシャは落ち着かなくなる。

(誰を、想った?)

ユーノの中の深い場所に誰かが居る。

(そいつのために、お前は)

あれほど傷ついてもなお、剣を鍛えて守ろうとするのか。

レスファートやセアラではない、もっと強くて熱いその気持ちを向けられた相手。

「……わかった。なるべく早く教える」

そんなことをして、俺は何をしようというのか。

「そのかわり、厳しいぞ」

守る代わりに自分を危険に晒すようしむけて。

「大丈夫」

にこりと笑ったユーノが、ああ、私も少し寝てこよう、と部屋を出ていくのを見送る。

(俺のやろうとしていることは)

結局あんたと同じなのか、ゼラン。

胸の中に渦巻いた感情は嫉妬。

「……抱きしめ、させろ」

アシャは口の中で低くつぶやいた。

「でないとお前を」

殺しそうになる。

「つーまんない」

レスファートは、閃くユーノの剣を目で追いながら言った。

陽はそろそろ中空にかかろうとしている。

ジェブの樹の根元で、アシャに剣を教えてもらっているユーノの姿を見ながら、レスファートは少々ふくれている。

エキオラの引き止めが予想以上に効を奏して、アオクは三日、家を出るに出られなかった。

その間、奴らはクノーラスの居城に立てこもったまま、街へ出て来ていない。

城内でどんなことが起きているのか、残されていた人々はどうなっているのか、アオクとしては気も焦るようだが、それ以上にドヌーへの警戒が強い。そして、それはユーノも同じ、アオクほどの武人が逃げるしかなかった怪物に、少しでも対抗できるようになろうと、寸暇を惜しんで訓練に励んでいる。

「ぼくもやるう」

「だーめ！」

息を軽く切らせながら、ユーノは言った。

「まだ傷、治ってないだろう？」

差し上げた片手をゆっくりと前へ、弧を描くように右へ回す。

直立させて支えている剣が陽をはねてまばゆい。

汗が流れてくる。

アシャの剣。

始めのうちこそ、じっと見守るアシャの視線に照れもしたが、今教えられているものがゼランやこれまでの剣とは全く違う種類のものであることはすぐにわかった。

動き自体は難しくない、むしろ簡単で単純、けれど、その一つ一つに対する筋肉の伸縮や程度まで意識するばかりか、それを制御しろと言われて仰天した。もちろんいきなりできるわけがなくて、動けなくなってしまったユーノに、アシャは複雑な笑みを浮かべて、横になれ、と言われた。

『横に？』

剣の練習なのに？

戸惑うユーノは続けて剣を持つな、上着を脱げと言われてなお困惑して立ち竦む。

そのユーノにアシャはにこりと笑って、脱がないなら剥ぐぞ、と楽しげに宣言した。

『ばっ』

何考えてんだっ。

『いいから寝ろ』

押し倒されたいのか。

目を細められぼそりとつぶやかかれて、唸りながら上着を取り、表の庭の端で横になった。

『目を閉じろ』

『なんでっ』

『教えないぞ』

『う』

仕方ない、と目を閉じる。瞼にちらついていた日差しが遮られて、アシャが覗き込んだと気づき、無意識に体温が上がっていく。

『っ！』

ふいに鳩尾に温かいものを当てられびくりとした。

とっさに側の剣を掴んで跳ね起きそうになったのをかろうじてこらえたのは、それがアシャの掌だとわかったからだ。

大きくてしっかりした掌がユーノの鳩尾からゆっくり腹へと滑る。

息を詰めていると、

『ここに集中してるな?』

『.....うん』

『じゃあ手を押し上げるように息を吸い込んでみろ』

『...うん』

すう、と息を吸い込むと、普段入り込まないほど体の奥深くを空気が流れていくような気がした。

『そうだ.....じゃあ俺の掌を載せたまま降ろしていく感覚で息を吐き出せ』

『ふ...う』

アシャの掌がひたりと肌着を通して皮膚に触れてくる。

『もう一度』

『ん.....』

ゆっくり押し上げていく掌、感触が遠ざかって離れていきそうになる。

『吐く』

『ふ.....う』

掌から甘やかな波が降り落ちてくるようだ。少しでも長く感じていたくて、ことさらゆっくりと息を吐いていると、ふと微かにアシャが笑った気がして目を開ける。

『.....』

思わぬほど間近にアシャの顔があった。

澄んだ紫色の瞳が光を吸い込み煌めいている。瞳の奥で虹が弾かれ、見上げた視界を覆っていく。

『いいぞ、今度は今の動きを自分でやってみろ』

『.....うん』

掌が離れていったのを名残惜しく思いながら、筋肉の動きと呼吸の流れを再現するように動かしてみた。

『どうだ?』

『うん.....凄く気持ちいい...』

『自分の体がどう動いているのかわかるか?』

『わかる』

『自分の呼吸がどこへ運ばれていくのかわかるか?』

『わかる』

『よし、じゃあ次はここだ』

『...っ』

胸の上に掌を置かれて一瞬固まった。

だが、アシャの顔は真剣だ。むしろ厳しい、と言ってもいい。

『同じようにやってみろ』

『動きと、呼吸を、意識する?』

『そうだ』

アシャの掌に全神経を集中するのは簡単だ、むしろその熱がもっと欲しくてねだりそうになる。

『...』

自分の目が心の深くまで晒してしまいそうで、慌ててまばゆい瞳から目を閉じた。

『.....よし.....次はここ』

『腕?』

『同じだ、息を吸い込み』

『動きを、意識する』

呼吸が届く器官がないはずの腕の中に、呼吸すると同時に何かの流れが出現したのにどきりとした。

『アシャ』

『...どうした?』

柔らかく問いかけた声が掠れているように響いて胸が疼いた。

『息が、届く』

『動きは?』

『あ.....ごめん』

指摘されてもう一度、アシャの掌を意識しながら呼吸をやり直し、それに伴う動きを確認した。

『そのままゆっくり手を握る』

『うん』

手を握ってまた離し、そのときにどこの部分がどのように動くか、一つ一つ確認する。腕が終われば脚。脚が終われば、今度は首とうつぶせになって背中。

『……よし…いいだろう』

『ふ、う…』

一通り終わったころには、体中がほてって感覚が鋭くなりすぎていてひりひりするような気がした。

『さすがだな』

『え？』

『よく訓練されてる』

目を開けて座ったユーノに、アシャが冷たい水を持ってきてくれて笑った。

『こっちが指示したところがすぐに動かせるんだな』

『？』

『普通はまずそれができないもんだが』

『ああ…』

重ねられて何を言われてるか理解した。

『あちこち怪我したから』

『え？』

『あちこち、怪我して』

それでも普通にしてくれなくちゃならなかったから、他の部分でどうやったら怪我してないように振る舞えるか、いろいろやってみてたんだよ。だから、こっちを動かさずにそっちだけ動かす、とかって結構得意なんだ。

笑うと、アシャが一瞬奇妙な顔をして、もう一杯水を持ってきてやる、そううろたえたように慌てて立ち上がったけど。

(あれはやっぱり)

おかしなやつだって思われたんだろうな。

ユーノはちょっと溜め息をつきながら、意識を手に戻す。

(普通そんなことはできない、のか)

「よーし、そのまま左の動きをつけて」

見守っていたアシャが満足そうにあっさり命じた。

「魔物(パルク)ーっ！」

「…何とでも言え。教えろと言ったのはそっちだからな」

一瞬複雑な表情で見返したアシャが苦笑する。

「ちっ」

(まったく、ほんとに容赦ないんだから)

左手と左足をゆっくりあげる。膝を突き上げ、そのまま、下腿だけ前方へゆっくり爪先までのばしていく。

「ほら！ 意識しろ、爪先に届いてないぞ！」

「くっ」

体が震える。

アシャは別に難しい動きを要求していない。剣を持たせてくれたのも、ようやく今朝からで、それでも体の各所の緊張と弛緩を細かな筋肉の動きを常に意識しながら繰り返すだけの訓練なのに、未だにアシャが要求する全ての動きをすることができない。

(くそお！)

きり、とユーノは奥歯を噛みしめた。

見本だ、そう言ってみせてくれたアシャの動きは滑らかそのものだった。

剣を手にしているのではなくて、まるで美しい布か扇のようなものをかざして舞っているような動き、翻る腕の下を潜る姿は微かに伏せた目元が淡く紅潮していて、あでやかな美姫を描いた一幅の絵巻物を見せられているような気がした。体のいろんな部分がどこもずれなくためらいなく、連動してつながり動いていく。日差しの強さに薄く汗を浮かべた肌から、それでも雫が滴ることはなくて、緩やかに開きまた閉じていく体の内側に吸い込まれてでもいくように消えていく。

だが。

その動きのどこへ切り込むか、そう考えた瞬間に、その舞いが髪の毛一筋の隙もないのが見て取れた。

空いたと思った間隙は次の一瞬で振り下ろされた剣に断たれる。踏み込めると感じた場所に脚を降ろしたが最後、くるまれるように攻撃されて屠られるのは目に見えている。そうやって気づくのは、全てが罠のように巧みに攻撃を誘う動きだということ、しかもそれは計算ずくで、吸い込まれるように剣を延ばせば、腕ごと剣を落とされるのは明白、ならばと防御に徹しようとするれば、どの動きを封じれば安全なのか、どの動きが致命的なのかがわからない。

いやむしろ、どの動きも致命的なのだ、そう気づいたときには既に命は遠く死の女神（イラクートル）に持ち去られているだろう。

ぞくりとした。

これほど完成された動きは見たことがない。これほど見事な攻防一体となった技は知らない。

（学びたい）

強烈な衝動だった。

（あの剣を身につけたい）

生き延びるために。守るために。

（レスファートを、イルファを）

止まるわけにはいかないのだ。生き抜いて、なんとか『ラズーン』まで逃げのびて。

（アシャ）

彼をレアナの元へちゃんと戻さなくてはならない。

何があっても、だ。

（姉さまが泣くのは見たくない）

アシャはユーノの正面に腕を組んで立っている。ほっそりした肢体が無理なく自然の風景に溶け込んでいる。

ふと、いつアシャの見納めになるかわからないのだと、そんな切なさがユーノの胸に湧き起こる。

（それはいつ、だろう）

風に未来が見えれば、とユーノは思った。

（しかし、まさに一種の天才だな）

アシャは教えた動きを未熟ながら、ゆっくりと確実にこなしていこうとするユーノを見つめながら考えた。

常人なら二十日はかかる、アシャのような金のオーラの持ち主である視察官（オペ）でも、ここまでくるのに五日はかかる課程を、ユーノはほぼ三日で覚え始めている。

『あちこち怪我したから』

なぜこんなに自分の体をうまく使えるように訓練されているのだろう。ゼランが？ まさかな。

そう不審がったアシャにユーノはあっさり言い放った。

『あちこち、怪我して、それでも普通にできなくちゃならなかったから、他の部分でどうやったら怪我してないように振る舞えるか、いろいろやってみてたんだよ。だから、こっちを動かさずにそっただけ動かす、とかって結構得意なんだ』

馬鹿やろう。

一瞬そう詰りたくなった。

胸倉を掴んで、抱きしめて、そんなことを得意がるもんじやない、と。

怪我をしたのに訴えられない、休むことも許されずいつもの仕事をこなさなくちゃいけない、だから自分の体を限界まで使う術を身につけた、そう言っているのと同じなのに、気づいてないのか。

けれど、それがあったからこそ、こんなに短期間で視察官の剣を飲み込むことができる体になっている。

そうして生き抜いてきたからこそ、アシャと出会うまで生きていてくれた。

ユーノの強さを喜ばばいいのか悲しめばいいのか。

今抱きしめたいこの気持ちを抑えればいいのか伝えればいいのか。

惑乱に耐えかねて側を離れた。

(この剣が使えるようになれば、『銀の王族』の視察官(オペ)ができてしまうな)

微かな苦笑をアシャは浮かべる。

よもや、『太皇(スーグ)』もそんな事態を考えていなかっただろう。

(特別な、『銀の王族』)

自らの運命を自ら選び取っていく、その強靱な魂の出現は、ひょっとすると。

「アオク！」

いきなり響いた叫び声に、アシャの思考は断ち切られた。ユーノも動きを止めて振り返る。

跳ねるように開かれた戸口で、泣き顔になっているエキオラが額の紅宝石をとって、アオクの手に握らせている。

「行くのか？」

「ああ」

アオクは鎧の下にエキオラの紅宝石を入れた。

ユーノが剣を納めて急いで近寄ってきた。

「ボクも行くよ」

「.....とんでもない、と断るべきなのだろうが」

アオクは暗い笑みを広げた。

「ありがたい、感謝する」

「.....お許しを...そして、どうかご無事で」

涙を溢れさせながら、エキオラがすすがるようにユーノを見つめる。そっと頷くユーノの背後から、アシャも口添えした。

「俺も行こう.....イルファ」

「おう」

アオクとエキオラの後から戸口に顔を出したイルファがにやりと笑う。

「後を頼むぞ」

「まかしておけ。こっちへ来るようなことがあったら、刀の錆びにしてくれる」

ぼんぼんと誇らしげに叩く剣の柄にはやはり紅のリボンがしっかり結びついている。

「.....いい加減にそのリボンを取れ」

「.....いい天気だなあ」

戦い日和だぞ、とイルファが聴こえないふりをするのに溜め息をつきながら、アオクに続いて馬に乗った。

「ユーノ、ちゃんと帰ってきてね」

ユーノはレスファートにしがみつかれている。今回は側にラセナも不安そうな顔で立っている。

「お気をつけて」

ラセナが今にもユーノに唇をあてそうな気配で近寄るのに、慌ててユーノが馬に身を引き上げる。

「行くぞ！」

「はっ！」

走り出したアオクにユーノが短い声をかけて続く、そのとたん、

「アオク.....愛してるわ！」

「!!」

ふいに激しい叫びがエキオラの口から迸った。

びくりと身を震わせたアオクが、それでも振り返らぬままこぶしを握って馬の背に伏せる。

一瞬エキオラを振り返ったユーノが顔を戻す際、見つめていたアシャと視線があって顔を歪めた。唇を噛み、振り切るように顔を背けた表情は切なげで苦しげだ。

愛してる、か。

(お前は、誰を想った)

その後を追うアシャの胸にも、エキオラの声が重く響いた。

それは遠目には尖塔や壁に奇妙な形の浮き彫りがされている、そういうふうに見えた。

「あれが、クノーラス城...？」

「、っ」

ユーノに確認されたアオクが微かに息を呑む。

城に近づいていくに従い、その不思議な浮き彫りが蠢いているのが見えてくる。陽の光を鈍く反射しながらぬらぬらと動くそれが何かを見定めて、ユーノはぞくりと背中への付け根が竦むのを感じた。

ダノマの街のあちらこちらで見られる緑がかかった青の石で作られた城、それはおそらくは瀟洒とも言えるほど繊細な造りのものだったのだろうが、今はあちこちが焦げたり崩れたり、得体の知れない液体でぬめっていたりと酷い有様だ。その壁と言わず窓と言わず、所狭しと不気味な半透明の青黒い球体がへばりついて揺れながら動いている。

生臭い臭いが濃厚に漂ってきて、真っ先に馬が怯えて動かなくなった。

「こ...れほどになっているとは」

呻くように、アオクがことばを絞り出す。

街の住民はこの辺りから逃げ去ってしまっているのだろう、人っ子一人いない通りに天幕（カサン）地の薄汚れた布が捨て去られている。その側に、砕けたまがいものの宝石細工が転がっていた。泥土に埋まり込む細工物に、どれほど急にその場を離れたのか、どれほどうろたえて人々がここを去ったのかよくわかる。

「この様子では、城の中の人間はほとんど生きてないな」

冷やかなほど淡々としたアシャの音が響いた。振り向けば、異形の怪物の巣窟と化した城を見ても動揺一つ見られない静かな顔で、懐にしていた剣をゆっくりと抜き放つ。

「.....王は王子を見捨てられたのだろうか...」

苦しうにアオクが項垂れかけ、ユーノと同じようにアシャを振り向き、その手に握られた短剣に訝しげな顔になる。

「それで戦う、気か？」

確かに拵えは見事、名品だろうが、とことばを曖昧に濁して顔を歪めたのは、目の前の惨状を前にして腕一つ分もない短剣で向かえると思った相手の力量に不安を抱いたからだろう。

だが、そういうアオクの危惧にいらだった様子もなく、

「太古生物相手には必要ないが.....」

凄んだ美しい微笑をアシャは浮かべた。

「その背後の影には役立つ」

(やっぱり)

ユーノも腰の剣を確かめた。

(『運命（リマイン）』を考えている.....)

太古生物が単に復活しているのではなく、アシャはその裏に『運命（リマイン）』という存在が暗躍していると確信している。

(なぜだ?)

そこまでの確信を抱かせるのは、アシャの旅人としての経験と知識か。

(それとも)

未だユーノが知り得ない、アシャの隠された別の顔が蓄えている何か、だろうか。

「どうする？」

呆然としているアオクを促すように、アシャが尋ねた。

「王子を救う.....もはや、遅いかも知れんが」

陰っていたアオクの顔に厳しい表情が蘇った。エキオラの想い人、だから守る、その思いは出掛けの彼女の叫びでかなり勢いを削がれたはずだ。このまま城を見捨て、まずは街と民の防衛に走っても誰もアオクを責めないに違いない。

だが逡巡の後、アオクは顔を上げた。

ばかりと開いたまま、まるで彼らを待ち受けているかのような城門に向けて馬首を巡らせ、アシャに笑いかける。

「俺は、近衛、なのでな」

「...だな」

アシャが同意を示すように苦笑し、ユーノもうなずいた。

もし万が一、セレド皇宮がこのような状態になっていたとして、万に一つも生存者がいないかもしれないと思っても、両親やレアナ、セアラ、あるいは尽くしてくれた者が中に居るかもしれない、そう聞



かされれば、ユーノだって飛び込むだろう。

「すまない、行くぞ！」

二人の顔に力を得たように、は、あっ、とアオクは馬の腹を蹴った。

「い、やっ！」

「はっ！」

重なるようにユーノとアシャも馬を叱咤する。掛け声が交錯し、三筋の流星のように馬が走り出す。そのまま一気にドヌーが張り付く城門を抜け、よりびっしりと溜まっている入り口へと突っ込もうとする、だが。

「ち、いっ！」

城門直前で、アオクの馬が臭いと気配に怯えて騎手に逆らった。棒立ちになっていななき、首を振る。アシャの馬もそれに刺激されたようにたじろぎ、激しく地面を踏み鳴らして勢いを殺してしまう。

と、その間をまさしく『白い星（ヒスト）』のように駆け抜けて、ユーノの馬が躍り出た。

「よしっ！」

低く身を伏せ、今にも上空から振り落ちてきそうなドヌーの下を、小さく馬を励ましながら速度を上げて駆け抜け、ユーノはあっという間にただ一騎、城内に走り込んでいく。

「ユーノっ！」

一声叫んで、アシャは乱暴に手綱を引き、怯えた馬を抱くように体を寄せた。汗に濡れてびくびく震える相手の恐怖を感じ取る。次の一瞬、間近に迫った城門からドヌーがびちゃっ、と音をたてて跳ね飛んできて、必死に馬が身をよじる。

「くっ」

崩れた体勢、それでもふわりと体重を移動させて体を戻し、アシャは頭上に迫ったドヌーをあっさり一刀両断した。

いや、素直に二つに切ったのではない。剣を一閃、その切っ先で表面の薄い膜を切り裂き、青黒いぬらつく液体が吹き零れてあらわになった黒い球体を、返す刃先で断ち割っている。

飛びついてきた勢いそのまま後方に流れていくドヌーに追い立てられるように、馬は泡を吹きながら前方に駆け出した。跳ね狂うようなその動きに、アシャは巧みに体を合わせ、振り落とされることなく馬を制御する。

背後でべしやりと地面に叩きつけられるたドヌーが、ずっ……と再生のために体を引きずり合わせかける。が、その力はすぐにドヌーから抜けた。見る間にどす黒い煙を吹き上げながら黒い塊になってぐじゃぐじゃ縮んでいくのに冷笑してアシャはアオクを見やった。

「そこが『目』か！」

はっとしたように、アオクが叫んだ。激しく暴れる馬に振り回されながら、自らも必死に正面から飛んで来たドヌーの体に剣を擦らせ、内部の黒い球を確認すると同時に剣の切っ先でそこを貫く。

びくっとドヌーが痙攣し、どろりと剣の先から溶けて流れ落ちた。

「先に行くぞ！」

「お、おう！」

アオクが対処できそうだと踏んで、アシャは剣にゆっくり意識を込めた。

(一体ずつやっついてはきりが無い)

先に飛び込んでしまったユーノがどこまで無事で居てくれるのか、一刻も早く側に行かなくてはと焦る気持ちを鎮め、みるみる猛々しく黄金色を増してくる剣を凝視する。

同時に拡散する意識の周辺にドヌーの動きと配置があっという間に叩き込まれてきた。右上から三体、左上から五体、真上は今のところ空いているが、足下に素早くすり寄ってくる塊は数体分はある。

「ア、シャ...っ！」

それらが一斉にアシャに飛びかかったのを見てとったのか、後からアオクが絶望的な叫びを上げた瞬間、黄金の短剣が微かに浮き上がるような感覚で満ちた。

「退け」

つぶやく声は呪詛にも聞こえた。自分とユーノを隔てるもの全てに向けられた冷たい殺気の塊が短剣から吹き出す。

身の内に広がる傲慢な意志。

「俺を、遮るな」

じゅん、と大気を焦がす音がした。差し上げた短剣に触れるか触れぬかでドヌーが次々黒色化し、粘着性の音もたてることなく地面に降り落ちて腐臭を放つ。背後でアオクが毛を逆立てて見守る気配、それを顧みることなく、アシャはユーノの後を追って城の中へと駆け込む。

「続け、アオク！」

「わ、かった！」

悲壮な声を耳にしても振り返らず、ドヌーの崩れ落ちたねばつくような腐敗臭の道を一気に入り口まで切り開く。

「ユーノ！ どこにいる！」

入った所は大広間だった。

四方へと入り口が開いているが、それぞれに通すまいとするようにびっしりドヌーがしがみついている。が、正面の入り口付近だけは、ドヌーの層が薄く、周囲に既に黒色化したドヌーが点々と転がっているのが見えた。

「そっちか！」

さすがに恐怖に耐えられなくなったのだろう、馬がいなくなきながらアシャを振り落とそうとするのに飛び降りた。そのまま正面入り口に駆け寄って死骸を確認めると、どれも鮮やかなほど一太刀で殺られている。

始めから『目』を狙って切っているのだ、と気づいて感嘆した。

(何ともこれは...)

『目』が弱点、そう教えられても、外皮はぬめっていて剣先が滑るし、対照的に内部の球体は弾力があり硬質で、しかも中身の液体の中を緩やかに漂っているようなもの、狙いを定めたからと言ってそうおいそれと切れるものではない。ましてや、次々飛びかかってくるということは、その内側の球体も揺れ動いているということ、名のある武人でもどれほどがそれを捉えて攻撃を放てるか。

「ああ」

そうか、と思い出したのは、ここへ来た時にユーノが道端でやっていたからと見せた剣だった。

あれは台の上に置いた小さな果物を動かさずに切る大道芸なのだが、もともとは固定されていないふわふわ漂う物体、例えば空中に舞う花びらや水中に落ちた葉を切ることができるまで完成できる技でもある。迫っていく勢いで相手を吹き飛ばさずに切り抜けるそれには、独特の感覚が必要なはず、それを、ユーノは見ただけで再現してみせていた。

「あれが、役立ったのか」

一瞬くらくとしためまいが襲ったのは、その類稀なる才覚の可能性に圧倒されたからだ。

(何という、力)

額を押さえて震えが走った体を堪える。

経験したものの得たもの全てを飲み込み消化し、新たな能力として結実させ、生き残る道を切り開いていく、この『人』という種族の脅威。

それはやはり遠く遥かに『太皇（スーグ）』が自分に見たものにも重なるようで。

微かに体が震えてしまう。

凄まじい力の可能性を見せつけられたとき、人はそれが伸びゆくさましか考えたくなくなるのだろうか、それがひょっとしたら、その持ち主さえも破滅に導きかねないとわかっている。

(あなたもそうして)

俺を生かすことを望んだのだろうか、破滅に向かう世界の彼方へ、『人』を離れても辿り着く道を探すようにと。

(だがそれこそが)

この世界を破滅させ、『ラズーン』に二百年祭を課し、『運命（リマイン）』を、太古生物を、そしてアシャ自身を生み出した、根源にあるものではないのか。

(可能性への、欲望)

アシャが今ユーノを望むことも、その欲望の末端に置かれるべき駒でないと誰が言える。

遠い遙かな過去に設定された流れの果てではないと、誰が保証してくれる。

(ましてや、人は『ラズーン』を造ったのだ)

脳裏に過るのは闇の草原、光り輝く滅亡の光景をアシャは自分の内側に抱えている。

だからこそ『ラズーン』を離れ。

名を捨て。

自分の命も世界に晒して悔いなしと放浪を決め。

なのに、その離脱こそがユーノに出会う唯一の道筋だったのかもしれない。

(ならばなお、魅かれるわけにはいかない、はずだ)

ユーノがただの『銀の王族』ではなく、ユーノがユーノであるならばなおのこと、アシャがユーノを望むことは世界を壊すに等しいはずだ。

それとも。

(それこそ、が?)

『太皇(スーグ)』が選んだ彼方への道だとしたら。

(俺は)

湧き上がる歓喜。

(ユーノを)

「うっ！」

「、ユーノ！」

遠くで響いた微かな声に体は勝手に反応した。それがユーノの悲鳴だと判ずるまでもなく、間近に迫っていたドヌーを屠るという意識さえなく、焦げついた塊に変えながらアシャは走る。

(魅かれる、呼ばれる)

体が意識がユーノの危機に应じてしまう。

「ユーノっ！」

失うかもしれないという恐怖に、悲しみよりも怒りが先立つ自分のまずさをわかっているはずなのに。

(止められない)

飛び込んだ部屋は、どうやら塔へと続く階段の最下部にあたる部分らしかった。

慌ただしく周囲を見回し、壁を這うように螺旋状に巻き上がる階段を見つける。

「ユーノ！」

見上げたアシャの目線よりやや上で、壁に押しつけられているユーノと、それに覆い被さるような男の背中が見えた。

(あいつは、誰だ)

ナニヲ、シテイル。

凍りつくような激怒。

ソレハ、オレノモノ、ダ。

咆哮する自分の内側が止められない。

ナオコノウエニ、アイツヲ、キズツケルノカ。

ざわめく闇、血の中から。

ナラバ、オマエヲ。

屠ってやる。

喜びに唇が吊り上がる。

「.....クノーラス様！」

「！」

背後からようやく追いついてきたらしいアオクが、悲痛な叫びを上げるのに我に返った。

「何をなさっておられるのか！」

階段は一人分の幅しかなく、手すりもない。ユーノとクノーラスがせめぎあっているのは途中の小さな踊り場、足下は二人が立てば一杯で余人が入れる場所はない。

その二人に、壁を伝って、上下左右からじわじわとドヌーが這い寄り始めている。

流れてきた汗が目に入る。片目を閉じて防いだが、それでも伝い落ちる汗が染みて目が痛む。

「く.....そっ.....」

歯ぎしりして、自分の腕力のなさをユーノは呪った。

(もっと鍛えなくちゃだめだ)

でないと、何の役にも立たない。

「く、う」

城内の暑さと腐臭、動き回りドヌーを倒し続けてきた運動量、吹き出る汗と上がる息、それなのに同じぐらい動き回っているはずの相手の白い虚ろな顔には、冷や汗一つ浮いていない。

「王子……どうか……」

気休めにしかならなかったが、届くかもしれないと一縷の望みを託して訴える。

「正気に…っ」

男はクノーラス、ダノマの第三王子だった。

それと知らせた肩の紋章はさっきやりあって切り裂いてしまったが。

「うっ」

ユーノのことばが聞こえなかったように、相手はなおも体重を載せてくる。無表情にこちらを見返しつつある顔は整ってはいるが生气はなく、押しつけてくる力は異常なほど激しいのに、その熱が体のどこからも感じ取れない。

こういう気配の人間をユーノは知っている。

レガと一緒に居た『山賊（コール）』の男達がまるっきり同じ顔をしていた。顔の造作は違うのに、気配が同じ、無気力さが同じ。心のどこかが永久に壊れてしまっていて、相手本来のものはどこにも残っていないのだ。

王子の背後に薄暗い影がまとわりついている。おそらく『運命（リメイン）』の支配を受けているのだろう、が。

（強い…）

隙がない。弱点が見つからない。

自分の体に対する怯みや守りが無い分、踏み込みが深く容赦がない。ユーノがそれでもまだクノーラスを守ろうとしているのを気づいたのか、途中からユーノの剣先にわざと構えぬままで手足を差し出し剣を止めようとしてくる。

止めかねて一度深く切り込んでしまった脚からどす黒い血のような、何かもっとねばっこいものが衣服の下を伝って滲み出し石の床に滴り落ちて、それまで床と壁の下辺を這っていたに過ぎないドヌーが、その血の臭いに引き寄せられるように集まりつつある。

「ぐ…」

ぎしぎし刃こぼれしそうな音をたてて噛み合っている剣を上からのしかかるように剣先を沈めてくるクノーラス、それ以上後ずさればあっという間に床を踏み外して落ちるだろうに、その恐怖はないらしい。逆に、喉元に近づいてくる切っ先を、はね返せばクノーラスは落ちてしまう、その怯みがユーノに最後の一押しをためらわせ、動くに動けない。

ドヌーが這い寄ってくる音が、ずる、ずる、と、背中を押し付けた壁を伝わって響く。遠回りするように上からも忍び寄ってくる相手が滴らせてくる雫が顔のすぐ側を降り落ちていく。

嫌悪感が湧き起こり、とっさに避けかけて、ユーノは必死に踏み留まった。

この位置のまま、ドヌーから身を竦めてもどうにもならない、逃げ場がない。

気づくとクノーラスの足下間近に、這い上がってきたドヌーがまとわりつつこうとしている。

「ち、いつ」

ドヌー達にはクノーラスも餌でしかないのか、脚を伝って這い登り絡みつこうとしているが、クノーラスは頓着していない。まるで自分に何も起こっていないように、ただただ剣に力を込めてくる。

脳裏をアオクの思い詰めた顔が過る。

『運命（リメイン）』に乗っ取られているとはいえ、アオクが主と決めて、その救出のために飛び込んできたここで、みすみすドヌーにクノーラスを食わせるわけにはいかなかった。

「ふっ」

一瞬気を溜めてぎりぎり小さく剣を弾き、ゆらっと背後に倒れかけた相手の腕を掴む。右側にならドヌーも居ない、空間もあり脚の踏み場もある。

「く！」

人形のように切り掛かってくるクノーラスの剣をまた弾き、誘うように階段を上へまた走り上がる。なぜそうしたのか、なぜ出口さえない階段の上へ走るのか。

その一瞬、自分の頭からは疑問が抜け落ちていた。

「！」

押し込まれていたユーノが相手を一瞬弾いてほっとする間もなく、落ちかけたクノーラスを引き寄せ庇い、階段をなお上に駆け上がって、アシャはぞっとした。

（何をしている）

確かに登っても降りても階段も壁もドヌーで一杯だ。クノーラスをその餌食にするまいという配慮、窮地を切り抜けるとっさの判断の難しさもわかる。

がしかし、階段は塔を内側で巻き上がりつつ頂上に繋がり、アオクの話によればそれは物見台で終わっている。そこへどれほど急いで駆け上がろうと、やがて行き詰まりになるのは火を見るより明らか、それにユーノが気づかないとは思えない。それに、城の構造の話はユーノも聞いていた、己の所在を見失っているとも思えない、なのに。

(また)

クノーラスの剣を受けかわしながらどんどん上へ移動していくユーノに、凍てつくような想いを味わう。

(なぜ...)

「あっ」

思わず小さく声を漏らしてしまったのは、それがゼランの言い残した罫だと気づいたからだ。イルファが自分の身を敵に晒すと言ったそれが、目の前に最悪の状況となって実現しつつあると悟った。

(自分の命を一度は必ず無防備に晒していく、それも自分では気づかずに)

「そう、か」

深い納得がアシャの身内を走った。

だからこそあれだけの剣の才能をもってして、カザド兵ごときに繰り返し傷を負った。今までは多勢のせい、もしくは不意打ちの状況、そんなものを考えていたのだが。

(これは違う)

ユーノが剣を揮うたび、それは常に生き残る限界訓練になっていた、だからこそあれほど早く剣の才能が伸びたのだ。

天性のもの、後天的に加えられた容赦ない鍛錬、それこそがユーノの剣を創ってきた。

(少女として笑うことも、子供として甘えることもなく、安らぎ一切を代償に)

その運命の過酷さが磨き上げた珠、それがユーノ・セレディス、ということだ。

そして、その鮮やかさと切なさに、アシャの愛おしさは募っていく。

「く、そ」

またもや相反する気持ちを抱きながら、アシャは迫ってきたドヌーを倒し階段を振り仰いだ。

(しかも、あんなことまで、する)

無慈悲に振り下ろされる剣を受け止めるユーノ、アシャなら、次はクノーラスより少し離れて相手の胴を狙うだろう。足場には余力があり、ドヌーもまだ追いついてこない、今ならクノーラスを失神させる程度に叩き伏せられるはず、なのにユーノはその瞬間、普段の彼女からは考えられないような虚ろさで身を引き、そのうえ相手がうちかかってくるまで剣先を下げたままで身を晒して待っている。

確かにそれはほんの一瞬の間、すぐに反撃に移ろうと身構えるのだが、アシャ同様相手を屠ると決めれば怯まない『運命(リメイン)』が、そんな隙を見逃すはずもない。クノーラスも一気にその隙につけ込んで迫っていく、ユーノは微かに戸惑った顔で攻防に入る。

きっと、なぜ数瞬で間合いを詰められたのかわからなかったのだろう。クノーラスの技量が優れていると考えているのかもしれない。

(何て罫を)

アシャは歯を食いしばった。

ユーノに教えた剣法に、いや危険への感覚そのものに、ゼランを乗っ取った『運命(リメイン)』はユーノ自身を自ら追いつめていくような隙を生むようなものを植え付けておいたのだ。

(どうすれば、あれから解き放てる)

血の気が引くようないら立ちと焦りがアシャの胸に広がった。

(どうすれば)

今教えている動きだけでは不十分だ。何を危険と考えるかから組み直さないと、ユーノの剣は常にぎりぎりの勝利しか得られない。

それは、万に一つの機会に『運命(リメイン)』の刃に首を差し出すということだ。

(何からやれば)

今しも、クノーラスの追撃をかわしたユーノが足下に忍び寄っていたドヌーに気づき、移動先を求めて辺りを見回している。左の空間にはドヌーはいない、なのに、ユーノはわざわざドヌーがごじゃごじゃ集まる隙間へ身を投げて、間一髪クノーラスの剣をかわそうとする…。

(くそっっ！)

「ユーノっ！」

アシャはこぶしを握り締めて叫んだ。

「左だっ！」

びくっ、とユーノが震えて動きを止める。

(え…っ?)

ユーノは瞬いた。

アシャの声、そう思った瞬間、ふいに視界が明るく開けた気がした。周囲を見回し、今踏み出そうとした右側の空間、そこにべったりとドヌーが固まり張り付いていると気づいて、血の気が引く。

(な、にっ)

とっさに踏みとどまって姿勢を戻し、アシャの言う通り左を見ると、そこに確かに活路がある。うろたえてもう一度右を見やり、明らかにドヌーもいない、十分な足場もある左に全く意識がいかなかったのを確認する。

(さっきは違った)

打ちかかってきたクノーラスの剣を受け止める。

(さっきは右側にしか行けない、そう感じた)

けれど、忙しく頭を働かせてみれば、右側にドヌーが集まっていることをついさっきまでは気づいていたはずなのだ。

なのに、なぜ。

「っ」

(剣の罨)

辿り着いた結論に呆然とした。

視界を遮られたわけではないのに見えなかった。追い詰められたわけではないのに、わざわざ不利な場所を選ぼうとした。技の未熟からではなく、相手の間断ない攻撃によるのでもなく、自分自身で窮地に飛び込もうとしていた。

(そ、んな)

かろうじてクノーラスの攻撃をしのいだものの、無意識に竦んだユーノの腕に、どろりと上から流れ落ちてきたドヌーが絡み付く。

「くっ！」

生暖かく粘着質な感触、まるで皮膚を溶かして浸食するようなぬらつきに、思わず悲鳴を上げかけて噛み殺し、クノーラスを弾いた剣を閃かせる。青黒い液体をたたえ半透明に煙る球体、その中になお黒々と死を予告する『目』を瞬時に見極め、気合いもろとも一気に切り裂く。

ビシャ……っ！

吹っ飛んだドヌーが空中で二つに分かれ、中身を撒き散らしながら別方向の壁に叩きつけられ、ぬらぬらとした流れと化して壁を滑り落ちていくのにぞくりと震えた。

今のドヌーだって、気配は既に感じていた。もっと早く避けようと思えば避けられたはずなのに、なぜか脚が動かなかった。

(これが、罨……?)

攻撃は止まない。すぐに次のドヌーが迫ってくる。

(わかっていたのに、なぜ逃げなかった?)

今は誰も背後に庇っていない。視界の端で足下にいくらでも動ける空間があったのを確認する。

(なぜ落ちてくるまで待っていた?)

思わず上を振り仰ぐ、その瞬間に、馬鹿な、と自分で自分を叱咤した。

今お前はクノーラスと対峙しているんだぞ。

自分の内側の叫びに応じて必死に顔を戻し、かろうじて突っ込んできたクノーラスを視認する。

(まに、あう、か?)

「っ、く！」

するする首めがけて伸ばされた剣先を髪の毛一筋で避け、服を切り裂かれる。

(私は、何を、しているっ)

死にたい、のか。

(罨)

呼吸を乱してクノーラスと対峙しながら、頭の中でそのことばがくるくると輪を回して巡っていく。

(敵に自分を晒してしまう罨)

「く、そおっ！」

(どうする?)

依然感情の動きも見せぬままに剣を振り上げるクノーラスの動きを、必死に息を整えながら凝視する。

(どうする?)

冷たい汗が額から落ちて首を伝い、背中の中を凍てつかせながら落ちていく。構える気配もないまま、操られるようにあやふやに、けれど打ち込む隙をますます消して接近するクノーラス、疎みかける腕で剣を構え直す。

(どうする.....どうしたらいい?)

自分の使う剣法そのものに、いや周囲を知覚する認識そのものに、殺してくれと望むように植えつけられた隙がある。

(そんなものを、どうしたら、なくせる...っ)

ゆら、と視界が揺れる。

何を信じればいいのかわからない。

何が正しいのかわからない。

自分の動きも感覚も、全てが罨へ飛び込む道筋の一つでしかないかもしれない。

(どう、したら...っ)

「アシャ！」

「アオク！」

「っう」

ふいに下の方でアシャとアオクが鋭い声で呼び交わした。

(あ、しゃ)

アシャが、居る。

ちらっと下を伺うと、次々と襲ってくるドヌーを切り捨てながら、アシャとアオクが階段の下へ近づいてきてくれている。

(一人じゃ、ない)

「は、あ...っ」

胸のむかつく生き物の腐ったような臭いが城中に満ちつつあった。込み上げてくる吐き気を必死に押しえつけ、ユーノは突っ込んで来たクノーラスの剣をかるうじて受ける。

前より受け止めにくくなっている。それは相手の力量が増しているのか、それともユーノが罨に落ち込んでいっているのか。

(それでも)

アシャが居る。

「は.....ふ...っ」

ゆっくり呼吸した。

(思い、出せ)

クノーラスがまた剣を突き入れてくる。

(思い出せ)

アシャに教えてもらったことを、寸分違わず今ここで。

呼吸法、手足の動きへの集中、自分の筋肉の動きを外部の目で確認し、そこにどんな感覚があるかを確かめて、自分の内側の知覚と動きを繋げていく。

跳ね返す、次の一撃も。

(思い出せ)

自分の動きと相手の動きを重ね合わせる。自分が相手になったように、相手の動きから相手の内側の感覚を感じ取り、相手の認識と意志を読み取り、相手の次の動きを予測する。

(隙だ！)

ふいにひやりとした。

次はこちらへ踏み込む、だからこちらはこう避ける、そう組み込まれたやりとりに乗りかけた瞬間、右側に寒さを感じて目を走らせた。

(違う！)

右側ががら空きだ、まるでそこを狙って下さいと言わんばかりに。

「く、うっ！」

今までなら気づかなかっただろう『隙』が、死への深い淵になって口を開けているのが見える。

(違う.....違う...っ)

焦りが体を強張らせていく。自分の反応一つ一つが、『運命（リメイン）』相手には隙だらけなのがわかり始める。

(こんなに.....こんなに私は無防備、だったのか)

怪我をして当然、生き延びられていたのが奇跡、そうわかってくればくるほど、恐怖がじわじわと滲んでくる。

クノーラスの剣が、まるでその隙を知っているかのように、またそれさえも、闇の淵を作るようにユーノに迫る。

「つつっ！」

声がたてられなかった。

この一歩は正しいのか？

この一撃は正しいのか？

この構えは意味があるのか？

混乱していく頭からどんどん意識が零れ落ちて白くなる。

何もかもが無駄のような、何もかもが虚ろなような、生きていくことさえ意味がないような。

けれど意識の片端で、剣の鳴る音、汗が飛び散る光、熱く滾って濡れていく体を感じ取り、落ち込む空虚に抵抗する。

夜空の彼方を見上げていくような、果てしなく底知れない、その闇の気配。

今ほんの少し気を抜けば、ほんの僅か緊張が途切れれば、闇に潜んだその空虚が巨大な口を開けて、ユーノを引きずり込んでいくだろう。

(こわい.....っ！)

膝が砕ける。力が抜ける。気力が萎えて緊張が解けそうになる。

初めて感じた底の見えない不安と恐怖。

(もた、ない.....！)

体が冷えて歯の根が合わない。

クノーラスが目を細める。自信一杯に振り上げられる剣を避けられる気も受け止めきれぬ気もしない。

(だめだ.....っ)

潤んで滲む視界に歯を食いしばって目を閉じる。剣が重くて持ち上げられない。

ここまで、なのか。

(く、そおっ)

だらりと剣を下げ項垂れる、その瞬間、レスファートが、イルファが、セアラが、ラセナが、セレドの父母が、そして下で戦い続けているだろうアオクの顔が次々と浮かんだ。やがて、それら全てを押しつけて広がる、胸傷むほど鮮やかな笑み、黄金の髪に縁取られた顔に紫紺の双眸が煌めき揺れる、その背後にレアナの心配そうな顔を庇い。

(だめだっ！)

「.....つく、うっっ！」

零れ落ちた涙と同時に唇にぬるりとした感覚が広がった。血の味が舌を刺す、痛みに瞬きしながら、とっさにクノーラスの剣を跳ね上げる。

「じよ...だん...っ」

(ここで死ぬわけには、いかない)

気力が体に満ちるのがわかった。

(こんな、ところで)

誰がラズーンへ行く。

誰がアシャをセレドに戻す。

誰がレアナの笑みを保つ。

(私、だ)



セレドの、ユーノ・セレディス、ではないのか。

跳ね上げた剣に不意を突かれたクノーラスがよろめいて引く、入れ替わりにドヌーがその背後からいきなり跳ね上がって降り落ちてくる。

「ち、いっ！」

相対してドヌーを見上げた瞬間、今度はぐいっと人形のように体をしならせ戻ってきたクノーラスが、一撃必殺の素早さで再び剣を突き出してきた。右に寄って体を交わし、伸びてきたクノーラスの剣を逸らせ跳ね上げ、その切っ先でドヌーを防ぐ。飛びついてきたドヌーが剣に突き刺さり、外皮を切られて『目』がぎよろりとユーノを見据える、それをためらいなく踏み込んで切り裂いた。ぐちゃりと潰れた球体が剣を伝ってクノーラスに滴り落ち身動きとれなくなるその際に、再び歩を戻して安全な場所へ体を引いて剣を構え、はっとする。

(この動き)

覚えがある。

(どこで)

そっくりな脚運び。

(いつ)

攻防一体となるこの構え。

(アシャ！)

自分の姿にアシャが重なる。

(そうだ)

アシャに教えられた動きそのままではないか。

(ひよっとしたら)

「ふ、う」

呼吸を整え、今度は意識してさっきやっていた動きを体の内側に呼び戻した。

『体は正直だ』

アシャの声が脳裏に響く。

『一度習った動きを体はきちんと覚えている』

だからこそ型が必要で、それをきちんと身につけることが大事なんだ。

目の前で軽々と動くアシャの美しい動きを必死に思い出す。

『型には動きの本質と意味が全てが込められている』

だから『型』と呼ばれるんだ。

『それはことばで書かれていない教典のようなものだ』

準備できていない感覚を準備できているもののように整え、思い通りに扱えない体を最低限必要な基本に添って動かせるように組まれている。

脳裏に思い出したアシャの動きをそっくりまねて、円弧を描いて腕を回し視線を移した。その先に誘い込まれたようにクノーラスが切り込んでくる。もちろん構えはできている。楽々と跳ね返ししながら、次の場所に手足を配する。意識を内側に向けつつ、視線を再び手を送り出す先の空間に向ければ、そこにもうクノーラスが居て、構えかけた相手の手首近くを鋭く打ち据えることができた。

(そう、か)

単純だとばかり思っていた動きが、実は攻撃と防御で予想される全ての動きに応じられるようなものなのだと気づいた。

(全部、そう、組まれてるんだ)

だからアシャが攻撃を誘い込むように見える。攻撃で狙われる場所、防いだ次に攻撃を向けられる場所、予想される全ての動きを自覚していなくても、この剣は己の手足を運んでいく。

(次は、左)

クノーラスの動きが慌てたようにぎごちなくなってきた。

(右、から前、すぐに背中を向けてもう一度右)

さっきまでなら確実に一撃食らっていただろう不意打ちの動きを、ユーノの剣はがしりと受け止めた。

クノーラスの顔が微かに引きつり、背後の影が伸び上がり広がり波打ち、いら立つように蠢いて、また二度三度同様の攻撃をしかけてくるが、その動きが全てわかる。

(引いて、突く、と見せかけて振りかぶる)

なぜ次の攻撃がわかるのか。

それは相手の僅かな視線の動きや筋肉の緊張が、自分の体のものとして理解できるからだ。

呼吸法を身につける間に、人間の体がどこでどのように動くのか、動かそうとする一瞬前と一瞬後にどこが反応するのかを、自分の体で確認しているからだ。

視線で、動きで、人は次の行動を無意識に知らせている。

その動きを理解すれば相手の意図はわかる。その動きを意識的に使えば、相手の動きを制御できる。

万が一、それを全部封じられても、研ぎすまされた感覚は、筋肉の緊張と弛緩を読み取り、自分の体に置き換えてくれる、次に、どこを、どう動かそうとしているのか、を。

肉体、の最大の弱点なのだ。

人間の体はいきなり一部だけを急激に動かすことはできない。ほんの僅かな予備動作が存在する。

(それを見抜くためのもの、だったんだ)

理解すれば応用できる。

ぎりぎりの切り替えで気配を動かせば、クノーラスがそれにつられて動き始める。

緊張で誘い、弛緩で逸らせる。

気配を、操る。

(ああ、だから)

アシャの攻撃があれほど静かなのは自分の攻撃目標や意図を一切外部に知らせないためだ。そして円弧はその緊張と弛緩を一番読み取りにくくできる動き、遠心力を利用して筋肉を緊張させずに攻撃へと準備できる、叶わなかった攻撃の力をすぐに次のものへと回収できる。

(すごい)

震えているのは恐怖だけではない、巨大な力を制する仕組みに触れたことへの興奮とでも言おうか。

おかげで気持ちに余裕が生まれた。クノーラスを叩き伏せて連れ戻れるかもしれない、そう考えた瞬間、

「あ...っ！」

唐突に影はクノーラスを一気に背後へ引いた。

ふわ、と浮いたクノーラスが無表情のまま、手を伸ばす暇もなく階段から落ちていく。

「王子...っ！」

慌てて階下を覗き込む。途中で我に返ったのだろうか、ふいに凄惨な絶叫を響かせて、クノーラスが床に激突した。

「クノーラス様！」

アオクの悲痛な叫びは虚しかった。

いきなり上空から降ってきたクノーラスが、濡れた重い音をたててドヌー蠢く床に落ちた。

「クノーラス様...っ！」

慌てて駆け寄ろうとするアオクより先、周囲からずるずる近寄ったドヌー達が、奇妙な格好で振じれたまま倒れてびくりとも動かないクノーラスを、見る間に覆っていく。

「無駄だ」

「あ...ああ」

アシャが肩を掴んで引き止めるのにアオクが顔を歪めて吐くように呻いた。

「.....長居は.....無用だな.....ならば、あの子は...」

今のは明らかに『運命（リマイン）』がこの勝負を捨てた気配、ならばユーノは身動きできない状況にあるのか。

はっとして目を上げたアシャは、ぬらぬらと壁に貼りつく道を引きながら降りてくるドヌーの間を、よろめくように降りてくる相手に気づいた。

「ユーノ！」

「大丈夫か！」

アオクも我に返ったように声をかける、それを背中にアシャは急いで階段の真下に駆け寄った。

「大.....丈夫」

こと、こと、と壁にすがるように降りてくるユーノの顔色は真っ青だ。白い唇で強がったものの、こと、と最後の段を降りたとたん。

「.....ア.....シャ.....兄.....さ.....」

泣きそうな幼い表情がユーノの顔に広がった。

「よく、がんば.....おい！」

小刻みに震えるその体をできるだけ早く抱き締めたくて近寄ったアシャに、微かに笑んだユーノが突然ふわりと前にのめる。

「ユーノ！」

(やられてたのか！)

抱きとめた腕に冷えきったユーノの体が崩れ落ち、アシャはぞっとした。

「おい、大丈夫か!!」

慌てて駆け寄ってきたアオクに、急いで体を確かめたが、かすり傷はあるものの問題になるような傷はない。

けれど、すがりつくようにアシャの服を握り締めてきた指は、珍しく剣を手放して、どれほど厳しい戦いだったのかを思わせた。

(おそらくは、自分への深い不信を抱えたまま)

今無事だということは、それでもアシャの教えたものが何か役立ったということだろうか。

(いずれにせよ、あれっぽっちじゃ足りない)

もっときっちり教え込まなくては、この先生き延びていくことさえできない。

(皮肉だな)

守りたいならば剣を教えなくてはならない。剣を教えれば厄介事に飛び込む機会も増えるだろう。

(どちらも同じ、か)

そして今ユーノの剣を教え直すのはアシャしかいない。

まるでアシャの迷いを見抜いたように、ユーノがきつく服を握り締めてきた。目を閉じて気を失っているようなのに、少しでも離すまいとするその指に鼓動が打った。

(そうすれば、俺はお前のかげがえのない相手、になれるか?)

優しく愛しむ恋人同士にはほど遠い関係だとしても。

(お前の側にずっと居られるのか?)

それはきっと愛には届かないものだろうが。

アシャは重い吐息をつき、ゆっくりとユーノの体を抱き上げた。

「大丈夫なのか？」

「ああ...緊張が切れたんだろう」

「.....こっちで見えていても凄い戦いだったからな」

二重の戦いだったんだ。

訴えたくなくなる気持ちをこらえて、アシャはユーノを深く抱き締める。

無事で戻ってきてくれた喜びと、ユーノが何に気づいたのか、その衝撃を思っ胸が傷む。

(休ませてやりたい)

先はともかく、今は一刻も早く、少しでも楽にしてやりたい。

だが。

(俺は)

俺には、俺の。

一瞬ユーノの髪に頬を寄せ、アシャは首を振った。

「アオク...ユーノを連れて先に出てくれ」

「ああ？ お前は？」

「ちょっと用がある」

「.....わかった」

気がかりそうにクノーラスの遺骸を振り返ったが、もうどうしようもないと見極めもまたつけたのだろう、アオクはユーノを抱きかかえると急ぎ足に広間から出て行く。

その姿が視界から消えるのを待ってから、アシャはクノーラスの死体の辺りを振り返った。

静かな声で言う。

「視察官（オベ）の任として、この地をとどめる。アシャの名のもとに」

低く祈りに似たその声と同時に、まるで透明な金色の海のようなもやがゆっくりアシャから広がっていった。

やがてそれは人の目には微かに煙る霧のようなものとなって、クノーラス居城全体を覆っていき、人々はそこに城があったことをそれとなく、何となく自分達の意識から消していってしまうはずだ。

ネークの王もまた、息子の居城を確認しにはくるだろうが、霧を見るとそこに何もあるはずがない、そういう気持ちに襲われて、城は不可思議な化け物と一緒に呑み込まれ消えてしまったのだ、そう納得することになるだろう。

「.....ごまかし、だがな」

冷笑しながら、アシャは唇を歪めてつぶやく。

「真実を知って絶望するよりはいいだろう」

俺のように。

もやが行き渡っていくのに、目を細めて背中を向ける。

ドヌー達は自分たちを埋めていく波に自らの命が呑み込まれていくのに気づかなかっただけ。アシャを振り返ることもなく、クノーラスや傷ついた仲間を咀嚼する動きを繰り返しつつ、緩やかに動きを止めていった。

「いやしかし、もう少しのんびりしていたかった！」

「なんで？」

「ラセナの飯はうまかったしな！」

「またあんなこと、いつてる」

イルファの声にレスファートが呆れたように唇を尖らせて見上げてきて、ユーノは苦笑した。

「まあイルファだし」

「そっか、イルファだもんね」

レスファートが忘れてた、と言いたげに大きく頷く。

四人は今ダノマの街を発ち、再び旅の空の下にいた。

「うまくまとまってよかったな」

「ん.....」

アシャが声をかけてくるのに、ユーノは軽く緊張して視線を合わせないで頷いた。

アオクとエキオラの結婚式が行われたのは、クノーラスの居城での戦いが済んで十日後のことだった。ネークを治める王は不運を嘆いたものの、事情を詳しく知った上では、もうアオクを責めはしなかった。

王もあちらこちらで起こりつつある異変を知っていたし、影がとりつくとしか言えない奇行に走る者もクノーラス一人に限ったことではないことも気づいていた。クノーラスの居城が不思議なもやに包まれてどこかへ消えてしまったことも、王の諦めを早めた。

(アシャがまた、何かしたんだろうか)

ユーノはちらりと相手を見たが、アシャは平然とした顔をしていて、それこそ隠し事をしている気配さえない。

アオクの処分に関しては、王は罰を与えることで忠誠心のある秀でた勇士を失うのは愚かと考えたようだ。アオクとエキオラの結婚を許し、より以上の奉仕をアオクに求めることで、王はこの事件を

締めくくった。

「王の招待を受けりゃ、もっとうまいものが食えたかも知れんのに」

「あの結婚式で十分だろ、お礼ももらったし」

ふうふう言うイルファにユーノが応え、アシャがくすりと笑ってこちらを見やってくる。

その笑みに、みるみる顔が熱くなるのをユーノは感じた。

(く、そ)

恥ずかしい。まだまともにアシャの顔が見られない。

(仕方ないだろ、無意識だったんだし)

必死に言い聞かせても、アシャの笑みが意味ありげで胸がドキドキする。

実はユーノがむっつりしたり赤くなったりしているのには理由がある。

戦いが終わった後、アシャの腕で気を失ってしまったというのも原因の一つだったが、問題はその後、戦いのせいとか緊張のせいとか、発熱して寝ていたユーノは、こともあろうにアシャの手を握って眠ってしまい、あまつさえその夜中にひどく不安がって、熱で朦朧としたまま、側にいてくれとアシャをかき口説いた、というのだ。

どうやら、昼間味わった恐怖が熱のせいで自制できなくなったユーノに本音を吐かせてしまったらしいのだが、朝になってそれを聞かされた日には、アシャの顔が見られなかったし、口もきけなかった。

(一体私は何をやってるんだ)

側に居てくれ、なんて。

アシャはどう思っただろう。

ちゃんと側に居てくれたらしいが、他にもっと馬鹿なこと口走ってなかっただろうか。

そう思うたびに顔から火を吹きそうな気がする。

それを知ってか知らずか、アシャがことあるごとに意味ありげに笑うから、余計にユーノはうろたえる。いいかげんにしてほしい。

「ほんっと、アシャって、人をいじめるのが好きだったんだ」

「そうか？」

アシャがまた一瞬目を細め、続いてとても楽しそうにくすくす笑って応え、ユーノはかっとした。

「ア、アシャ！」

「ん？」

「だ、誰にだって調子がおかしい時はあるだろっ！」

「調子？ おかしかったか？ いつ？」

「う」

「まあ予想外に小さい掌だとか、予想外に可愛らしいことを言うなあとか」

「そ、それはっ！」

「一晩中側に居て何をしてほしかったのかとか」

「ば、ばばばかやろうっ！」

レスファートがきよろきよろと二人を見比べながら瞬きしている。

二人の様子を何となく面白くなさそうに見ていたイルファが、突然口を挟んだ。

「さて、次はどこだったかなあ、アシャ！」

ことさらな大声に一瞬会話が止まった。

「なんだよいきなり」

「いや、次の国はどこかと」

「なんで今」

「何が食えるかなあと」

「...おい」

「...くふっ」

レスファートが小さく吹き出した。

「ペクがあればいいかなあと」

「.....嫌がらせか」

「そうだ」

「.....わかったからやめろ」

「くくくっ」

ついにユーノも笑い出した。苦虫を嘔み潰したような顔になっていたアシャに笑いかけると、相手がふいと眉を緩め、やがて微かに苦笑する。

「イルファだからね？」

「そうだな」

「なんだ、そのイルファだからって」

食べることは大事なことだぞ。

大声で叫んだイルファに笑い声は次第に四人に広がり、遙か高い空に消えていった。

## 3.鳥たちの森

リリユリユリユリユ……。リユリユリユリユリユ……。リリリ……。リユリユ……。

「静かな所だな」

寝転んでる体に日差しが温かくあたっている。つぶやいてユーノは体を伸ばす。

「ねえ」

側からむくりと銀色に輝く頭をもたげて、レスファートが尋ねてきた。

「いま鳴いたの、何？」

「鳴き鳥（メール）」

「鳥ってみんな鳴かないの？」

「鳴くのは鳴き鳥（メール）だけだよ」

「でも、城にいたのはみんな鳴いてたよ」

レスファートは不思議そうに言った。

「あれは愛玩用の鳥さ、レス」

「あいがんよう？」

ごろん、と岩が転がったように寝返りを打ったイルファに、レスファートは訝しそうな声で応じた。

「あいがんようって？」

「うん……その……まあ、かわいがるための動物だな、言ってみれば」

「ふうん」

レスファートは短く淡い緑の草の上に片肘をたてて頬をのせ、しばらく考え込んでいたが、

「じゃ、ぼく、あいがんよう？」

「くっ……」

ついにアシャが吹き出した。うつむきに寝たまま、肩を震わせて笑っている。

「はああ?!」

イルファが頓狂な声を上げた。

「だって、城にいた時、みんな、ぼくは鳴き鳥（メール）みたいだっていったよ？」

「く、くくっ」

アシャは喉の奥で笑い続けている。

「いいか、レス。人間は愛玩用とは言わないんだ」

イルファが言い聞かせかけて、一瞬ためらった。

「まあ……時にはそういう人種が……いるが」

「どんなじんしゅ？」

「う」

間髪入れずにレスファートが尋ね返し、イルファが固まる。

「どんなって……その……おい、アシャ！ 笑ってないで、何とかしてくれ！」

「はははは…」

アシャがとうとう笑い声を上げて起き上がった。無造作に髪をかきあげながら、ちらりとイルファをみやって、

「そりゃ、お前が悪い。そういう類のことまで説明するからだ」

「説明するからって…」

「そういうたぐいのこと…」

レスファートが首を傾げ、ぐるりとアシャに向き直る。

「じゃ、アシャは知ってるの？」

「え……あ……」

「そらみろ」

レスに『そういう類』の説明なんぞできるか。

イルファがざまあみろ、と言わんばかりに口を挟む。

「ねえ、アシャ」

「あ、あのな……」

「ふふふっ」

三人の他愛ないやりとりを聞きながら、ユーノは寝転んだまま、草の中で笑った。

(いいな、こういうの)



目を閉じて深く息を吸い込む。

鼻の奥に軽くつんとくるような、けれど不快ではなくただただ爽やかなその薫りを胸一杯に感じ、体の隅々まで広げて味わう。

日差しはますます明るくユーノ達を照らしている。

ここはネークの国境から馬で一日、ガズラの国に少し入ったあたりだ。

短い丈の草原にぼつりぼつりと深い緑の木立があって、戦いの合間の休息にはちょうどいいと一休みしている。

(気持ちいい)

四肢の力が抜けて、たわいないおしゃべりをしているとうつらうつらと眠ってしまいそうだ。風が甘く木立を揺らせて鼻をうち、ユーノの髪を優しく撫でていく。

「いいよ、もう！」

レスファートはどうとうアシャとイルファを見限ったらしい。もぞもぞとユーノの側へすり寄ってくる気配、待つまでもなく、

「ねえ、ユーノ、あいがんようの人ってどんな人？」

「え...ええっ」

ぎょっとして瞬きし、慌ててユーノは半身を起こした。

「だって、イルファもアシャも教えてくれないんだもん」

レスファートの向こうでイルファがにやにやしている。

「いや、でも、ボクだってそれは...」

このやろう、説明しづらいからってこっちに振るなよ、私がそんなこと知るわけないだろ、と胸の中で舌打ちした。

アシャも面白がっているのか、間に入ってくれる気はなさそうだ。

リリリユリユリユリユリユ.....

「あ、レス！」

再び澄んだ声を響かせた鳴き鳥(メール)に、天の助けとばかり、ユーノは話題を変えた。

「どんな鳴き鳥(メール)か見て来たら？ いろんなのがいるんだって」

「いろんなの？」

「うん。国によって、かなり違うらしいよ」

「違う?!」

レスファートはびよんと起き上がった。水のように薄い色の瞳がみるみる嬉しそうに輝いた。

「ぼく、見てくる！」

あっという間に声のする方向に駆け出していく。

「助かった」

ほっと息を吐いて、再びユーノは草に転がった。

愛玩用の人間なんて、何をどう説明すればいいものやら。

(アシャもイルファもほんと狡い)

薄目を開けてみやると、同じようにごろりと寝転がった二人の横顔がふいに猛々しいものに見えた。

(そういう人を、知ってるんだ)

愛されることを本分とする役割の、おそらくは女性、を。

普段はそんな世慣れた部分など、ちらりとも見せないだけに、特にイルファはわかるにしてもアシャがそういう女性を相手にしたことがある、そう考えると少し気持ちが沈む。

(優しい、のかな)

お互い割り切って時を過ごすのだろうけど、アシャのことだ、十二分に相手に優しいのだろう。

ふと自分の胸をぺちぺちと叩かれたときのことを思い出して落ち込んだ。

(そういう人にも優しいのに、私には)

所詮、女として考えてもいない、そういうことだ。

(ひどいこと、考えてる)

そういう人にも、だって。

「ふ、う」

溜め息をついて軽く頭を振り、再び草の薫りを吸い込み深く味わった。

穏やかな時間は貴重だ。ラズーンに近づくほどに旅は荒れてくるかもしれない。いつまで一緒に居られるか、それも確かなものなど何もない。

(明日にだって離れてしまうかも、しれない)

「ん」

叶わない願いをぐるぐる考えているより、今は安らかなひとときを楽しもう。

そう決めると少し気分が楽になった。

(家屋の中より外の方が寛げるなんて、おかしいな)

目を閉じると、光が瞼を赤く透かせる。まばゆさにユーノは少し顔を横向ける。延ばした手が剣の柄にあたって、かすかな金属音を響かせる。

その音に、ユーノはよりほっとした。ぐったり全身を大地に委ねてしまうと、土の温かさが背中からしみこんでくる。そそけだっていたユーノの心を、柔らかく和ませる温かさだった。

「アシャ」

「ん？」

土と空気を半分ずつ伝わって、イルファの声が聞こえてきた。

「ラズーンまで、後どのくらいある？」

「.....」

ユーノは薄く眼を開けた。瞬時に体中の神経が緊張する。

「そうだな.....」

アシャの声が考え込んでいる。

「ほぼ半分来た、ぐらいじゃないのかな.....伝えによるとな」

「ふ...うん」

イルファは少し不満そうに唸った。

「やっと半分、か」

「よく見積もっても、だ」

アシャの声が厳しくなる。

「最も遠い距離を伝えたものによれば、三分の一も来ていない」

「後.....三分の二.....か」

(そんなに.....あるのか)

イルファのつぶやきを、ユーノは心の中で繰り返した。

今まで旅をしてきたいろんな場所、人々が思い浮かぶ。

妙なことに、旅に出た時のような身の置き場のない不安はなかった。この先の旅が安楽なはずはなく、道のりはまだまだ遠い、そう聞かされたのに、その事実にはっとしている自分が居る。

(まだ、一緒に居られる.....皆と)

無意識に思いかけた相手の名前をすり替える。

認めるのが怖かった。それを認めれば、この先.....このずっと先、ユーノは自分一人で歩くのに、恐怖しか感じなくなってしまう。

(どうやって生きていけばいいのか、わからなくなる)

ユーノは再び眼を閉じた。

どさっとイルファが寝転んだらしい音がした。しばらくするうちに、寝息がいびきにかわる。

(イルファは戦うか食うか眠るかだな)

ユーノは少し微笑した。

(それが一番自然なのかも知れない)

夢の中で己の存在の意義など問うてる間に、少しでも体の疲れを取って明日に備えるのが良策なのかも知れない。

「.....？」

ふいと顔にあたっていた日差しが何かに遮られ、ユーノは薄暗い影が頬に落ちるのを感じた。

「ユーノ？」

目を開けようとして静かなアシャの声にどきりとする。

「眠ったのか？」

声に気を取られている間に気配が動いて、何かがユーノの髪に触れた。そうっと細心の注意を払って、ユーノの額から目にかけて乱れた髪を直していく。

(.....アシャの.....指.....?)

ユーノの胸に、いつかの優しい感触が蘇った。

(あれは.....アシャの指.....アシャの気配だったのか?)

指先が動いていく。

時々そっと、髪を払うような仕草で、ユーノの頬に触れていく。

胸が少しずつ強く打つ。

なぜ黙っているんだろう。

なぜユーノの頬など触っているのだろう。

「ユーノ.....?」

戸惑ったような声はどこか切なげに響く、それともこれはこの優しい空間が紡いだ幻なのか。

「きゃあああーっ！」

「!!」

突如、悲鳴が響いた。

アシャの指が引かれると同時に、ユーノは剣を押さえて跳ね起きた。

体は既に臨戦体制だ。

「ヒストっ！」

命令するや否や、木立の影で休んでいたヒストが頭を振り上げ、地を蹴った。

「ユーノっ！」

ぎょっとしたようにアシャが呼ぶ。

「あの声はレスだ！」

応えてユーノはヒストに向かって走った。駆け寄ってくるヒストの目が一瞬うるさげに揺れたが、すぐにユーノの意図を読み取ったように頭を強く振り上げる。互いの視線が重なったと思った瞬間、目の前を駆け抜けようとしたヒストが、手綱を掴むユーノを引き上げるように体を寄せる。その体のうねりに吸い込まれるように、ユーノは強く地を蹴った。

「こら、ユーノ！ くそっ.....おいつ、イルファっ！ 起きろっ！」

背後のアシャの声が、みるみる後方に流れていった。

「レス！」

強い声で呼ばわりながら、ユーノは悲鳴が聞こえた方向にヒストを進める。

「レス！ どこにいる！」

木立は次第に厚みと幅を増している。さっきまでまっすぐ見通せた地平も今は切れ切れだ。

「レス！ .....くそっ」

ユーノは舌打ちした。

穏やかな場所だから、平和な鳥の声しか聞こえないから、そう安心してしまっていた。

けれど動乱の時期を迎えた世界に無防備に安堵できるはずはなかったのだ。

背後を追ってきていたはずのアシャもユーノを見失ったのか、響くのは自分がレスファートを呼ぶ声のみ、いや。

くすくすくす.....と、面白くてたまらないと言いたげな笑い声が背中から響いてきて、ユーノははっと後を振り返った。

あまり友好的ではない、嘲笑うような、けれど軽やかなその声、なのに、後には誰もいない。

「レス？」

問いかけても何も動く様子はない、だが、誰かが居る、何者かが息を詰めてユーノを見守っているのがわかる。

(誰だ？ カザドか？ それとも)

『運命(リメイン)』

思いついた名前にぞっとして、竦みかけた体を必死に開く。

剣の訓練はまだ十分ではない。手加減してくれているアシャと打ち合うところまでもいっていない。

隙はかなりなくしたはずだ、けれど感覚のずれはなかなか直せない。

「レス！」

用心深くヒストを歩ませながら、ユーノはレスファートを呼んだ。

「どこにいる！ 何があった?!」

再び真後ろでざざっと木立が揺れた。瞬時にユーノの右手に長剣が引き抜かれ、その木立へ差し向けられる。

「誰だ！」

くすくす、と再び明るい楽しげな笑いがそこから起こった。

険しい顔でそちらを見つめるユーノの目に、ぱさりと軽い音がして、木立の中から、輝くばかりにまばゆい一房の髪が、さらさらと波打って流れ落ちるのが映った。

（え？）

ゆらゆらと揺らめいたその髪は見事な直毛、艶やかに日差しを跳ねているところはまさに黄金の滝のようだ。

息を呑むユーノの前でざわざわと木立が揺れて、髪が次第に長さを増していく。

ちょうど、そのような髪を持った誰かが木の上において、ユーノを見ようと枝の下から首を延ばしてきてでもいるように、その金色の髪は揺れ動いて草の上に広がり、やがて唐突に止まった。

「！」

次の瞬間、ユーノは、木立の間に、この世のものとも思えぬすばらしい造形の美女の顔を見つけていた。

整った卵形の輪郭の中に特別な果物を思わせる淡いピンク色の頬、ほのかに開いた紅の唇、ややつんと尖った鼻が見事な配置でおさまっている。愛らしく見開かれた無邪気そうな青い瞳、思わず見惚れて両手を差し伸べ、抱き寄せることをためらう男などいないだろう。

ただ惜しいかな、その瞳は微妙に冷ややかで傲慢な色をたたえていて、それが完全から僅かに彼女を遠ざけていた。

ぞくり、と妙なものがユーノの腹の底に動いた。

「あなたが.....ユーノ.....？」

紅の唇がゆっくり開いて、甘い声が問いかけてくる。

木立の緑の中、静かで穏やかな風景、なのにまるで誰かが無理に彼女を枝の上に押し込めたように、相手は細くて白い首だけを突き出してこちらを振り向き、逆さまのまま微笑んだ。

「そう、だけど」

「そう...」

相手は唇を歪めた。

片頬だけを引き攣らせ、嘲笑うように目を細め、まるで世の中をねじ曲げてしかみない老人じみた笑みをたたえる。

見る者を失望させる笑みだった。

「なあんだ」

低い掠れた声が響いた。

「あの子があたしよりきれいだ、なんて言うから」

くすくす。

「どんな者かと思えば」

そのままことばを続けず、相手は奇妙な姿勢のまま笑い続けている。

「レスを知ってるのか」

くすくす。

「知ってるんだな？」

くすくすくす。

馬に乗ったままではあそこまで突っ込めない、そう考えてヒストから降りる。剣は構えたままだ。周囲を伺いながらじりじりと近寄っていく。

「レスはどうした」

枝の上に居るということはそこに始めから登っていたということだ。なのに気配はしなかった。笑い声がしなれば、ユーノも見過ごしていたかもしれない。

となれば、この美しい女性もただの人間ではないのだろう。

「応えろ」

「え.....あの子？ あの子？」

相手はまるで人形のようにかくかくと首を左右にねじ曲げて笑った。どう見ても人間、しかも微笑

む頬の柔らかな産毛が日に光っているのが見えるほどなのに、動きはまるで死体を突く鳥を思わせてぞくぞくする。

「おい」

「...だって、あたしよりあなたの方がきれいだなって言うんだもの」

びたり。

ふいに相手は動きを止めた。

まっすぐにこちらを見やってくる目、逆さになっていた顔がゆっくり持ち上げられて、再び枝の中へ入りそうだ。なのになかなか体が見えてこない。

「.....」

その奇妙さに、ざわざわしたものがユーノの背中を這い登る。まるで重さがないようだ。ひどく長い首がのけぞるよう曲げられて、ふいに滑らかな動きで枝から上半身が抜き出された。

「あ」

落ちる。

小さく声を上げるユーノの目の前で、枝へ顔を突っ込むように体を仰け反らせたかと思うと、いきなり黄金の髪をまきつかせながら白くて長い脚が零れてきた。そのままふわりと体が持ち上がり、まるで空気に浮かぶ羽毛のようにくるりくるりと白い衣を翻らせながら落ちてきて、足音一つたてずに草の上に降り立つ。

「ふうん...」

相手は腰に手をあてて、ユーノをゆっくり眺めた。

光を帯びているような滑らかな肌、体の陰りも透けそうな薄衣一枚のドレス姿、風に押されたようにふいっと側まで近寄られて、その殺気のなさにユーノは攻撃の機会を失った。

「なあに、この荒れた顔」

「...っ」

キスされるのではないかと思うぐらいに近寄られて、構えた剣の内側に入り込まれる。とっさに腕を寄せて拒もうとするのも遅く、そのまま顔を寄せられ、冷ややかに嘲られて凍りついた。

「目だって血走って濁ってるし、おおいやだ、血なまぐさい剣なんか得意気に」

「、」

一瞬とんでもなく痛いところを突かれた気がして思わず後じさりした、その空間にまた迫られる。

「あの子の目は節穴ね。まあ男にしてはきれいな方なんだろうけど、それでもやっぱり私の方がうんときれい」

「く、」

伸ばされたと知覚もできないうちに、汗に塗れて跳ねた髪を撫でられた。耳に触れられ、首筋を探られ、くすくす笑いながら顎を指先で押し上げられる。

「！」

ばんっ。

「.....あら」

その指先から得体の知れないものに侵されるように感じて、ユーノは必死に相手の手を払った。剣もある、殴る事もできる、けれど相手のなよなよとした気配が敵ではないと知らせてくるから攻撃に移れない。

それでも、肩から腰いや足首までも流れ落ちる自分の金色の髪を撫でながら、上機嫌に笑う相手を睨みつけ、冷たい声で問い正した。

「レスをどこへやった」

「剣をしまって」

くすり、と相手は無邪気そうに微笑んだ。

「怖いわ」

「ちっ」

舌打ちをして剣をおさめる。

いずれにしてもレスが人質になっているのなら、抵抗するのは逆効果だ。

「レスを返せ」

「どうしようかしら.....あら.....冗談よ」

ユーノが鞘を握りしめたのに、相手はまた楽しそうに軽く笑った。

「あの子は向こうよ、あたし達、ライノのところ」

「ライノ？」

どこかで聞いたことがある、そう眉を寄せる。

「だって、あたしとあなたみたいなのを比べて、あなたの方がきれいだなんて言い張ったから、当然のお仕置きをしなくては」

「お仕置き？」

泣き叫ぶレスファートを思い浮かべて胸が絞られる。

「連れていってくれ」

形は懇願だが、目に殺気を込めた。

「傷つけてたら、ただじゃおかない」

美女は笑いやんで、少し目を細めた。

「.....いいわよ.....キスしてくれたら、ね？」

「...は？」

何を言われたのか、よく理解できずに瞬くと相手は再び距離を詰めた。

「キスして？ あなたが私を誘惑できたら、考えてもいいわ」

絡み付くように伸ばされた腕が恐れげもなく顔を引き寄せようとする。瞳に満ちた揺れる光がまるで水面を覆う煌めきのように見えて視界を滲ませる。確かに美しい、確かに魅惑的だ、だがその中に潜む虚ろさに寒くなる。

「.....っ」

「生憎、ボクはあなたに興味がない」

二人の間を割り込むようにユーノが剣を引き抜いたのに、相手は小さく溜め息をついて手を放した。

「無粋な人ね、一度でいいのに、誰かに操でもたててるの」

「.....」

「.....わかったわ.....こっちよ」

ユーノが剣をなお抜こうとするのに肩を竦めて歩き出す。

草の上をゆっくり進む真っ白な踵、その脚が全く汚れていなかったのにはっとして周囲を見回した。

「君は.....どこから来た？」

微笑む相手はくるりと身を翻して脚を速める。

「どこから？」

周囲の木立はどんどん密度を増していく。

「どこからも来ていないわ。あたし達はずっとここに居るのだから」

からかうような口調に反論しようとして、ユーノはそれに気がついた。

「これは.....何だ？」

いつの間にか、周囲の木々の枝々から、奇妙な緑色の塊があちらこちらにぶらさがっている。

すぐ側の木からも一つ。

ちょうど人一人が入れるほどの大きな。

「.....鳥籠.....？」

「ねえ、きれいでしょ！」

いきなりその中から声が響いてぎょっとした。

思わず立ち止まったユーノは、声が響いた鳥籠の中を覗き込み、目を見開く。

その鳥籠には一人の娘が入っていた。流れる黄金の髪、ほの赤く柔らかく開かれた唇、白く甘い色合いの肌、目の前を歩く娘とよく似た気配の、やはり目が覚めるような美女だ。

娘はめざとくユーノを見つけると、けたたましい声で言い出した。

「ねえ、きれいでしょ、あたしきれいでしょ、誰よりもきれいでしょ」

と、まるでそれに誘われたように、周囲の緑の鳥籠から一斉に声が上がる。

「きれいでしょ」

「きれいなのはあたしでしょ」

「あたしはきれい、誰よりもきれい」

「あたしをみて。きれいでしょ」

「きれいでしょ」

あっという間に辺りは騒々しいざわめきに満ちて、ユーノは息を呑んだ。

よく見ると、鳥籠一つに一人ずつ、同じような美女が閉じ込められていて、その誰もかれもがユーノに向かって甲高い声で叫んでいるのだ。

「何なんだ.....これは」

「言ったでしょ」

呆然とするユーノに、案内して来た美女は上品に肩を竦めて応えた。

「あたし達はライノだって」

(ライノ.....?)

「、しゃべり鳥(ライノ)?!」

昔語りで聞いた名を、急に思い出す。

「じゃあ、これは...しゃべり鳥(ライノ)の巣.....?」

しゃべり鳥(ライノ)は太古生物の一種だ。

今の世には鳴き鳥(メール)しかいないはずだが、その昔、しゃべり鳥(ライノ)と呼ばれる種族が居た。姿形は一目見ると忘れられないほど美しいのだが、その己の美しさを一日中自慢することを生涯続けているのが常で、たいていはやっかいものとして忌み嫌われるらしい。時には気だてがよくて頭もよいものが居て、諸侯間で贈り物として使われたこともあると聞く。

しかしそれは鳥の一種だと、ユーノは思い込んでいた。

「こんな.....姿だったのか」

(ここでも太古生物が復活している)

しゃべり鳥(ライノ)の姿が想像していたものとは違っていただけではなく、ユーノは奇妙な違和感に引っ掛かる。

(あまりにも)

多すぎないか?

(まるで時代を遡っているみたいだ)

ラズーンへ近づくにつれて、どんどん自分が住み慣れていた懐かしい世界から、距離だけではなく時間まで遠ざかっているような気がする。

(戻れる、んだろうか)

初めて今までとは種類の違う不安がユーノの心に広がった。

旅の危険性は承知している。カザドを挑発してもいる。無事帰れる可能性はかなり低いと覚悟はしている。

だがしかし、これは別の恐怖だ。

生きたまま別の時空へ飛ばされるという、『宙道(シノイ)』に放り込まれたようだ。

「っ！」

ぞくっと体を竦めた瞬間、いきなり背中から首に巻きついてくる感覚にはっとした。さわさわと這い寄ってきていたものは金色の髪、とっさに払い落として身構えつつ振り返ると、

「残、念」

周囲に響くかまびすしい声の中で、美女が一人、鳥籠の中からにっこり笑ってみせる。伸ばされていた金髪が、するすると意志を持ったもののように籠の中に引き戻されていく。

(やっぱり人間じゃない.....レス)

少年は一体どんな目にあっているのか。

うねる金色の波にごくりと唾を呑み、ユーノは側でつまらなそうに立っている美女を剣の鞘で突いた。

「なあに」

「早く連れていけ」

「わかってるわよ、でも惜しいわね」

さらさらと金髪を風になびかせ体にまといながら、ライノはくすくす笑って背中を向ける。なまめいた白い背中が艶を放って晒される、けどその向こうから響く声は不愉快なほど老獪だ。

「あの子だって成長すれば、きっといい鳥になるわ、鳥籠の中で剥き晒しておけば、通りがかる誰でも引き寄せられるでしょうに」

では、レスファーとはライノに捕まり、鳥籠に入られているのだ。

「馬鹿なことを言うな」

「ふ...ふふっ」

ライノは含み笑いをしながら、踊るような足取りでどンドンつり下がる鳥籠が増える奥へ奥へと進んでいく。

「愚かな子」

「え」

「愚かで綺麗な子は私達の慰みものになるのよ」

「く」

思わず殴りつけたくなったが、視界の端に他のとは違ってどす黒いツタの巻きついた鳥籠を見つけて思い留まる。

その中にも誰か居た。

もっとも男女ももうわからない、ただの白い骨と崩れた衣装しか残っていなかったが。

しがみつくように鳥籠を掴んだ白骨の指に、レスファートの小さな指を重ねて血の気が引く。

おそらくはしゃべり鳥（ライノ）の犠牲者なのだろう。

（無事で居てくれ）

冷たい汗を振り払いながら、舞うようなライノに従っていくと、

「ユーノ！」

小さな叫びが響いた。

「あそこよ」

ユーノを連れて来たライノが正面で激しく揺れている鳥籠を指差す。

「ユーノ！ ユーノっ！」

中から叫び声がして、小さな白い手が必死に鳥籠の隙間から伸ばされた。

「ユーノお！」

「レス！」

掠れた声はさんざん泣きじゃくったせいかな。

慌てて駆け寄るユーノの目の前で、籠をしっかりと掴んだレスファートが、その隙間に自分の頭を押し込もうとするように身もがいている。

「レスっ！」

鳥籠は大人一人入れるほどの余裕があった。端に擦り寄り、籠を両手でしっかり掴み、駆け寄ったユーノを見上げてくるレスファートの顔は擦り傷だらけ、真っ赤に紅潮した頬に涙の跡を一杯つけて、なおもみるみる涙を溢れさせる。

「怪我は？」

「ひっう」

「どこも？」

「う...」

引きつけながら首を振るレスファートが籠の隙間から差し出した両手でしっかりユーノの腰を抱えてしがみつく。

「こ、こわかったよう...」

「どうしたんだよ、一体」

「わ.....わかんない」

籠に遮られて胸に甘えられない、それをじれったがるようにレスファートは首を振りつつ頭をぐいぐい押し付けてきた。

「ぼく、ただ、きれいな、鳥がいたから、おっかけて」

しゃくりあげながら訴える。

「そ、そしたら、ここ、きてて、その人が」

「その人？」

「あ・た・し」

うふん、と媚びた含み笑いが真後ろで響いて、ユーノはじろりとさっきのライノを振り返った。

「あんたが？」

「あたしが聞いたの、その子が側を通ったから」

細い指先に長い金色の髪をくるくる巻きつけながら、ライノは唇を尖らせる。濡れた鮮やかな紅が綻ぶように広がって、樹海の奥にある大輪の花のような妖しさだ。



「あたし、きれいでしょ、って」

「うん、って、こたえたよ？」

ぐすぐす涙をすすりながら、レスファートがぎゅっとユーノの腰を掴む。

「ぼく、ちゃんと、きれいですね、っていったの、そしたら」

「次にもう1回、ライノは聞いたのよ」

ふいに別の鳥籠から声が響いた。

「他の誰よりもきれいかって」

「当然でしょ？」

ふふん、と嗤ったライノが肩を竦める。細い華奢な造りの体にぴったりの愛らしい動きだ。

それに応じてまた一斉に周囲の鳥籠から声が上がった。

「当然じゃない」

「当然だよ」

「聞かないほうがどうかしてる」

「どうかしてるわよ」

ゆっくり周囲を見回すと、そこには恐ろしいほどの鳥籠がぶら下がっていた。小さな森と言っても差し支えないほどの木立、小さな木にも数個、枝を広げた大きなものには十数個も、重そうに。

その中に一人ずつ同じような、しかもそれぞれに艶やかな金髪の娘達が入っていて、その誰もがまるで特別な儀式が行われているのを見守るように、鳥籠に掴まってユーノ達を見下ろしている。

餓えたような青い瞳、うねうねと意志があるように蠢きながらじりじりと垂れ下がってくる金色の髪に、ユーノは目を細めて距離と配置をはかった。

無邪気そうに純真そうに見せているけれど、薄い膜一枚隔てたところに、灼熱の温度で立ち上がってきている炎を感じる。そしてそれは、決して優しいものではない。

もし、一斉に襲いかかられたら。

見えているだけでも数十個はある鳥籠、ライノがうろうろしているところを見ると出てこれるらしいし、万が一が――一気に囲まれたらレスファートが居るだけに脱出が難しくなる。

警戒しつつ、尋ねる。

「.....それで？」

「ぼ、ぼく、それで」

レスファートは何を思い出したのか、きゅ、と唇を引き締めて、ふいにきつい視線で周囲の鳥籠を見回した。

「ぼく、ううん、っていった」

低い声でつぶやき、断固たる意志を漲らせてユーノを見上げ、

「ぼく、ううん、っていったの！」

「なんてこと！」

「なんてことを言うんだ、この子は！」

「あたし達に向かって！」

「こんなにきれいな、あたし達に向かって！」

「だって！」

わあっと再び圧倒するような叫びを上げる周囲にレスファートは大声で怒鳴り返す。

「ぼくのユーノの方がきれいなんだもん！」

「へ」

一瞬ユーノはその場に全くそぐわない間抜けた気分になった。

「れ、レス...」

「そんなのきまつてるじゃないか、そりやおばさん達だってきれいだけど、ぼくのユーノにかなうわけじゃないじゃないか！」

「まああ！」

「また言った！」

「また言ったわ、この子！」

「いいかげんにおし！」

「その口やっぱり塞いでおこう！」

「レス……」

おばさん。

それは確かにレスファートに比べれば、ユーノだって、いや妹セアラだって『おばさん』なのかもしれないが。

「あー…」

これはとんでもなくどうしようもないところで落ち込んだ罫かもしれない。

ユーノは思わず深々と溜め息をついた。

レスファートが通常と違う基準で、きれいだのきれいではないだのと判断しているとはしゃべり鳥（ライノ）達にはわからない。しかも、しゃべり鳥（ライノ）達は自分達の美しさを誇って生きているような生物、それを真っ向から否定するようなことを言い放って許せるはずもない。

「そうでしょ、ユーノ、ユーノは一番きれいなんだし、ぼくまちがってないもん！」

「う」

「間違ってるわ」

「根本的に間違ってるわよ！」

「まちがってないもんつつっ！」

「間違ってるってば！」

「いいかげんにしなさい、子供だと思って！」

「まちがってないーつつっ！」

泣き泣きレスファートは己の正当性を叫び、しゃべり鳥（ライノ）達は一層騒がしく激怒していく。

「レス、あのね」

「だから」

とにかくレスファートを落ち着かせようと口を開いたユーノに、背後のライノが口を挟んだ。

「あたしは言ったのよ、それはあたしがこんなところに入って、きっとよく見えないからよって」

「見えてるもん！ ぼく目はいいもんつつっ！」

「レス、ちょっとほら」

「ひいっく」

ぼんぼんとレスファートの背中を叩いて沈めながら、それで、と促すと、

「だか、だから、とに、かくっ、ここの、とをあけて、って」

レスファートはしゃくりあげながらことばを続ける。

「でも、ぼく、あけかた、わかんなくて…っ」

「あたしはその子に言ったのよ、キスして、って」

「え」

ぎよっとしてライノを振り返る。

「…してくれたわよ？」

「え」

慌ててレスファートを覗き込む。

「レス？」

「え？」

レスファートはきよとんと目を見開く。

「おはようってするのだよ？ 朝いつもユーノしてくれるの」

「あ、ああ」

頬にか。

ちょっとほっとしてしまう自分がなんだか微妙な気分になる。

「キスの想いが強いとね、扉が開くの」

ライノがゆっくりと近くの鳥籠に歩み寄った。そう言われれば、よく見ると小さな扉がついている。地上すれすれになっているその鳥籠にも一人の娘が居て、中から期待を込めたまなざしでライノを見上げる。ライノがゆっくりと顔を降ろし、娘が待ち受けるように唇を突き出すのにユーノが凍りついていると、鳥籠ごしに二人の唇が一瞬触れ合ってからすぐに離れた。

びし、とどこかで何かが弾けるような音がして、鳥籠の扉が微かに揺れる。娘がいそいそと内側から押したが、ぎしぎし鳴りながら緩んだ隅がわずかに隙間を広げた程度、手首がかろうじて押し込めるぐらいだ。

「ライノ！」

「……だめね」

「ライノ！ もう！」

悔しそうに叫ぶ娘を放っておいて、ライノはゆっくり戻ってくる。

「でも、その子のキスは違ったのよ」

きっと特別な魂の子供なのね。

目を細めて笑う相手にぞっとして、思わず周囲を見回した。

まさか、この鳥籠全部、レスファートに開けさせるつもりで捕まえたのか？

「もっとも、きっちり開いたわけじゃなくて、半分だけ開いたから、鳥籠を下まで降ろして……ああ、上下は動かせるのよ、あたし達」

「ぼくに、ひっぱって、だしてって。外に出たら、もっとちゃんと見えるからって」

ぼく、見えてるよっていったけど、そのときはもう、あの髪の毛に捕まって。

「その子に引っ張り出してもらって、ようやく外に出られたから」

ライノは気持ちよさそうに伸びをして、金髪をさらさらと指先で梳った。

「もう一度尋ねたのよ、さあ、これでもそのユーノとかいう人間の方がきれいな、って」

「で、ぼく」

「……ああ。大体想像がつくよ」

苦笑するユーノに、レスファートはこくんとうなずき、

「ちゃんと見たら、もっとわかったっていったの、ぼくのユーノはここにいるだれよりうんときれいって！」

「ああああ、また言った！」

「また言ったわ、あのにこ毛も生えてない小鳥（こぞう）が！」

「なんでだめなの！」

「だめにきまつてるでしょう！」

「あたしがきれいなよ！」

「あたしが一番なのよ！」

「きれいでしょ！」

「しゃべり鳥（ライノ）はこの姿が命」

ライノが冷やか声で言い放つ。

「あたし達の中に飛び込んできて、あたし達のよりどころを潰して、ただですませるわけがないでしょ」

「きれいでしょ！」

「きれいなのはあたし！」

「あたしがきれい！」

「一番きれい！」

「ちがううーっ！　きれいなのはユーノなのおおおお！」

「おだまり！」

「きれいでしょ！」

「おだまり、ちび！」

「きれいなよ！」

「おだまり！」

レスファートの叫びに引き裂かれるような叫び声を上げて、しゃべり鳥（ライノ）達が鳥籠の中で身悶えした。金髪が次々伸びてきて木々を地面をのたうつように這い回り躍り上がり、揺れる鳥籠入り交じる声と入り交じる光景、まるでこの世界ごと一気に蓋をしまいたくなりそうな喧噪、遠くから駆けつけてきたヒストもさすがに近づけないでいる。

「ユーノ！」

「く……ライノ!!!」

「……なあに？」

しがみつくとレスファートにユーノは声を振り絞った。

「詫びならボクがしよう！」

「ユーノ！」

「彼はまだ子供だ、君達への非礼はボクが代わりにお詫びする、だからレスファートを放してやってくれ」

「へえ...」

ざわざわと周囲の叫びがおさまっていった。

「あなたが？」

「ユーノ...」

「そうだ、ボクが」

「どうやって？」

「.....何が望みだ？」

ぎゅ、とレスファートが緊張した顔で服を握ってくる。さすがにこのままでは無事に済みそうになると、ようやく少し落ち着いてくれたらしい。

「.....そうね」

「ライノ...」

「ライノ、あれを」

「わかってる、わかってるわよ、黙ってて」

周囲の鳥籠の声をライノは片手で制した。

「じゃあ.....鳥籠の鍵を持ってきて？」

「鍵？」

「そう、あたし達はここから出たいの、みんな自由になりたいの」

「自由よ！」

「自由になりたい！」

「鍵を！」

「鍵を持って来なさい！」

「一体どこにあるんだ？」

「さあ、それを探すのも条件ね」

ライノはにっこり笑った。

「それと引き換えでなければ、許すわけにはいかないわ」

「そんなの、むりだよ」

レスファートが青い顔になってつぶやく。

「鍵、か」

しゃべり鳥（ライノ）の伝説にはそんな鍵の話などなかった。

けれど、ひよっとすると。

（アシャなら知っているかもしれない）

「ライノ.....ボクには仲間がいる」

考え考え、ユーノは提案した。

「その仲間が鍵の在処を知っているかもしれない。彼に鍵を見つけてきてもらおう。ただ、レスはもうへとへとだし、君達もこれ以上不愉快なことばを聞きたくないだろう。どうかな、ボクがレスの代わりに鳥籠に入って、この場に残り、レスに仲間への伝言を頼むというのは？」

「ユーノ！」

だめだよ、やだ、そんなのぼくはいやっ。

叫びながらじたばたするレスファートを押しえつつ、ライノを振り返ると、

「ふ...ん」

相手はじろじろとユーノを見上げて見下ろした。

「.....いいわ」

ライノは手近の蔓をそっと手に取り、それをたぐり寄せるようにして飛び上がった。白い薄衣が翻って視界を上昇したかと思うと、すぐにレスファートの鳥籠がするする降りて地面に着く。

「ゆーの...」

「キスしてあげれば？」

ライノの声にひざまずき、そっと手を伸ばすとレスファートはいそいそと手にすがりついて、嬉しそうに頬を差し出そうとしてくる、その矢先。

ぎしっ、ときしみ音をたてて、扉が開いた。

「.....キスも、していないのに...」

ライノが呆気にとられた声でつぶやく。

「どうして扉が.....あなた、『銀の王族』ね！」

はっとしたように叫んだライノと同時に、きしりながら扉はどんどん開いていき、既にレスファートが半身抜け出せるほどになった。

「キスもせずに扉を開けられるのは、『銀の王族』かラズーン直々の視察官（オペ）しかいないもの！」  
オペ。

そのことばを幾度か耳にしたことがある。

「オペ...？」

「そうよ、視察官、でもあなたはそうは見えないものね」

ラズーン直々の視察官。

ユーノの頭を過ったのはセレドへやってきたイシュトの姿、そして、とてもよく似た気配を持つもう一人の正体不明の男。

（アシャ）

アシャがもしそうならば、あの広範な知識と異常に高い経験値も納得できる。

（でも、それならなぜ、あんな姿でセレドに？）

ひょっとして、何か別の意図があったのか？

「ユ、ユーノ」

「あ...ごめん」

ごそごそと半開きの扉から体を抜き出したレスファートの頬にそっと唇を当てた瞬間、びしっ、と鋭く木が裂けるような音が響いて、扉が開いた。転がり落ちるようにレスファートが飛び出し、しがみついてくる。

「ユーノ！」

強がっていてもやはり怖かったのだろう、レスファートの身体は冷えてがたがたと震えている。

その耳元にそっと小さく囁いた。

「いい？ アシャ達は近くまでやってきてる。しゃべり鳥（ライノ）達の鳥籠の鍵とその在処、アシャなら知ってるかもしれない。探し出してほしいって伝えて？」

「で、も」

掠れた声でレスファートが反論する。

「もし、みつから、なかったら」

「その時は」

もしアシャがラズーン直々の視察官ならば、セレドの忠誠もカザドの悪行もきっとラズーンに届くだろう。ユーノがラズーンに辿り着けなくても、ユーノが全力を尽くしてラズーンに向かおうとしたことは伝わるだろう。そしてもし、ラズーンの視察官がセレドの次代王として降りてくれるのなら、セレドは末永く安泰、ユーノが先行きを案じるまでもない。

「ボクのことはいい」

見捨てて先へ進んで。

「いやっ！」

レスファートは間髪入れずに叫んだ。

「いや、いやだって、そんなの、ぜったいいやっ」

それぐらいならぼくがここに残る、ぼくが失敗したんだから、ぼくがこの『おばさん』達を怒らせたんだから。

「ぼくがせきにんをとる！」

ぼろぼろ泣き出しながら、レスファートが叫んで、周囲のしゃべり鳥（ライノ）達がまた険しい気配になった。

「いやだったら、い.....っ！」

びくっとレスファートが身体を強張らせた。

「ゆ...の.....」

ひどい、よ。

小さくつぶやいて、泣き顔のままユーノ腕に崩れ落ちる。

「ごめん」

このままでは長引く一方、そう判断して軽く当て身を食らわせたのだが、レスファートにはちよっときつかったかもしれない。

眉をしかめつつ謝って、

「ヒスト！」

呼ぶと栗毛の馬はふんふんと鼻を鳴らしながら近づいてきた。

「レスをアシャ達のところへ運んでくれ」

ふふん、と汗に濡れたレスファートの髪を嗅ぎ、ふんふん、とユーノの髪に鼻を寄せ、頭を振り上げた。

「つふうん」

「ありがとう」

仕方ないと言いたげな仕草に微笑みながら、ユーノは気を失ったレスファートをしっかりとヒストの背中に固定する。

「さ、行ってくれ、静かに」

ふふふんっ、とヒストはうっとうしそうに頭を跳ねた。ためらう様子もなくくりと向きを変え、やがて急ぎ足に離れていくが、視界から消える瞬間にちらりとユーノを振り返り、軽く頭を振ってみせる。

と、そのすぐ後からライノがふわふわと着かず離れず追いかけるのが目に入った。

「あれは」

「見張りよ」

側の鳥籠から声が響いて振り返る。

ライノと同じく金色の髪、鮮やかな瞳はやや緑がかって美しいが、かくりと首を傾げて微笑んだのに寒いものが走る。

「あなたをここに放ってかたても困るじゃない」

だって、あなたってば、あんまり美しい鳥（ひと）じゃないものね。

「もう一度取り戻しに来るかどうか、心配だわ」

あの子供ならまだしも、そう言った矢先、するする伸びてきた金髪が剣に伸びかけたユーノの手首に巻き付いた。

「これ幸いと捨て置かれてもねえ」

ぐい、と引つ張られてそちらへ脚を踏み出すと、別の鳥籠から伸びた金髪がまたユーノの腕に絡む。

「こっちよ」

「あなたに似合いの籠がある」

「そのみっともない煤けた顔にぴったりの」

「跳ねてくしゃくしゃの汚れた髪にお似合いの」

「あちこち穴が開いたみすぼらしい服にちょうどいい」

金髪から金髪へと受け渡され、途中で何度か血の気が引くほど締め付けられ、痛みを覚えるほど引つ張られて、ユーノは奥まったところの籠の前まで導かれた。

他の鳥籠とは違い、薄茶色の棘がついた蔦で編まれている。床にあたる部分はきっちり編まれてはいたのだろうが、妙な色に染まり、一部腐ってきているようなぬるりとした汚れがついた汚い籠だ。

「さあお入り」

「ぴったり、ねえほら見てやって」

「なんてみっともないだろう」

開かれていた扉に押し込まれ、差し込まれた金髪の中に引きずり込まれていく途中で、鋭い痛みが走って顔をしかめる。

「あら、ごめんなさい？」

くすくすとしゃべり鳥（ライノ）達があちこちで嗤った。

「言い忘れていたけれど、その棘は痺れるの」

「く」

裂かれた服の下の肌にじん、と鈍くてむずがゆい感覚が走る。

「ほらこっちよ！」

「っ」

いきなり数方向から同時に金髪に引きずられて、思い切り鳥籠の中で引き倒された。背後でぼさりと閉まった扉があっという間に幾重にも蔦と蔓で覆われていくのに、ユーノは唇を噛んで周囲を見回す。頬や額が傷ついてちりちりする。

（出さないつもりか）

「『銀の王族』でしょ」

すぐ側にするすると別の鳥籠が降りてきた。真っ青な瞳、やや波打った金髪、そして卵形に整った顔の綺麗な唇が嘲笑いながらことばを続ける。

「世の始めから幸福を約束されたおめでたい人種」

「あたし達がこんな定めを受けていても」

「笑って楽しんで健やかに生きている幸せな人間」

次々と鳥籠が降りてきて、周囲を取り囲む。

「生まれながらに恵まれてるんだもの、こんなの平気よね」

「ずっと幸せだったんだもの、これぐらい苦しみなさい」

「今まで苦労なんかしたことないんだから、ああその顔見せてごらん！」

「あっ」

またふいに強く腕を引かれて籠にぶつかった。危うく開いた目に棘が飛び込みそうになって、かろうじて顔を背けると、針を刺されたような鋭い痛みが走って唇の端が濡れる。ねっとり零れてくる雫は温かで塩辛い。

「泣けばいいのに」

「泣いてみなさいよ、あの子みたいに」

「泣き喚いて助けてって言うてごらんなさいよ」

けたたましい笑い声が伝染するように森の中に広がっていく。

「いい気味！」

「いい気味だわ、美しくもないのに自由だなんて！」

「ざまあみろ！」

「あははは、ざまあみろ！」

「く...っ」

次々伸びてきた金髪が手足に絡み、鳥籠の端へユーノを押し付けて引きずる。背中に鋭い痛みが何度も走って、ユーノは歯を食いしばった。

「見捨てられるがいい！」

「その鳥籠の中で朽ちるがいい！」

「汚くて醜いままで一生を終えるがいい！」

「誰も望みやしないわ、そんな姿で！」

「あははは！」

「あははは！！！」

(誰も望まない？)

ぎちぎち締め付けてくる髪に思わずユーノは苦笑する。

(世の始めから幸福を約束された？)

セレドの皇宮で、荒野で、草原で、一人ただ戦って傷ついて、回復する間もなく剣を振り上げ、ひたすら走る日々。

あれが、幸福だったというなら。

「今も...十分...幸福じゃないか...」

小さくつぶやく。

少なくとも、大事な人は守れたのだから。

大事な人は傷つけずに済んでるのだから。

「誰も...望まない.....か」

今に始まったことじゃない。

少なくとも姫であるユーノを望まれたことなど一度もない。

棘には毒でもあるのだろうか、むずがゆい感覚と痺れが身体中に広がって行って、気力がどんどん萎えてくるのに、ゆっくり深呼吸する。

(もう、少し我慢しろ)

アシャは鳥籠の鍵を知っているかもしれないが、すぐに持って来れるとは限らない。

(粘れ)

太古生物、しゃべり鳥(ライノ)の巣があると知って、乗り込んでくるとは正直思えない。

(気力を落とすな)

だからいずれは一人でここから脱出するしかない。

(粘れ)

目を閉じる。全身の倦怠感を感覚を切り替えて体の休息に当てる。

(剣は、まだある)

機会を狙え。

「みっともない子！」

「あたしの方がきれいでしょ！」

「醜い子」

「あたしはきれいでしょ！」

「誰が助けにくるものか！」

「あたしはきれい！」

「誰が迎えに来るものか！」

「きれいなのはあたし！」

姦しい叫びが響き渡る森で、ユーノは静かに時を待った。



## 4.しゃべり鳥（ライノ）

「ユーノ！ レスファート！」

勢い良く駆けさせてきた馬を止め、アシャは周囲を見回した。

「ユーノ！ どこだ！」

叫んで耳をすませるが、辺りは静まり返り、時々鳴き鳥（メール）の柔らかな声が響いているだけだ。穏やかで優しげな風景の中、自分の声だけがきりきりとして緊張感をたたえているのに気づいて苦笑する。

（いつも、置き去られる）

不愉快で、そして不安だ、ラズーンのアシャともあろうものが。

（あいつの顔が見えないことが）

またどこかで傷ついているのではないか、命を脅かすほどの痛みも堪えて一人耐えているのではないか。

そしてそこには必ずユーノを傷つける存在が居る。

「...ちっ」

その存在を考えたたん、身内に走った青白い怒りにアシャは舌打ちした。

どんどん手に負えなくなってくる、この苛立ちと怒り。無鉄砲で誰かが苦しんでいると聞けば我が身を省みず飛び込んでしまうユーノがいては、忍耐力がどれだけあっても足りない。今だって、ただの想像にしか過ぎないユーノの危機に、体が既に反撃体制を整えてしまう。

（まったく）

「いっそ、縛りつけておいてやるか？」

アシャの側に、お前の居場所はここだと身動き一つできないように？

「.....詰られるな」

力の限り罵倒されて、アシャの人格も疑われそうだ。ひよっとすると、嫌われるほどに。

「っ」

ユーノに嫌われる、そう考えたたんに一瞬自分が竦んだのに気づき、絶望的な気分になった。

「.....出来上がってる」

周囲では何度も見たことがある、女一人に振り回されてすべきことも考えるべきことにも及ばなくなつて、人生を誤っていく愚かな男達。自分には出生のこともある、アシャの華やかな外見を身を飾る道具としてしか考えない女性達も知っている、レアナの真摯に魅かれはしたが、胸の内を焼き焦がすような衝動にまさか自分が落ち込むななどは考えもしなかったのに。

「.....ユーノ！」

もう一度、気を取り直し、声を張り上げ密度を増やした木立の中を抜けていく。きらきらと日差しが細かな結晶を散らしたような輝きの中、風が静かに枝々を渡る。

「.....」

その枝の一つに見覚えのあるものを見つけてアシャは眉を寄せた。

緑色の蔓で編まれた、人一人入るほどの鳥籠のようなもの。

それと気づいて見回すと、あちらこちらに風に微かに揺れながら、緑の鳥籠が吊られている。

しゃべり鳥（ライノ）が居る。

なおも不快感が広がった。

「ここは.....巣、か」

あの種族はこのほか清冽を嫌う、特にユーノのように内側から零れる揺らぎない潔さを。万が一捕まっていたら、その扱いは十分予想できる。そして、それにユーノがどれほど傷つくかも。

早く見つけなければ。

「やだーっ！」

不意に甲高い叫びが響き渡ってはっとした。

正面の木立の間から、額に『白い星（ヒスト）』をいただいた栗毛の馬が、普段の振る舞いからは信じられないほど静かな足取りでやってくる。

だが、その背中にはじたばたじたばたと激しくもがくものがあり、それがうっとうしいのだろう、時折ヒストは上下に強く顔を振り、立ち止まりかけては思い直したようにまたぼくぼくと歩を進めてくる。

「レス？」

「やだやだやだーっ、ユーノおっ！」

声は今にも泣きじゃくりそう、慌てて馬を駆け寄らせてみると、その勢いに慌てて見上げてきたレスファートはヒストの背中に紐でしっかり括り付けられていた。体と紐の間に毛布はかませているものの、暴れ続けたらしい少年はぎりぎり締め上げられた状態、アシャを見るとぼろぼろ涙を零しながら訴える。

「ほどいて、アシャ、ユーノ一人でかごの中なの！ つかまったの！ ぼくが、ぼくが……っ」

しゃくりあげて顔を歪める。

「へましたの！ こんちくしょうなことしたの！ ユーノ助けて、アシャ、ユーノがあのおばさんたちに！」

イルファ譲りの罵倒まじりのことば、中でも今の状況ではひたすらにまずい一言にアシャはひきつった。

「……『おばさん』……って」

これは何となくわかってきたぞ、と溜め息まじりにレスファートの紐を切り解いてやりながら確認する。

「ひょっとして、鳥籠に入ってた女達、か？」

「うん！」

レスファートはようやく自由になった体のあちこちをさすりながら、大きくうなづく。

「『おばさん』ってほどじゃなかっただろう？」

「『おばさん』！」

「……それをしゃべり鳥に向かって言ったのか？」

「アシャ、あのおばさんたち知ってるの?!」

「他に何か言ったか？」

「ユーノがきれいだっていった！」

「……それで？」

「ぼくのユーノは、『おばさん』たちのだれよりきれいだっていった！」

まちがってないもん、ぼく。

唇を尖らせるレスファートは、プラチナブロンドを日差しに煌めかせ、確かに汚れてはいるけれど、十分輝いて美しい子供だ。

「……致命的だな」

溜め息をついて口を押さえた。

しゃべり鳥（ライノ）は己の容姿が他の存在よりも美しいことに全ての基準を拠っている。ましてや、どこからどう見ても、王子様然として可愛いレスファートが崇拜に近い愛情を注ぎ、他の誰よりも美しいと保証する相手が、一般的に見れば茶色の髪を跳ねさせ荒々しい拳動の汚れた服の子供であるなどは、彼女達にとっては論外だ。

「そしたら、『おばさん』がぼくをつかまえて！」

レスファートが語る事の顛末にどんどん溜め息が重なる。

「そりゃ……無理だろう…」

「それでね、ユーノはキスせずにとびらをあけて、そしたら『おばさん』がユーノのことを『銀の王族』だろうって」

「……」

びくり、とアシャは動きを止めた。

「『銀の王族』ってなに？」

「……それだけ綺麗だってことだよ」

「ふうん？」

いささか訝しげなレスファートをヒストにしっかり座らせる。

まあ当たらずとはいえ、外れてもいないよな、真実の意味では。

胸の中で続けたことばは口には出さない。

確かに綺麗、だ。この世界を覆った破滅の影響を限りなく排除した存在、二百年祭を越えるための最後の布石、そしてまた、『運命（リマイン）』の跳梁と太古生物の復活を制御する唯一の鍵として、その中身は磨き抜かれている。

「しかし……まずいな」

しゃべり鳥（ライノ）がユーノを『銀の王族』と気づいたのなら、なおさらやすやすと手放しはしないだろう。ラズーンとの取引に使うとは思えないが、他者の幸福を誰より妬む一族なのだ、ラズーンにより幸福であるよう『条件付け』されている存在だと知れば、あっさり返して何かを手に入れることより、自分達の側に置いて弱って死んでしまうまで、からかい嘲笑うほうを選ぶだろう。

「鳥籠の鍵を持ってくれば、ユーノを放すと言ったんだな？」

「うん、でも」

再びじわじわとレスファートの瞳に涙が盛り上がった。

「どうしても見つからないなら、ユーノのことはいいから、さきにいけて…」

「……だろうな」

「でも！ そんなのぼくはいやだからっ！」

絶対絶対嫌だからね！

激しい口調で言い募るレスファートに、

「俺もだよ」

ぼん、と頭を軽く叩く。

「俺達があいつを放っていくわけないだろ？」

「う…うん」

「ただ、鳥籠の鍵、だな」

「ユーノはアシャなら知ってるかもっていった」

「うーむ」

物質としての鍵、など聞いたことがない。しゃべり鳥（ライノ）達を自由にできるのは、扉を開ける鍵ではなく、彼女らと心を通わせることで彼女らを受け入れ引っ張り出そうとする精神の器なのだ。

視察官はその職務権限上、開けと命じるだけで開くことができる。『銀の王族』の中にも鳥籠の中の存在に強く心を寄せることで、扉を開くことができる者も居る、だが。

「開いても、出るかどうかはまた別、だからな」

「開いても、出るかどうかは、べつ？」

レスファートがきょとんとした顔になる。

「どうして？ 『おばさん』たち、すごく外に出たがってたよ？」

「出たがってるのは正しいが、出るかどうかは違うんだ」

そこのところが難しいんだがな、と苦笑すると、わけわかんない、とレスファートは眉を寄せた。

「でもそれなら、かぎがあっても、いみないよね？」

「そうだ」

鍵があろうとなかろうと、しゃべり鳥（ライノ）が鳥籠から出られないのは別の理由による。外側からの救出者が強くそれを望んでも、成功する確率は実はかなり低く、逆に反撃されることさえあるのだ。

（しゃべり鳥（ライノ）達はユーノを手放す気はない、と見たほうがいいのか）

考え込んでいると、視界の端にひらりと白いものが舞った。視線を上げて、木立の向こうに慌てて隠れた絶世の美女を一人見つける。

「あの人がみはり」

「なるほど」

相手はアシャの凝視にどぎまぎしたように頬を染めて唇に指先をあててはにかんだ。

「はぐれ鳥、か」

「はぐれ？」

「鳥籠から出られたしゃべり鳥（ライノ）をそう呼ぶんだよ」

「でも」

あの方は自由なんでしょ？

「どうだかな」

アシャはヒストの手綱を握った。

「はぐれってことは……もどるってこと？」

レスファートが利発な発想を見せる。

「……そういうことだ」

いずれは彼女も再び鳥籠に戻るのだろう、おそらくはそう遠くない未来に。

「……せっかく自由になったのに、どうして？」

「.....彼女達がしゃべり鳥（ライノ）だと言われる所以だよ」

世の中には寒風も大雨もあるってことさ、とアシャが応じると、レスファートは少し目を細めた。

「さむかったり、ぬれたりするのはきらいってこと？」

「それに痛かったり、苦しかったりも嫌いってことだ」

「そんなの」

レスファートはふいと何かを思い出すように空を見上げた。

「旅なんかできないよ」

「その、通りだ」

一旦イルファのところに戻ってユーノを助ける作戦を練るぞ。

アシャのことばにレスファートは考え込んだ目をしたままうなずいた。

それからしばらくして、アシャ達は急ごしらえの天幕（カサン）の影で額をつきあわせて座っていた。

「えっ」

「しっ、レス」

イルファが制するのに、レスファートは慌てて口を噤み、少し離れた木立にもたれて今にもこちらに近づいてきそうな気配でちらちらとこちらを見ているライノに目をやった。

「鳥かごのかぎ、ないの？」

声を潜めてそっと尋ね直し、うなづくアシャにより不安そうな顔になる。

「じゃあ.....ユーノは？」

っていうか、じゃあなんであの『おぼさん』たちはかぎを持ってこいなんていったの？

わけがわからないという顔で、アシャとイルファを交互に見る。

「たぶん、しゃべり鳥（ライノ）の狙いは、ユーノを閉じ込めることにあったんだろう」

おそらくは閉じ込めるだけではなく、嘲笑いいたぶることに。

さすがにそれは口にせず、アシャは鋭い視線をライノに走らせる。

「なんで？」

レスファートはますます困惑した顔になった。

「ユーノ、あの人たちに何もわるいことしてないよ？」

「ああ、レス」

イルファがなるほど、と言った顔でうなずいた。

「世の中には、ただ自分の気に食わない相手が居るだけで攻撃していいと考えてる馬鹿がいるんだ」

「なんで??」

そんなことして何が楽しいの？

「何が楽しいんだろうな？」

イルファが肩を竦める。

「うまいもんを食って寝たほうがよっぽど楽しいのにな？」

「.....で、どうやって助けるか、だが」

アシャはなお声を低めた。

「鳥籠の鍵がないのはしゃべり鳥（ライノ）も百も承知だろう。それを条件にしたということは、存在しないものを探し回る俺達の姿を見て楽しむことも考えてるんだろう」

「悪趣味だな」

「ひどいよ」

「一番厄介なのは、あそこにいるライノだ。俺達が鍵を探し回らなかつたり、別の行動をとればすぐに関の所へ戻って、それを理由にユーノをいたぶるつもりだと思う」

「ああ、だから」

「レスファートを連れてできるだけ遠くにあいつをひきつけておいてくれ。その間に俺はユーノを助ける」

「うん、わかった」

「よし」

二人が急いで立ち上がる。

「如何にも知っている、見つけてるって感じでいいよな？」

「ないとは知っていても」

ひよっとしたらとライノは考えるかもしれない。

「それを利用する」

「まかせて」

レスファートが頬を紅潮させてうなずいた。

「なんなら、ぼく、『おぼさん、こっちにあつたみたい！』ってさげぼうか」

「.....それは最後の手段にとつとこうぜ、レス」

おそらくそれなら確実にライノは追いかけてくるだろう、別な意味で。

子供っていうのは無邪気で残酷だな、とつぶやくイルファに苦笑しながら、アシャはじゃあ、頼む、と二人を送り出した。

「レス、あそこだつてよ！」

「ああ、なんだ、あれだったんだ！」

天幕（カサン）を飛び出しながら、イルファとレスファートが声高に言い合う。

「急がなくちゃなくなるんじゃないか」

「ぼくも行く！ だってユーノを早くたすけなくちゃ！」

「.....うーむ」

天幕（カサン）の影でアシャは密かに片付けを始めながらひやひやする。

白々しいほどのやりとり、あれで本当にうまくライノが乗ってくれるのだろうかと心配になったが、突然の動きに誘われて、ライノは慌てて馬に飛び乗って駆け出していく二人の後を追っていく。

「.....よし...」

その白い薄衣が木立の彼方へゆっくりと消えていくのを見てとって、アシャは急いで天幕（カサン）をたたんだ。馬にまとめ、跡形もなく周囲を始末する。

視察官（オベ）に詳しい者が居る場所で長居をするつもりはさらさらなかった。どんなことからアシャの正体が明らかになるかわからない。ましてや、相手は太古生物、遠く『運命（リマイン）』に繋がる存在でもあるだけに、万が一あの男が出てくると話がもっとややこしくなる。

「.....」

脳裏を過ったその猛々しい風貌に、アシャは懐かしさと淋しさが胸に広がっていくのを感じた。

なぜ袂を分かったのか、それはもうどうにもならないものではあるのだろうし、おそらく二度と相容れることはないだろうが、それでも一度は近い存在だったのだ。

「ヒスト！」

呼ぶと栗毛の馬は渋々と言った様子で近づいてきた。主人不在の今は仕方なしに従ってやる、そういう気配でアシャの側にやってくる。

「ユーノを迎えにいくぞ」

「っ、ふ、うっ」

当然だろう、そう言いたげな鼻息に苦笑し、アシャは馬に跨がり、ヒストがついてきているのを確認しつつ、木立の密集する奥へと向かう。

（馬鹿なことを考えていなければいいが）

レスファートをヒストに括って戻したやり方は、ユーノが旅に同行することを諦めた可能性を示す。あれほどセレドの安泰と家族の幸福を願っているのだ、その全てを諦めるなど言うことはあり得ない。

（まさか）

ひやりとしたものが背中を滑り落ちた。

もしユーノがラズーンへの旅を諦めるとしたら、どういう理由があるだろう。自分が脱出不可能と考えた、それならまだいい、そんな発想はこれからすぐに潰してやれる。

もっと問題なのは、『自分がラズーンに行かなくてもセレドが安泰であり、家族が幸福であろう』と判断したかもしれないことだ。

（しゃべり鳥（ライノ）達は俺のことを知っているか？）

馬を走らせながら急いで過去の記憶を検索する。

直接に顔を合わせたことはないはずだ。顔を合わせただけではわからない、それと紹介されるか説明されなくては、アシャをその人だと思える者はいないはずだ、まさカラズーン以外で、まさかこんな世界の端々で、アシャが居るはずなどないのだから。

けれどもし、諸候に贈られたしゃべり鳥（ライノ）が居て、その誰かがこの巣へ戻ってきていたら？ 諸候の中にはラズーンへ入った者もいるだろう。アシャに行き会ったものもいないとは言いきれない。

もしユーノがそういうしゃべり鳥（ライノ）からアシャが何者であるか聞いていて、それで自分がラズーンに行くまでもないと判断したならば、それは確かに正しいと言わざるを得ない。ユーノ自身がラズーンの中核に赴くよりもうんと確実に、セレドの忠誠やカザドの非道は『太皇（スーグ）』に伝わるだろう、それこそ目で見ていたようにはっきりと。

（まだだ）

まだ早い。

不安定に打ち出した心臓に舌打ちする。

ユーノがアシャの存在の意味に触れて、それでも変わらず付き合い続けてくれるためだけでも、まだ二人の関係はうんと浅くて薄い。

（もっと強く）

もっとくつきり自分の姿を刻まなくては、ユーノはアシャの正体を知ったとたんに、自分とは一切関わりがない相手だと判断してしまうに違いない。

「...くそっ」

せっかくここまで近づいたのに。

ようやく剣という色気も何もあったものではない、けれどユーノにとってはかけがえのないものを通して、一つの未来を育もうとしているのに。

「...きれいでしょ」

「あたしはきれいでしょ...」

アシャが駆け抜けていくのに気づいたのだろう、周囲の鳥籠から次第に騒がしくしゃべり鳥（ライノ）が呼びかけ始めた。ちらりと視線を上げると、枝々にぶら下がった緑の鳥籠から、似たような金髪碧眼の美女達が籠にしがみついて髪を垂らしかけ、アシャに指を伸ばしている。

「待って！」

「待ってあなた！　きれいでしょ！」

「ねえ見て、きれいでしょあたし！」

鳴き鳥（メール）のように愛らしくは響かない、甲高い声がじりじりと互いを押さえるように音量を上げていく。

「きれいでしょ！」

「きれいでしょ！」

「ねえきれいでしょ！」

「っふひひひっ」

アシャはゆっくり速度を落とした。続いてヒストがアシャを置き去って走り抜けようとしたが、鼻息荒く立ち止まり、どうして主人の元へ直行しないのかと言いたげに鼻を鳴らす。

「しゃべり鳥（ライノ）、ちょっと聞きたいことがある！」

アシャは声を張り上げた。

一瞬にして周囲がぴたりと口を閉ざし、アシャを凝視したまま固まる。何かを言いかけた唇も半開き、見開いた目にきらきら光る輝きは宿っているが、鳥籠を持つ指がきつく曲げられていて、まるで数十の人形の籠に取り囲まれたような不気味さだ。

「俺の主人をお前達の仲間が捕らえている！　どこに居るのか、教えてほしい！」

「.....主人」

くすり、と小さな声が笑った。

「主人、主人？」

「あれが、あのみっともない男の子が」

くすくす、と笑い声が波のように広がり、合間に蔑んだ冷たい声が吐き捨てる。

「知ってるけどね」

「ここじゃないわ残念」

「ここにいたら嗤ってやったのに」

「思う存分、締め上げてやったのに」

「……」

びくり、と自分の指が無意識に震えたのを感じた。

締め上げた？

(なるほど)

目を伏せ、少し息をつく。

(かなり不愉快な状況になってるってことだな)

だが、素直に教えてくれるような連中でもない。へたに扱えば、ユーノの鳥籠ごと木の上に引き上げられ隠されて、飢え死にするまで放置される。そしてそれでも彼女達は平然と言うはずだ、別に何も悪いことなどしていない、ただちょっと風に鳥籠が揺れたから、枝の上に落ち着かせただけなのだ。

ユーノが酷い目にあつたとしたら、それは見つけられなかったアシャのせいなのだ、と。

「知ってるわよ、でもそれを教えてら扉を開けてくれる、視察官（オベ）？」

間近にあった鳥籠がするすると降りてきて、中の美女がにこやかに笑った。

「視察官（オベ）？」

「あなたを知らないしゃべり鳥（ライノ）はいないわ」

隣の鳥籠からくつつくと笑い声が響いた。

「ラズーンのアシャ、剣に優れ詩に満たされ」

「光溢れる笑顔、氷石の心」

「数々の美女も溶かすことが叶わない」

「あなたを手に入れるのは荣誉だわ」

周囲の鳥籠からそれぞれに美女が体をくねらせ笑いかける。薄衣を肩から落とす者もいれば、きわどく胸をさらしつつ白い腕で抱く者、揃えた脚を緩やかに伸ばし、金色の髪をかきあげ微笑み、ただその光景だけを見れば、艶やかな美女に囲まれ誘惑されている至福の時と見えないこともない。

だが。

「本当に外に出たいのか？」

アシャは冷やかに問いかけた。

「出たい、出たいわ！」

間近の美女はさすがのようにアシャを見つめる。

「……では出してやろう」

アシャは馬を下り、その鳥籠の側に近寄った。籠の隙間から手を差し入れ、相手の美しい髪を掬い上げながら、

「代わりに俺の主人の居所を教えてくださいな」

アシャに髪を愛撫されて、うっとりとした顔でしゃべり鳥（ライノ）は目を細めて見上げてくる。綻ぶように開いた唇が濡れ濡れと光った。

「あの子なら！」

側の鳥籠から叫びが上がった。

「あたしが知ってるわ！」

「あの子は奥よ！」

「もっと奥！」

「あたしに触って！」

「あたしよ、ねえ！」

「……誰が一番よく知っているんだ？」

アシャは静かに微笑んで、目の前の美女の瞳を覗き込む。

「あたしに決まってるわ」

相手は笑みを深めた。

「あの子は右の木立の奥よ。一番大きな木の中程、汚い鳥籠に入っている、でもねえそんなことより」

アシャの手にしがみつこうとした指から、するりとアシャは手を抜いた。

「ありがとう」

「あん…」

名残惜しげに唇を尖らせる美女に目を細め、アシャは片手を上げて少し揺らせる。念じるほどでもなく、指先から一瞬、金のオーラがきらめいて流れ、固く閉まっていた扉がいきなり緩んでぽかりと口を開けた。

「さあ、開いた」

アシャは微笑んだ。

「約束を守ったぞ」

「開いた…わね…」

しゃべり鳥（ライノ）はすぐに扉の外へ出ようとするように体を起こした。だが、途中で急に何か気づいたように動きを止める。

「どうした？ 出ないのか？」

これでは狭すぎるとでも？

アシャは静かに再び片手を上げる。

「い…」

美女が小さな悲鳴を上げて、じり、と背後へ後じさった。澄んだ瞳をこれ以上は開けないほど見開いて、なおも開いていく扉にどんどん体を引いていく。

「いや…」

微かな震えが白い指先を走った。滑らかな腕が見る見る栗立つ。唇が色を失って細かく震え出し、さっきまで懇願と媚に紅潮していた頬も削いだように固まっていく。

「いや……視察官（オベ）…」

掠れた声が零れ落ちた。

「閉じて……………」

「ほう？」

アシャは目を細めた。

「開いてほしいと言わなかったか？」

「いやよ……閉じて…」

美女は全身震え出している。額から伝った汗が醜い跡を残しながら、だらだらとしゃべり鳥（ライノ）の顔を流れ落ちていく。

「閉じて……閉じて…っ！」

「何を馬鹿なことを！」

「扉が開いたのに！」

「いやよいやよいやっ！」

周囲のしゃべり鳥（ライノ）が憤った声を上げて、鳥籠をそれぞれに揺さぶった。甲高い声がきいきいと響き渡り、アシャは苦笑しながら周囲を見渡す。興奮に歪んだ顔、焦って叫ぶ唇、血走って睨みつける瞳、ついさきほどまで艶笑に囲まれこの世の楽園とも思われたはずだが、今はもうがなりたてる青猿（グッダ）の群れに飛び込んだようだ。

「よく聞こえなかったな」

アシャは微笑しながら、なおも上げた手に力を集めた。扉がぎしぎしと無理矢理開かされるようになおも開く。

「もっと開いて、そう言ったのか？」

鳥籠が激しく揺れる、今にも粉々に砕けそうに。

「いやあああっっ！」

中のしゃべり鳥（ライノ）が身悶えて叫んだ。

「閉じて閉じて閉じて、いやっ、怖い怖い怖いっっ！」

怯えて引き攀った声はしわがれ、怨嗟を含んで猛々しい。

「閉じてええええっっ！」

「……暴れると壊れるぞ」

アシャは冷ややかに吐き捨てた。大きく震えた相手が漏れ出す悲鳴を必死に押さえようとするのに、静かにまた片手を上げて扉を閉じる。

「視察官（オベ）！」

「あたしの扉を開けて！」

「こっちよあたし！」

「その子なんかほっといてあたしを！」

周囲がはつとしたように叫び出すのに首を振る。

「無理だな」



しゃべり鳥（ライノ）は一人では鳥籠の外へ出られない。受け入れてくれ引っ張り出してくれる誰かがいないと、自分の居場所である鳥籠から離れることなど不可能なのだ。

そうやって鳥籠の中の安寧に慣れ、外を羨み出られない自分を哀れみ、やがて身動きできなくなって年老いて、鳥籠の中で朽ちていく。

そうした仲間をまたしゃべり鳥（ライノ）達はすぐに見捨てる。動けなくなり騒げなくなると、容赦なく高い木の上に吊るし上げて居なかったように振る舞い、やがて年月とともに腐ってきた鳥籠が緩んだ蔓とともに地上に落ちて土に返る、しゃべり鳥（ライノ）の一生はそういうものだ。

だがそういうしゃべり鳥（ライノ）がいつどこで生まれ、どうして鳥籠の中に棲まうようになるのか、おそらく誰も知らないだろう、ましてやそれが、演出されたものかもしれないとは思えないことだろう。

「.....」

アシャはしゃべり鳥（ライノ）に見える世界の惨さを噛みしめながら、優しく空中を撫でて鳥籠の扉を閉じた。

そのとたん。

「ひどいわ、視察官（オペ）！」

今の今まで鳥籠の奥で震えながら口を押さえて縮こまっていた美女が、まるでそんなことなどなかったように激しい勢いで閉じた扉に捕まって顔を寄せてきた。

「何てことをするの！ 今出ようとしていたのよ！」

「そうよ！」

「そうよその子は出ようとしていたの！」

周囲も同調したように叫ぶ。

「もう今出るところだったのに！ なぜ扉を閉めたの！」

美女は口を極めてののしり始める。

「これみよがしに開いておいて、出ようとした目の前で閉じるなんて！」

なんてひどいことができるの、視察官（オペ）！

目に涙を浮かべて詰るしゃべり鳥（ライノ）は今しがたの記憶をすっかり失ったようにも見えた。

「酷いことをするのね視察官（オペ）！」

「力があるからって、心を弄んでいいってことじゃないわ！」

「嫉妬したのね、視察官（オペ）！」

「あたし達があまりに美しいから、他の男に盗られるかもしれないから、閉じ込めておきたくなったんでしょう！」

「それでもひどい！」

「ひどいわ視察官（オペ）！」

「.....」

アシャはゆっくり周囲を見回した。

これで本気なのだ。

本気でしゃべり鳥（ライノ）達は自分達が心底願って今にも叶えようとしていた望みを、アシャが潰したと考えているのだ。自分達が怯えて選ばなかった道を、アシャが遮ったから塞がれたと思っている。そしてなお、それは自分達のせいではなく、アシャの中にあるつまらない独占欲のせいだと、つまりはアシャの悪意だと信じている。

「残酷な視察官（オペ）！」

「それほどの思いを向けられてしまうかわいそうで綺麗なあたし達！」

「きれいでしょ！」

「きれいすぎるって罪ね！」

「きれいでしょ！」

世界を自分のために歪めてしまう。

しゃべり鳥（ライノ）はその見かけとは裏腹に、太古生物の、そしてそれを生み出した遥か彼方の人々の、まさにその本質そのものだ。

アシャは切ないような苦々しいような思いでしゃべり鳥（ライノ）をじっと眺めていた。

（俺も同じだ）

世界のありようを認めず、自分の望むものだけを信じたくて、ラズーンを離れ、こうして一人辺境にまぎれようとしたアシャ自身と。

風に揺れる鳥籠の一つに虚ろな目をして、出してくれ出してくれと叫びつつ鳥籠を揺らす自分が見

えた気がして、胸の底が冷えていく。

(寒い)

命の熱が奪われたようだ。力を使いすぎたせいではなくて、自分の本質の片鱗を突きつけられて、胸が寒くて心が凍える。

(熱が、欲しい)

唇を噛んで騒ぎ続けるしゃべり鳥(ライノ)達に背中を向けると、

「知らないわよ！」

険しい声が引き止めた。

「あの子がどうなっても知らないから！ あなたのせいよ！」

ぐさり、と背中から槍で貫かれたような気がした。

「あなたのせいだわ、視察官(オペ)！」

「あなたがあの子を窮地に追いやるのよ！」

振り返る自分の顔から表情がなくなっているのはわかっている。

「自分勝手に人を哀れむ視察官(オペ)！」

「あなた自身を哀れめばいい！」

「あの子を助けられないあなたを！」

「ざまあみろ！」

「あははは、ざまあみろ！」

きびすを返してアシャは馬まで戻った。

「.....いくぞ、ヒスト」

(そんなことは)

「...わかってるさ」

食いしばった口の間から漏れかけたうめきを、アシャは歯を噛み鳴らしてかき消した。

来ない、か。

小さく吐息をつく、ユーノは目を閉じて背後の籠にもたれかかった。棘は確かに背中を刺すが、それよりもどこからも響いてこない蹄の音を、耳を澄ませて待っていた自分の胸がちくちくと痛い。

「そりゃ.....そうだよな...」

思わず呟いて、それがイルファの口調と似ているのに苦笑する。

リリリリリリリ.....

リュリュリュリュ.....リリリ.....

楽しげに歌う鳴き鳥(メール)の声に目を開く。揺れた近くの籠の影にアシャの姿を見た気がして、それが何のことはない、しゃべり鳥(ライノ)の髪が風になびいただけと気づき、一瞬泣きそうになった。

当たり前じゃないか。

美しくか弱そうな姿をしていても、しゃべり鳥(ライノ)は太古生物。その締め上げる髪のはさつき体感したばかりだし、今も両手足に絡み付いて、ユーノを鳥籠に押し付けている金髪は緩む気配さえ見せない。周囲でしゃべり鳥(ライノ)達はまるでユーノが居ることを忘れたように、肌を撫でたり、囁き合ったり、衣服を整えたりしているのに。

「...来る、はず、ない」

ユーノが見捨てろと言った。レスファートの意識を失わせて無理矢理ヒストに連れ帰らせた。

「だから」

空を見上げる。

鳴き鳥(メール)が長くて柔らかそうな尾を引きながら、彼方の空へ飛び去っていく。

自力で生き延びるしかない、今までと同じように。

ただ今度は、見捨てられたんじゃない、自分が救出を拒んだのだ。

(今までも?)

ふいに、それまで考えもつかなかったその可能性に気がついた。

今までもひよっとして、助けてくれようとした誰かが居たのだろうか。ユーノは自分一人で生きることで手一杯で、その救いの手を知らず知らずに拒んでしまったのだろうか。

だからこんなところで、一人死ぬしかなくなるんだろう。

ゆっくり視線を向けた先に、崩れ朽ちた鳥籠の残骸がある。

何のことはない、ユーノだって、同じなのかもしれない、このしゃべり鳥（ライノ）達と。

きゅ、と唇を引き締めた。

（出よう）

そうだ、見捨てられたんじゃない。きっとレスファートは待っている。アシャは心配し、イルファがユーノが帰ることを思って食事を準備してくれているかもしれない。

（戻ろう）

追い詰められて始めた旅だった。他に誰も名乗り出ることがなかったから、危険を背負って旅立った道にアシャが付き添い、レスファートとイルファが同行してくれた。

けれど今度はユーノが彼らの元へ戻るのだ。彼らと一緒に旅をするを選ぶのだ。

幸い剣は奪われなかった。間合いを計れば髪を切り解き、籠を破り、地上へ飛び降りることもできるだろう。ユーノの背にして数倍の高さだが、下草は厚い、うまく行けば、すぐ走り出せる。

呼吸を整え、そろそろと体を動かして剣を掴もうとしたその矢先、ざわり、と周囲が妙な気配に満ちた。すぐに続いたのは、凍りつくような沈黙、それも次第に緊張を高めていく。

「？」

ユーノは周囲を見回して、しゃべり鳥（ライノ）達が全て一方向を見ているのに気がついた。人形じみた整った顔だがそれぞれ違う造形なのに、全く同じような表情で動きを止めて何かに目を見開いている。

促されるようにそちらを見やって、ユーノもはっとした。

木立の間をよろめくようにやってくる、白い薄衣のライノ。髪はばらばら、手足にはかすり傷と出血の跡、ぎらぎらした青い瞳は怒りに満ちてまっすぐにユーノを見据えている。

（レスは無事か）

頭をよぎった疑問はすぐに解消された。

「よくも、あたし達を虚仮にしてくれたわね」

苛立ったきりきりした声が響く。

「あたしを遠くへ誘い出して、その隙に彼を呼ぶなんて」

「え」

どき、と胸が打った。

「とぼげるんじゃないわ、視察官（オペ）がついているなら、どうしてそう言わなかったの」

道理で『銀の王族』がこんなところに一人でふらふらしてるなんておかしいと思った。

「視察官（オペ）？」

「視察官（オペ）ですって！」

冷ややかに吐き捨てたライノに周囲がざわめいた。

「おペ？」

「知らないとは言わせないわ」

ライノが傲然とした仕草で薄く傷がついた顎を突き上げて見せた。

「ラズーンから放たれた目、『銀の王族』の守り手、世界の規範を遵守する監視者」

しかも、この子についているのは、誰だと思う？

「誰？」

「誰なの、ライノ！」

「言って、いえまさか、まさかライノ！」

しゃべり鳥（ライノ）達が次第に興奮しながらことばを交わす。

「まさかアシャなの！」

「っ」

会話の流れから予想はしたが、その名前が出たとたん周囲に上がった叫び声にユーノは圧倒された。

「アシャ！」

「アシャですって！」

「ラズーンのアシャ！」

「アシャがこの辺境に？ いえ、ええ、そんなことどうでもいいわ！」

美女達が見る見る頬を染め、嬉しそうに笑いながらはしゃぐ。

ラズーンの、アシャ。

「.....視察...官.....」

なるほど、それなら辻褃も合う。

いくらラズーンの使者から地図を受け取ったとは言え、描かれた単純な道筋とは段違いの複雑な行程を戸惑うことなく導くことも、ラズーンやそれに関わること、様々な国の状況や暮らしに詳しいこと、何より年齢を遥かに越えた経験が会話の端々に見え隠れするのも、視察官（オベ）なら当然だ。

（じゃあますます、私なんて）

要らないじゃないか？

アシャがレアナを求めてセレドに降りてくれるなら、いや確かに視察官（オベ）がどこかの国に属することなどあり得ないけれど、あのレアナへの執着を見れば、全く不可能というわけでもないのだろう。

「視察官（オベ）さえいれば簡単じゃない」

「この子なんて要らないわ」

「そうよ、視察官（オベ）、それもアシャだなんて」

しゃべり鳥（ライノ）達はいそいそと身繕いにかかる、それを静かに見回したライノが低い声で唸った。

「ええそう、アシャよ」

ひと呼吸おいて、十分に効果を考えた調子で、

「それに鳥籠を一つ、もう開いたわ」

「なんてこと！」

怒りの声が追隨した。

「誰の鳥籠を？ あたしの方がきれいなのに！」

「何を言ってるの、アシャはあたしの方を望むはずよ！」

「きれいでしょ！」

「なんてこと！」

「あたしのはずよ！」

「選ばれるのはあたしのはず！」

（鳥籠を開いた？）

ずき、と胸が疼いてユーノは眉を寄せた。

鳥籠を開くということは、キスをしたということだ。

（アシャが）

他の誰かと。

確かにこれほど美しいしゃべり鳥（ライノ）達に懇願されれば、しかもその手段がキスだというのなら、並の男なら当然、アシャであろうと誘惑に落ちてても無理はないということか。

（アシャのばか）

レアナ姉さまはどうするんだよ。

お門違いの恨み言だ。

本当に言いたいのはきつと。

「けれどだめだった」

ライノが首を振った。

「アシャは受け入れなかったの、その子の居場所を引き換えにと望んだくせに」

「……え…？」

続いたことばに混乱して、やがて水が砂地にしみ込むように意味が通ってくる。

アシャがユーノの居場所を知るために、交換条件としてしゃべり鳥（ライノ）とキスした、そういうことだと。

「まさか」

「まさか？ 残念ながら本当よ」

思わず呟いたユーノにライノは苛立った声で応じた。

「しかも教えてあげたのに、すぐに扉を閉じてあたし達の好意を裏切ったの」

「なんてこと！」

「こんなきれいなあたし達を！」

「いくら視察官（オベ）でも許せない！」

「まだあるわ」

ライノは唇を歪めた。

「その子を助けるために、アシャは今こちらへ向かっている」

「……」

ふいにしゃべり鳥（ライノ）達は静まり返った。

「……」

食い入るようにライノを見つめていたしゃべり鳥（ライノ）達がゆっくりと無言で首を回す。

「……」

まるで彫像の群れが、自分達を縛りつけていた枷が何か気づいたように。

「……」

古びて今にもねじ切れそうなからくりの人形が、ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、と鈍い音をたてながら首を振り返り、ふいにことりとその動きを止めるようにしゃべり鳥（ライノ）が首だけ振り返った姿勢のまま固まる。

「……」

沈黙の凝視。

大きく見開いた澄んだ瞳は石のようだ。喜びも怒りも消え失せた虚ろな表情。風も止まった。鳴き鳥（メール）も歌わない。木立の葉も鳥籠も、世界が全て静止する。

こちらを見ている動かない顔の、それぞれぼつちりと赤い唇が、まるで一つの意識に操られるように開いて全く同時にことばを紡ぐ。

「お前の、ために？」

「！」

動かぬ空気、まとわりつく濃度には覚えがある、あのクノーラスの居城でドヌーに四方を固められたあの瞬間と同じ、

（殺気！）

とっさに体が動いて剣を手元に引き寄せた次の瞬間、

「っあ！」

まるで黄金の矢のように次々と伸びてきた髪が鳥籠の中に突き刺さり、ユーノの服を裂いた。必死に振り払いかけた腕は絡みついていた髪の毛に引き延ばされ、脚を掴まれ引きずられ、勢いに転がりそうになったのを堪えたとたん、喉に巻き付いた一房に容赦なく締め上げられて倒される。

「つつっ」

もぎ取られそうになった剣を引かれる力に逆らって抱え込むが、一層強く喉を締められ、見る間に頭が加熱した。

「あっ…」

呼吸ができない、肺が焼けつく。

「ん、うっ！」

意識を飛ばしかけたとたん、いきなり別方向から違う髪に引っ張られた。そのままあちらこちらから髪を伸ばしたしゃべり鳥（ライノ）が好き勝手に統制なく引きずろうとするものだから、逆に喉の圧力が弱まって剣を振る隙ができる。

「、の…っ」

激しい頭痛と今にも弾けそうなこめかみの拍動を堪えて剣を振り切ると、ぶつつ、とまるで肉を斬ったような不快な感触があった。持ち主のしゃべり鳥（ライノ）が自分の鳥籠の中で悲鳴を上げて転がる。拮抗していた力を断たれて、違う方向に吹っ飛ぶように引き寄せられたが、同時にそちらから引っ張っていた別のしゃべり鳥（ライノ）も籠にぶつかったり、髪が強く引っ張られたりして叫びを上げる。

「きゃああっ！」

「この馬鹿！」

「許せない、醜いくせに！」

一瞬緩んだ攻撃の手、だが次に伸びてきた無数の金髪が掴んだのは鳥籠そのものだった。

「こうしてやる！」

「落としてやる！」

「潰れてしまえ！」

「壊れてしまえ！」

呪詛の声と一緒に周囲から交互に激しく引っ張られて、鳥籠の中でユーノは剣を抱き込んで転がり回った。

「く…うっ」

籠の棘が突き刺さる。無数の引っ掻きむずがゆく痺れる痛みを晒した部分に残していく。顔を庇うのもままならない、ただ、目を傷つけまいと固く閉じた隙に剣を奪われ、揺さぶられる鳥籠の中で躍らされ、黄金の蛇のような悪意の塊となってしなる髪に叩かれる。

「、うっ」

衝撃に吐きそうになる、揺さぶられる鳥籠が今にも壊れそうにぎしぎし鳴りながら、地上激突すれすれまで落とされ、また跳ね上げられる。さすがに抵抗できなくなって四つん這いになった瞬間、もう一度首を髪で包まれ仰け反った。

「ぐ...っ」

今度はちょっとやそつとでは外せない、喉に幾重にも巻かれた髪に爪を立て、指を押し込み隙間を作ろうとするが、緩く痺れた全身は震えるだけで力は入らない。

「いい気味！」

「あははいい気味！」

「きれいでしょ、あたし達！」

「ぐしゃぐしゃ！」

「もっと汚くなっちゃえ！」

「消えろ！」

「消えてしまえ、あたし達の目の前から！」

「いなくなってしまうえ、アシャの側から！」

「あ、ぐっ」

喘ぎながら開いた口から空気が入ってこない。朦朧とする視界がとらえた空は晴れやかに青い、それが見る見る薄黄色く濁っていく。

（く、そ）

引きずられて鳥籠の上部へゆっくり首をつり下げられていく、もがいた脚の爪先が空を蹴るが、もう届かない。

せめて籠に、足が、かかれば。

霞む意識でなおも暴れる、その次の瞬間、

「きゃああっつっつ！」

引き裂くような悲鳴が響いた。

「なに！」

「何なの！」

「視察官（オベ）？」

「アシャ？」

「ひ、いいいいい！」

およそしゃべり鳥（ライノ）が上げるとは思えない悲痛で掠れた悲鳴が再び響き、ぼんやり目を開けたユーノの視界で一つの鳥籠が枝から離れて転がり落ちた。

「何をしたの視察官（オベ）！」

「今何を！」

「何をしたのか、と？」

恐怖に震えた詰問に、異様に静かな声が応じる。

「何をしているか、と聞くべきだな」

とん、と軽く跳ね上がった姿が長剣を引き抜き、近くの鳥籠を支えていた太くよじれた蔓草を切断する。

「いやあああっつ！」

絶叫する声が鳥籠から響き渡る。どさっと重い音をたてて転がり落ちた鳥籠はそれぞれに歪んで崩れ、ひくひく揺れて中からもがいて出ようとするしゃべり鳥（ライノ）が、また小さく悲鳴を上げながら壊れかけた鳥籠の中に縮こまる。

「まだ足りないか？」

淡々とした声はうろたえも揺れてもいない。

「彼を離せ」

「つく！」

ぎり、っと逆に締め上げられて仰け反った。

「ひどいわ！」

「ひどいわ視察官（オベ）！」

「離せ、と言ったはずだが？」

次は誰の籠を落とす？

耳鳴りの彼方にアシャの声が妙にはっきり聞こえた。

「いや！」

「あやしじゃないわよ！」

「あやしじゃない！」

「っ、うっ」

ふいに喉が解放され、ユーノは鳥籠の中で崩れ落ちた。

「っごふっ、はっ、はっ」

大量の空気にむせ返り、必死に呼吸を整えながら、それでも滲んだ視界でアシャを探す。

(い、た)

風に黄金の髪を舞わせながら、周囲の美女よりよほど華やかな容貌の男は、長剣を抜き身で下げたまま目を細めて微笑んでいる。だが、アシャのこれほど性質の悪そうな意地悪そうな笑みを、ユーノは見たことがない。

「離せ、と言った」

冷徹な響きを宿して、アシャは穏やかに繰り返した。

「もっと仲間を落としたいのか」

「ライノ！」

「やめさせて！」

「やめさせてライノ！」

「卑怯よ、視察官（オペ）」

顔色を無くしつつ、ライノが反論した。

「約束はどうしたの？ 鳥籠の鍵はどこにあるの？」

「俺がここに居る」

アシャはおどけた動作で緩やかに両手を広げた。

「それで鍵があるのと同じだろう」

薄い笑みが唇を覆う。

「何なら鳥籠を落とす代わりに片端から開けてやってもいいが？」

そうなると、さて、誰が一番最初に俺のものになるかが大変そうだな？

冷笑を含んだ声音は傲慢、長剣を納めてゆっくり髪をかきあげる仕草は美しい絵のようだが、端麗な顔に満ちている表情はとても美女を前にした男のものではなく、むしろ。

(こんな顔も、できたのか)

吐き戻しかけて濡れた口を手の甲で拭いながら、ユーノは呆気にとられる。

(まるで)

泥土の中に埋まっている踏み潰された何かの幼虫でも見ているような、強烈な嫌悪。

自分がその前に居ることすら罪悪のように感じる、アシャが美しいだけに一層。

「.....アシャ」

「無事だったか？」

だが、その顔はユーノの声に振り向いたとたん、幻のように消え失せた。

紫の瞳が光を跳ねて、不安そうに頼りなく揺れる。

「.....あまり無事でもなさそうだな？」

「...いや.....大丈夫、だから...」

思わずしゃべり鳥（ライノ）をかばってしまった。

「大丈夫だよ、アシャ」

(あまりにも、ひどくないか?)

背筋がぞくぞくする。

(今の顔で消えろ、とか言われたら)

ユーノは絶対二度とアシャに顔を合わせられない。

周囲のしゃべり鳥（ライノ）達も、アシャが見せた不快感に呑まれたように沈黙している。

「彼の鳥籠を降ろしてもらおうか」

その気配を感じ取っているだろうに、アシャは淡々と命じた。

「...わかったわ」

ライノが合図して、ゆっくりと鳥籠が降りていく。アシャの目の前まで降ろされて、だが、それ以上降ろされない。

「？」

訝しげにライノを振り向くアシャに、相手は目を細めた。

「あなたがあたし達を嫌っているのはよくわかったわ、視察官（オペ）」  
だからと言って、その子をあっさり渡すつもりはない。  
「あなたにも約束を守ってもらうことにする」  
「鳥籠を開けてほしいなら」  
「開けてもあなたはあたし達を見下すだけなんでしょう」  
周囲のしゃべり鳥（ライノ）達が意図に気づいたらしく、陰鬱な声で嗤った。  
「だからあなたに似合いの相手に約束を果たしてもらうわ」  
その子の扉を視察官（オペ）の能力では開けないで。  
「キスしておやりなさいな」  
「えっ」  
ユーノは、凍った。「ほお」  
固まったユーノを見下ろし、アシャは微笑する。さっきまでの冷笑ではない、跳ねるように熱をもって立ち上がってくる感情に、自分が思わぬ褒美を得られるのだと理解した。  
「なるほど」  
「なるほど、って……アシャ」  
呆然としていたユーノがはっとしたように瞬きする。  
「そんなの、」  
慌てた口調で言いかけ、途中で何に気づいたのか薄く赤くなって、視線を泳がせる。  
「そんなの、ボク」  
「どうなの、視察官（オペ）」  
ライノは腕を組み、嘲笑うように声を張り上げた。  
まともに呼称されてびっくりとしたが、ユーノはそれには反応しない。  
(やっぱり、聞かされているのか)  
また薄寒い風が胸の底に吹き溜まる。  
「それぐらいの代償は払いなさいな」  
「男だけどね」  
「いい気味」  
「みっともない、そんな子に」  
「ちゃんと唇にキスよ」  
「頬や額じゃごまかされないわ」  
思わぬアシャの攻撃に怯んでいたしゃべり鳥（ライノ）達が、地面に落ちて怯えている仲間のことを忘れたように、くすくす笑い出した。  
「欲しいなら食ってもいいけど？」  
「あたし達が見てるけどね」  
「ずっと見ててあげるわ全部」  
「あ…しゃ…」  
ユーノは不安そうな目で嗤うしゃべり鳥（ライノ）達を見回す。  
「どう、しよう」  
泣きそうな顔、さっきまで命の危険に晒されていた時の方がよほどきつかったはずなのに、どうしてキス一つでこれほどまでに不安がるのか。  
(きっと)  
好きな男が居るからだ。  
アシャは軽く目を伏せた。  
自分の瞳の中に浮かんだだろう、邪な喜びを読み取られなくなかった。  
(好きな男が居て、そいつに操を立てようとも)  
今ここに居て、ユーノの唇を味わい、彼女を助けられる立場に居るのはアシャだけだ。  
体の内側が冷え冷えして寒い。  
熱が欲しい。  
直接に触れ合って得られる熱、知っているだけに、すぐに満たされるそれを想った。  
「キスすればいいんだな？」  
「アシャ！」  
「ええそうよ、キスして扉を開けなさい」  
それならあたし達も今回の無体は見逃してもいい。



いつの間にか地面に転がったしゃべり鳥（ライノ）達までもが、鳥籠の影からアシャがどうするのか興味津々と言った顔で覗いている。

「でも、だって」

「ということだ、ユーノ」

「何がっ」

「諦めろ」

「でも、アシャ！」

「永久にそこに居るか？」

彼女らと一緒に？

「う」

「一瞬のことだ」

アシャはゆっくり鳥籠に近寄りながら説得する。

「怖いのか？」

「こ、怖くなんかないっ」

「上等」

「うっ」

売りことばに買いことばでユーノが受けて引き攀ったのに微笑を深めた。

降ろされた鳥籠に近寄る。

「...おい」

近寄って改めて、ユーノの顔と言わず手の甲と言わず、見えているほんのわずかな皮膚に無数の傷がついているのに気がついた。

「何をされた...？」

問いかけは形だけだ。さっき鳥籠の中で吊り上げられていたのを見た。四肢を縛られ、棘だらけの籠に押し付けられているのも。まだ手足に絡んでいる金髪や、籠の中に散っている蔦や葉、引き裂かれたり穴が開いたりしている衣服、けれど何より胸を締めつけたのは、見上げてきたユーノの瞳が切なげに潤んでいたからで。

ごく、と自分が呑み込んだ唾に、沸き起こる妖しい感覚を堪えようとしているのを自覚する。

「え...？」

意味がわからないように瞬きする黒い瞳の中に浮かぶのは信頼、この間までは決して向けられることのなかった確かな訴えはアシャの背筋を甘く這い上がる。

「ひどい目に合ったんだろう」

自分を制するために早口になった。

「大丈夫か？ 傷まないか？」

きつうんとひどい目に合ったから、これほど頼りなげに見えて、アシャを求めているように感じるのだ。

けれどきつとユーノのそれは、いわゆる危機に追い詰められた激情で。

一時のもので。

制御しようと構築する理論を突き崩すように、小さく震えながらユーノが伸ばしてくる手を受け止める。

「う、うん。大丈夫、けど気をつけて、その棘、触ると痺れる」

ひどくか細く感じる掌。

「どうした、珍しく素直だな」

ユーノの声が甘くて柔らかい。

なぜ急にこんなに優しい口調になった？

なぜ急にこれほど心を委ねてくる？

棘のせいだよ、そういつつ震えている手を握ると、ひきつったように必死に笑いかけてくる顔に、ぶつっと大きな何かが切れた。

ああ、だめだ。

もうだめだ。

「生きるためだ」

微笑む自分の顔に魔性は透けていないか。

「何なら目を閉じろ」

好きな男を思い浮かべればいい。

「う」

「仕方ないだろう？」

囁きながら、手を引き寄せ、籠ごしにユーノを抱きかかえる。

「あ...の...っ」

「口を塞げ。しゃべってると舌を噛むぞ」

揺れる鳥籠を言い訳にしたが、本音は口を開かれていると中まで侵してしまいそうになるからで。

「でも、棘、刺さってる、アシャの腕まで傷つ...！」

びく、とユーノが震えて目を見開いた。両腕での隙間を押し広げるアシャを呆然とみやる。

「痛い...だろ？」

「わからん」

突き刺さる棘も甘美なだけ、蕩け始めた脳には届かない。未練がましくユーノの手足に絡みついている金髪は、彼女の感覚を盗みとろうとしているようだ。

(奪えるなら奪え)

ユーノに与える喜びをどれほどかすめ取っていこうと、それを上回るものを与えて見せる。

「あ...しゃ...」

背中を撫でる。引き締まった筋肉をなだめるように指先で。

「う...」

そのまま背筋をたどって首筋へ、しつこく残る金髪の下へ指先を潜り込ませると、軽く首が絞まったのか、は、と小さく息を吐いてユーノが仰け反る。揺れた瞳が苦しげに細められる、それがまるで腕の中で極めていくような顔にも見えて。

「くる...し...」

俺のものだ、その顔は。

ひやりとした残酷な喜び、自分の酷薄さに苦笑する。

「すまん」

そっと謝りながら時間をかけて髪を解き落とす。抱き込んだ体から伝わってくる心臓の音が次第に速度を上げていくのに満足する。空気を求めるように唇が少し開いたのを、封じ込めるように覆い被さった。

「ん...っ」

ざわっ、と周囲の気配が凍りつく。

(小さな唇だな)

アシャは感触を確かめる。

(震えてる)

いつかの導師の所では、少年のようにただただ重ねて所有したかっただけ、けれど今ははっきりと、ユーノに自分を刻むつもりで、ユーノの熱を奪うつもりでキスを進める。

閉じた口の奥でかたかたと歯が鳴っている。まるで押し開くように重ねるアシャの唇に、必死に服を掴んでいる手も、抱き込んでいる体も、今はまだ恐怖だけしかないのだろうか、竦んで冷え込んで揺れている。

(熱を寄越せ)

そんなふうには守ってないで。

「っ、...」

ぞくっ、とユーノが脚から震えた。重ね直したアシャの唇がユーノの唇から僅かにずれて、輪郭を辿るように舌先を触れたからだ。

「あっ...」

どこか悲鳴じみた呻きを漏らして、ユーノが崩れかけた体を堪えたのがわかった。

きっと初めてだと思っているんだろう。

「は...」

眉を寄せて拒もうとする、その切なげな顔をゆっくり眺める。

もし誰かがこの唇にもう触れていたとしても。

(それより強く)

俺を刻む。

自分が猛った顔をしている自覚はある。

「や...」

微かな拒否が口から溢れかけたのをあっさり塞いだ。んっ、と口の中で唸る声が追い詰められて苦しそうだ。

(甘い)

こんな唇を知っていただろうか？

(柔らかい)

ユーノの体の中で一番柔らかいところ、けれどももっと柔らかいところに侵入していくやつがいるのだ。

「んっん」

逃げかけたのを頭を押さえた。驚いたように見開いた瞳が泣きそうだ。その瞳に視線を合わせ、目を細めてにっこり笑いかけてやる。今までならばそのまま溶ける、アシャの強い望みに応えて、自らを投げ出す女がほとんどだが。

ざらりとした殺気が潤んだ瞳の向こうに広がって、唐突にがしっと胸元を握られた。

(鮮やかだな)

もっと深くまで侵したならば、この瞳はアシャを永久に忘れないでいてくれるだろうか？

「ん、んーっっ」

唸りながらアシャの抱擁から逃れようとするユーノを、もう少しと欲張って舌を突き出そうとした瞬間、

びしっ！

「！」

鋭い音が響いた。

(おしまい、か)

やれやれと思いつつ、唇を離し、見る見る真っ赤になったユーノが罵倒しようとしたのを強く胸に抱え込む。

「ああっ！」

次の瞬間、鳥籠は弾けた。

まるでとても不愉快なものを口にした獣のように、どこもかしこも一気に轟を弾けさせ、ユーノを吐き出すように空中で分解する。

「きゃああっ！」

「いやあっ！」

その衝撃が伝わったのか、周囲の鳥籠の幾つかが枝からまた落ち、扉を弾けさせ、しゃべり鳥(ライノ)達の歓喜とも恐怖ともつかぬ悲鳴が響き渡った。

「アシャああっっ！！！」

転がり落ちてきたユーノはどさりと見事に腕の中にはまってくれたし、そのまま地面に転がったアシャに馬乗り状態でのしかかってくれるという、願ってもない状況だったのだが。

「何をすっ！」

突きつけられたのは抜き放たれた剣。切っ先は喉。

「何をって……キス、ただけだが」

びくっ、とユーノが大きく震えた。

「違うだろ！」

「違わないだろう」

アシャは地面に寝転がって、自分の上で騒ぐユーノを楽しく見上げる。紅潮した頬、乱れた髪に縁取られた顔は珍しく動揺していて、しかも唇がまだほんのり濡れていて。

「何ならもう一度証明しても」

「しなくていい！」

激怒しているユーノは伸ばした両手に応じようとせずに、慌ただしくアシャの上からも降りてしまう。

(やれやれ)

まあその方が、ぼちぼちいろいろとよかったのだが。

溜め息まじりに、アシャは起き上がって胡座を組んだ。

「何が不満だ？」

「何がって！」

「キスして助けろと言われたから、キスしたんだぞ？」

「う」

「礼を言われても、罵倒される理由はないと思うが」

「う、う」

「なーんだ！」

ふいにあつけらかんとした声が響いて、アシャはライノを振り返った。

てっきりユーノと同等、それ以上に激怒しているかと思っていた相手は、なぜか異様に明るい顔で大きく頷いている。

「そういうことだったの！」

「は？」

「あなた、男の方がよかったのね、アシャ！」

「え？」

ユーノががちりと凍りついた。

「だって。鳥籠が壊れるほど。その子のことを」

ライノがこれみよがしに肩を竦めて横目で崩壊した鳥籠を見やる。

「それならあたし達に冷たいのもわかるわ！」

「おい」

「そうね！」

「そうだったのね！」

項垂れていた周囲のしゃべり鳥（ライノ）達が一気に顔を上げた。

「なあんだ！」

「アシャはそういう趣味だったの！」

「女に興味はなかったの！」

「.....おい」

しゃべり鳥（ライノ）がアシャのことを知っているのなら、数々流れた美姫との噂を知らぬわけがない。様々な王宮で、華麗な舞踏会で、繰り返された宴の席で女性達に取り囲まれたのを聞いていないわけがない。

「ア...シャ...？」

ひきつったユーノに、思わず強く否定する。

「違うぞ」

びく、とユーノが顔を強張らせて、なおも付け加えた。

「そんなつもりじゃない」

ふわ、とユーノの瞳が驚いたように見開かれる。

「いいえ、そうなのよ、きっと！ ああなあんだ、悩んじゃった損しちゃった！」

ライノは朗らかに笑った。

「アシャは男が好きなのね！ だからあたし達が魅力的に見えないのね！」

「だって、きれいでしょ！」

「あたしはきれいでしょ！」

「男が無視するわけではないわ！」

「きれいでしょ！」

「ねえきれいでしょ！」

「他の誰よりきれいなんだもの！」 周囲のしゃべり鳥（ライノ）は、まるでもうアシャ達などどこにも居ないように、明後日の方向を向いて口々に声を高めていく。転がっているしゃべり鳥（ライノ）はそのまま鳥籠の中に踞り、開いた扉もあるというのにそれには目も向けず、むしろ背中を向けて籠に捕まり、如何にも本意ではなく捕まったのだと言いたげに、外へ向かって声を放つ。

「ねえ見て！」

「きれいでしょ！」

「誰よりきれいでしょ！」

「ええ、よおくわかったわ！」

ライノはすっきり爽やかな、けれどどこか意地悪い微笑で言い放った。

「アシャは男好きなのよ！ 女じゃなければ誰でもよかったのよ、男であればよかったの！」

「おいおい」

なんだその言い草は。

「そうよ、アシャは男が好きなのよ！」

うんざりしているアシャを放って、ライノは声高に叫びつつ、どんどん木立の向こうへ消えていく。

「あいつ.....言いふらして回る気か...？」

溜め息まじりに立ち上がり、眉をしかめる。

まあそれはそれで、余計な誤解をされなくて済むが。

「行こう、もう彼女らは俺達に興味がないみたい……ユーノ？」

「……ぶ……くく…くくっ」

突然、ユーノが吹き出して呆気にとられた。

「アシャ…が……男がいい……だなんて」

そりゃ、そういう感じもするけどさ。

さっきまでの可愛らしさはどこへやら、ユーノは体を折り曲げて笑っている。

「イルファは喜ぶだろうなあ」

「おい」

「それどころか、妙な取り巻きもできそう」

「あのな」

「ほんとに男のほうがいいの？」

ちらっと悪戯っぽい目で見やっけて来たユーノが付け加え、反論しようとした矢先、ふい、と目を逸らせた。

「男がいいから」

「？」

「男の人がいいから……私にでも、キス、できたの……？」

「何言ってる」

手を伸ばして俯きがちになった頭をくしゃりと押さえる。

「俺は色惚けじゃない」

ちゃんと相手は選んでる。

証明するようにくしゃくしゃとユーノの頭を撫で回した。

さっきまで震えていた熱はない。けれど、掌にあたる小さな頭がひどく愛しく大事なものに思えて、そのままもう一度抱き込みたくて堪らない。

逃げるかと思ったユーノは大人しく頭を撫でられながら、小さな声でつぶやいた。

「……ありがと」

優しいね。

ふいに、ぱっと顔を上げて、ユーノがにっこり明るい笑みを浮かべた。

「大事な人へのキス」

もらっちゃってごめんね？

どこか消え入りそうな儂い気配にどきりとする。

「ユーノ？」

「私だったら、好きな人以外にキス、できないな」

「う」

暗に自分の無節操さを詰られた気がしてアシャは怯んだ。

そりゃ確かに今まではあれやこれやと相手が途切れたことはない、ないが今はとにかくお前が。

「でも、アシャは違うんだよね」

何が？

確認されて間抜けな問い返しをしそうになって口をつぐむ。

「私も、アシャ、みたいな男の人に、生まれたかったな」

へへへ、とユーノは笑った。

「大事な仲間のためなら、多少は自分の信条曲げてもあらゆる手立てを打てるような男に」

自分の信条曲げても？

ことばの意味が微妙に伝わってこない気がして眉を寄せる。

それはつまり、俺は不本意なキスをしたって考えてるってことか？

ようやくそれに思い至って慌てて口を開く。

「ユーノ、俺は」

お前が大事だから。いやむしろ、お前が欲しかったから。

「それでさ！」

言いかけたことばをあっさり封じられて、

「私も、アシャみたいに器の大きな剣士になる」

これからもよろしくご指導、お願いします！

改まって頭を下げられ、伸ばしていた手が宙に浮いた。

「さ、いこ！ レスが待ってるよ」

「ユーノ！」

はっとして我に返った時は既に遅く、さっさとヒストに跨がったユーノはもう向きを変えている。  
そのまま置き去りにされそうで、急いで馬のところに駆け戻る。

だがユーノはアシャを待つ前に走り出す。

「ユーノ！」

叫ぶ声に振り返らない。

「違うんだ！」

「わかってる一つ」

明るい声が返ってくる。

「心配しなくていいから一つ」

けれど速度を落とさない。

「違う、俺は！」

何がわかってる？ 何もわかってない、俺のことばを聞いてもいない。

「く、そ！」

このまま距離があいてしまったら。

アシャは必死にユーノに轡を並べようと駆ける。

(十分、だろ?)

ユーノは揺れるヒストの背中で、溢れた涙を頭を振って振り落とす。

(もう、十分だよな?)

あんなに甘いキスなのだ、アシャがレアナに贈るものは。

そんな大事なものを、ユーノを助けるためにくれたのだ。

(ごめん、レアナ姉さま)

ユーノにキスなどしたがるわけではない、としゃべり鳥(ライノ)は言った。そんなことを考えるのは、きっと女に興味がないからだろうと。

そこまで言われてしまうような容貌なのだと、今さらながらに思い知った。そんな自分にキスしたからと、あそこまでアシャが不当に扱われてしまうほど。

(ごめん、アシャ)

ほんとは甘えてはいけなかったのだろう。

それでもアシャはキスしてくれたから。

棘のついた籠をものともせず腕を差し入れて、引き寄せて抱き締めてくれたから。

きゅ、と嘯みしめかけた唇に、まだアシャの唇が触れているようで切なくなる。それが二度と触れることはないとわかって体中がずきずきする。

(頑張ろう)

頭を上げて風を胸一杯に吸い込む。

決して手に入らない夢を一瞬だけでも味わえた。

(頑張ろう)

思いもかけなかった褒美だ、許されるはずのない温もりだ、それをこの唇に受け取れたのだから。ざああ、っと風に鳴る木立の音に重なるように隣にアシャが並んでくる。乱れる金髪、まっすぐに前を見据える紫の瞳、細身ながらその腕の確かさ、胸の厚さは体が覚えている。

(頑張ろう)

滲みかけた涙を呑み込んだ。ゆっくりと息を、体の隅々にしみわたらせるように吸う。

(先はうんとまだ長い)

伝説でしか知らない太古生物、名前しか聞いたことがない視察官(オペ)の存在、得体の知れない『運命(リマイン)』の名を持つ敵、『銀の王族』である自分とその意味、そして。

(ラズーン)

性を持たぬ神々が住まう世界の統合府、おとぎ話のようなその存在は急速にユーノの前にその姿を現しつつある。

(そこで一体何がある?)

二百年祭とは何なのだ?

(なぜ世界中から急に人々が集められている?)

謎は増えていくばかり、アシャについても、ラズーンの視察官(オペ)らしいとようやくわかってはきたものの、なぜセレドに来たのか、なぜユーノと共に旅などしているのか、そもそも視察官とは一体何なのか、アシャはユーノに何も語ってくれていない。

ふとしゃべり鳥(ライノ)達の嘲りを思い出す。あれはユーノの容姿に関してだったけれど、獲物を食わずに死ぬまでおもちゃにするレガ、いきなりは襲ってこずにじわじわと這い回る範囲を広げて街や人を呑み込むドヌーなど、太古生物には共通した何か、まるで今この世界に生きている命そのものを弄び嘲笑う気配がある。そしてその底には。

(怒り?)

そう、あえていうなら、それはこの世界への怒りや妬みに近い気がする。

(でも、なぜ?)

「クエアアアーツ！」

ふいに鋭い鳴き声が空を吐いた。

前方の丘の上にサマルカンドの白い姿、その下で馬に乗って手を振っているレスファートとイルファの姿がある。

「ユーノお！」

陽の光にプラチナブロンドを輝かせて、レスファートが待ちかねたように両手を振り始めた。イルファがレスファートの体を必死に支えている。

「レス！」

「ユーノユーノ！」

躍り上がるレスファートに速度をはやめる。遅れるまいと側につくアシャに微笑し、目を閉じて胸の中で繰り返す。

(ラズーンへ行こう)

全ての謎が集まっていく、世界の中心へ。

(そこでこの体で確かめる)

世界に今何が起きているのかを。

顔を上げ、太陽を仰ぎ、深く息を吸う。

目を開き、腹の底から大声で叫ぶ。

「レス！ ただいまーっっ！」

「ユーノっ！」

ついに馬を下りたレスファートが転がるように駆け寄ってきつつあった。

『ラズーン 4』へつづく。